
現代っ子パーティ・クエスト

空色レンズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代っ子パーティ・クエスト

【Nコード】

N82510

【作者名】

空色レンズ

【あらすじ】

日曜日なのんびりとした朝。日比谷真琴と美琴の姉妹、彼女たちの老飼い猫トリルが、そろって朝食を食べようとしたその瞬間……響き渡る鐘の音。訝しむ暇もなく、二人と一匹はファンタジーな異世界へ突然トリップ！『賢者』と名付けた少年から力を授けられ、右も左も分からぬままこの世界で生き抜くことに……。とりあえず王道を突っ走る予定な異世界召喚物語。 現在、月・木更新中

(1) ハジマリの鐘が鳴る(前書き)

同じく創作している異世界トリップ小説『アンデット・ターン!』
に続きまして、今度は王道も王道な異世界トリップです。べ、別に
トリップばかり書いているわけじゃないですよ!? (説得力皆無)
こほん、それでは皆様、お付き合いの程よろしくお願いいたします
(深々)

(1) ハジマリの鐘が鳴る

「がたん、かちん、カチャカチャカチャ……」

日比谷美琴は、朝食の用意をしていた。フライパンを火にかけ、適当に野菜を切り、卵をといて全て炒める。あっという間に野菜オムレツの完成。と同時に、オーブンレンジがチン、と音を立てた。

「ん、今日は成功」

戸を開き、焼き上がったトーストの具合を見て、美琴は小さく頷く。他にも昨日の夕食の残りを温め直して、食器の準備も始める。

「お姉ちゃん、ご飯ー！」

大体準備が終わったところで、台所から顔を出し、正面に見える二階への階段に向けて大声で呼びかける。返事はないが、トットツと軽い足音が聞こえてきた。

「にい」

「トリル、おはよ。トリルの分はこっちな」

階段から現れた、灰色と白の毛並みが入り交じった猫……トリルに笑顔を向ける。五人の人間が座れるダイニングテーブルの椅子のうち、一つを引き出して、テーブルの上に皿を置くと、トリルは少し危なっかしい動作でテーブルの上へ移動した。

「に」

「先に食べてもいいからね」

形だけそう言って、美琴は台所へ戻る。美琴が朝食をつくる今の生活のリズムが出来上がるよりもずっと前から、トリルは日比谷家の面々がそろって手を合わせない限り、自身の食事にも手を付けようとはしない。

しばらくして、青いフレームの眼鏡をかけ、よれたジーンズに厚手のカーディガンを羽織った姉、日比谷真琴つひやまこが階段を下りてきた。寝ぼけ眼のまま「んー」とつぶやき、所定の位置に座る。

「……はよ、トリル爺さん」

「んじ」

「はいはい、お姉ちゃんもっとしゃきつとするしゃきつと！ 日曜日はいいえ、ダラダラするなんて許さないんだから！」

「へえへえ」

夕方にはやかましいくらい騒ぎ出すのに、朝ともなるとこの調子。両親がとある事情で長いこと家を空けているが、自身の態度を改めようともしない姉に、美琴は苦笑しながらため息をつく。

ぼーっとしている真琴は放っておいたまま、コップに牛乳を注ぎ、作った料理を台所から運んでくる。セッティングを終え、エプロンを取った美琴は、トリルに笑いかけて両手を合わせた。真琴もゆっくりと手を合わせ、トリルは背を丸めながら二人を見上げている。

「それじゃ、「いただきます……」「」

「じゃ」

そのときだった。

カーン カーン カーン……

「鐘の音？」

小さく、美琴が首をかしげる。眠たげなまま箸に手を伸ばしかけていた真琴は、眉をひそめた。

「この近くにや寺もなんもないよな。ていうか、近くねえ……？」
「にいつ」

カラ、ガシャンツ！

美琴が持っていた茶碗がひっくり返り、真琴の持っていた箸が落ちた。

……日比谷の家から、二人の少女と一匹の猫が、いなくなった。

(2) ～ ファーストステージ・森の中

ぺちぺちと軽く頬を叩かれて、美琴はうつすらと目を開けた。目の前には、厳しい表情を浮かべた真琴の顔。

「あ、お姉ちゃん」

「美琴、意識ははっきりしてるな？ あたしがはっきりしてんだから」

「ん、うん？ そうだね…… ってさぶ！？」

思わず震えて、美琴は周囲を見回す。そして絶句した。

とりあえず、至る所緑、緑、たまに茶色で緑。とにかく緑な森の中。森林と言うより密林。なのになんかちやかくちや寒い。それもそのはず、空を見上げれば星がきらめく漆黒の……。

「ここ、どこ？ しかも私たち朝ごはん食べるつもりだったよね？

なんで夜なの？ そんなに寝ちゃったの？ ねえお姉ちゃん」

「落ち着けー。とりあえず落ち着けー美琴。疑問系で泣きそうな顔キープしたまま姉の首を絞めるな」

首を絞められているわりにのんびりと返答する真琴のカーデイガンの中から、「にいー」と小さく鳴いて、トリルも顔を出してきた。

「あ、と、トリルもいるの！？」

「おー、なんか近くでぐったりしてたから拾ってきた。いやあ危ない危ない。あのまま見つけれなかったら凍死してたな」

「……お姉ちゃん、私も寒い。カーデイガンに入れて」

「はっはっは、寒いのはお互い様。ちなみにこのカーデの下、あたしやタンクトップ一枚だけ？」

しばし沈黙。七分袖のワイシャツをしつかりと着込んでいた美琴は、呆れた表情で真琴の両腕をさすり始めた。「くすぐってー」と言いつつ抵抗しない真琴に抱えられ、トリルも眠たげに鳴く。

「……どうしよっか」

「さあなあ」

『あー、やっぱり困ってるねえ。そりゃそうか』

特に答えを求めている美琴の問いかけに、やはり答えを持ち合わせていない真琴が返し、聞き慣れない人物の声を楽しげに響いた。

「「？」」「」

疑問に思っ、声が出たと思しき方を見ると、そこには一人の少年が立っていた。年の頃は十二歳ほど、薄い金色の髪が鎖骨辺りまで伸ばされている。彼は、だぶだぶのローブを引きずって、近くの木の根っこに腰掛けた。

『いや、悪い。そっちのぴしっとしたかつこうしてる嬢ちゃんの困り具合があんまり予想通りで』

『いよっし、これが王道で横道な異世界トリップファンタジーと仮定するならば、あんたがその元凶だな。てや』

『って、ちよ、いきなり石投げつけるか!?!』

真琴が軽く投擲した石を、手で受け止めるわけでもなく、比喻でなく『姿を消して』かわしたその少年は、再度ローブの裾をはためかせながら登場、深いため息をついた。

『はあー、これまた難儀な人まで呼んじゃったな、オイ』

「自業自得だろう」

『はいはい、ちなみに王道と横道って、読み方一緒だけど意味真逆だよ?』

「王道的展開の中というものは、今の私たちにとっては横道でしかないということだ。いや、ちょっと違うな……都合が悪い、面倒くさい。ふむ、タイムリーな単語が出てこないな」

「おっお姉ちゃん!? なんでそんなに落ち着いてられるの!?

今の子一瞬、き、きえ、消え」

「ああ、そういえば消えたな」

呂律の回らなくなった美琴の言葉を、真琴があっさりと引き継ぐ。もう何も言えなくなった美琴は口をパクパクと開閉させながら、姉を見上げ、少年を見つめ、とにかくせわしなく視線を動かし続けた。いた。

『あー、姉だけでも冷静ならいいか』

「いや、表面上ポーカーフフェイス気取ってるだけで、内心カナリきよどつてるぞ?」

『……いいから、とりあえず聞いておいて。まずはきちんと謝る。すまない、急にこんな所へ引きずり込んで』

突然の少年の謝罪。これには真琴は目を細め、美琴はぴくりと肩を震わせた。

『本当はこちらの世界のこととか、君たちの世界との違いとかについて直接話したかったけれど、今はもう時間がない……』

少年はそこまで言うと、手の平を下に向けるようにして両手を重ね、ゆっくりと目を閉じた。ぼんやりと、彼の足下が円形に光り出す。と、それに連動するように、真琴、美琴のそれぞれの足下も光

り始めた。

「え、え!?!」

「……」

最後はあまりのまぶしさに目をつむってしまふ。と、美琴は急に髪の毛を束ねられるような、窮屈なものを感じた。目を閉じたまま手を挙げると、自分の長髪が普段学校に行くときのようにポニーテールにまとめられていた。次に、ワイシャツやジーンズ感覚が消え、やや重量感のある布地が全身を覆う。

「な、なに……」

光がおさまって、美琴が目を開けると、正面には感心したような表情の少年が何度も頷いていた。

『ああ、なかなか似合ってるじゃないか』

「え?」

言われて自分の格好を見下ろす。手には白い薄手の手袋がはめてあり、ファンタジーでよく見る焦げ茶色のフード付きのマントを羽織っている。下の服は足首辺りまでの長さの長袖ローブに、これまたそのローブ並みに長いベストのようなもの。それらを一緒くたに一本のベルトがウエストの位置で留めている。

まるでお伽話の魔法使いみたい、と心の中でつぶやいて、美琴は真琴の方を振り返った。そして、噴いた。

「……ん、動きやすい、かな」

真琴の服装は、マントこそ美琴と同じだが、中の服はずいぶん活

動的だった。肘までの長さのシャツに、ポケットのたくさんついた深緑色のベスト。ぴたっとしたズボンに複数のベルトで留められていて、そのうちの一本にはなぜかホルスターのようなものがついていた。足下は、美琴が柔らかそうな革の靴なのに比べて、膝まで覆うウェスタンブーツ。

『それぞれの特性に合わせた格好にしてみた。ちなみに、そっちの猫もちよいといじらせてもらったよ……ていうか、それ相当な爺さんだよな』

「あー、もう十八年生きてるっていうしなあ……」

『う、うう……首が重いわい』

いつの間にか真琴の手元からいなくなっていたトリルは、彼女の足下でだらんと地面に横たわっていた。その首には、少し凝った装飾の細い首輪がはめられている。

『え、重さは全然無いですだけ』

『阿呆、首に何かがついてるといふ状況が嫌なんじゃ。首輪なんぞ、わしゃこの人生一度もされたことないし』

「……つて、トリルがしゃべってるうううううっ！！？」

今さらながら、美琴が叫んだ。あわあわとさらに奇っ怪な動きを繰り返す美琴に、さすがの真琴も呆れの視線を送る。

「さっきからしゃべってっけど？」

「え、なんで、どうして！」

「その子ども……ていうか、あたしたちのこと『嬢ちゃん』って言うてたから年齢自体は年上と推定して、なんかいろいろ知ってるっぽいから、うん、仮名『賢者』、賢者の魔法だろ」

「お姉ちゃんなんかあっさりこの場の状況に順応しすぎじゃない

「!？」

「当たり前だ、ぶつちやけ今のこの状況、あたしが書いてきた、もしくは書こうとしてきた小説の中にごまんとあるテンプレパターンだ」

「……ふうん、賢者、ね」

いつの間にか妙な口論を繰り広げている姉妹を眺めて、少年は右手をそつと顎の下へ添えた。ただ、その一動作だけでも、彼を子どもとは呼ばせない、どこか老成した雰囲気をもとっていた。

「のう、賢者よ」

「ん？ 賢者っていうの固定されたわけ」

「わしの飼い主がそう決めたのなら、わしはそれに従うからの。この場合、僕の方が精神的にも実際の年数的にも上じやが」

「うん、じゃあいいや。僕のこと賢者って呼んでくれれば……」

少年……もとい賢者は、今だ口論を続けている二人に向けて、パンパンと大きく手を叩いた。

「はい、その二人、一旦口閉じて。簡単に自己紹介とかイロイロ済ませるから」

「ん、ふひえっ!？」

「む」

途端、二人は何もしゃべらなくなり、何かに操られるようにして賢者の方に顔を向けた。

「よろしい。ではまず、僕のごことはそつちの姉の言葉を借りて賢者と名乗っておくことにする。まず、僕はこの世界において人間じゃなく、さらに普通の人間にとって不可視の存在でもある。おーけー

『？』

こくこくと頷く二人。

『それじゃ、今度はちよつと二人と一匹について聞いてみるかな…
…姉の方、簡単に教えて。フルネームと年齢と特技』

そう言つて賢者が指を鳴らすと、眉根を寄せて喉をさすっていた
真琴は、目をぱちくりさせて口を開いた。

「あ、あー……声出た。ええと、日比谷真琴。十六歳。特技は立つ
たまま寝れること。速読。空想」

『うん、じゃあ次妹』

もう一度、賢者が指を鳴らす。今度は美琴の言葉が解放された。

「ぶはっ！？ え、あ、日比谷美琴。十四歳。特技、特技は一家事
全般！」

『最後、猫』

『トリルじゃー、一応、生きてる年数は十八歳になるの。特技は日
比谷の家のものの言うことが分かることじゃ』

『うん、でも今ならどんな人間の言葉も分かるけどね』

一通りの情報を集めて、賢者はしばし黙考する。閉じられていた
瞳が開かれたとき、真琴と美琴は、彼の真剣で、真摯な眼差しに言
葉を失った。

『僕は、とある事情から君たちをこの世界へ召喚した。君たちがい
つ元の世界へ帰れるかは僕にも分からない。ただ、きつと帰ること
ができたなら、ここで起こったことはすべて「なかったこと」になる

だろう。君たちには、突然だが、この異世界で生き延びて欲しい。そのため力は今授けた。今は未だ使いこなせないかもしれないけれど、力は君たちとともに成長するはず。今は時間がないから、詳しいことはこっちの荷物の中にあるものを調べてくれ」

そこまで言って、賢者はどこからともなく取り出した革の肩掛け鞆を、真琴の方へ差し出した。それを受け取り、真琴は賢者の次の言葉を促す。

「……ここは、きっと君たちにとって危険な世界となるだろう。でも、君たちの助けとなる人だつて現れる。どうか生きて、出来うる限り、僕も君たちの手助けをしよう」

「……なんで、なんで私たちなの？　なんでこんな、変な風になっちゃってるのさあ！」

賢者の雰囲気にも飲まれた美琴は、とうとう堪えきれず、えぐ、と嗚咽を上げた。ぼろぼろと涙がこぼれ落ち、賢者の表情が歪む。と突然側頭部を押さえ込まれ、何かに強く押し当てられた。きよとんとして見上げてみれば、すぐ近くにある姉の仏頂面。

「賢者、さ。その言い分だと、時間はかかるかもしれないけど、あたしたちが死なない限りは元の場所へ戻れる可能性もあるってことだな？」

『ああ、その通り』

「……いいさ。異世界召喚サバイバル、やってやろうじゃん」

「お、お姉ちゃん？」

普段より一層低い声でつぶやいた姉を、美琴は怯えた目で見つめる。そんな美琴に、真琴はにやりと笑って応えた。

「美琴、こうなりやヤケだ。現実主義なんて知ったことか。現に今、目の前にはトンデモ設定がごろごろしてる。あたしもいるし、なんか地味に一番魔法効果受けて会話できるようになったトリルだっている。ここは一つ、腹をくくって元の世界に戻る方法探そう。な？」
「う、うう……うん」

『というか、儂らをここに呼んだのがお前さんだとするなら、お前さんなら元の世界に戻せるんじゃないのかねえ？』

美琴が真琴の言葉に頷いたのと、トリルが猫のわりに鋭い指摘を賢者に向けたのはほぼ同時だった。勢いよく睨みつける美琴に、苦笑を向けながら、賢者は答える。

『僕の力は一回こっきり。君たちを呼び出した時点で、僕に異世界を繋ぐ力はもう残されてはいないよ』

そして、ふわりと賢者の身体が浮かび上がる。ロープの中心から、ぼんやりと淡い光が現れた。

『マコト、ミコト、トリル。とにかく、明日にはこの森を出て。鞆の道具を使えば何とかなるはずだ。そして、ここから一番近い町…』

…「風車町：シスタ」へ』

光が現れた場所から、徐々に賢者の姿が薄れていく。待って、と手を伸ばしかけた美琴を、真琴の手が押さえ込んだ。

『巻き込んでしまってますまない。生きて、生きて……どうか、元の世界へ』

そこで、賢者の姿は完全に消えてしまった。

「……お、姉ちゃん」

「んー？」

「これ、夢じゃない？」

「夢じゃないな。感触あるし、匂い分かるし、腹減ったし」

ありがちな現実逃避の言葉に、真琴は苦笑を浮かべた。ぽんぽんと、朝食を食べ損ねた自身の腹を叩き、賢者から受け取った鞆を見下ろす。結構な重量があり、おそらく中には数日分の食料が入っているのだろうな、と予想できた。

(毛布、って入ってないのか)

片腕に美琴をしがみつかせたまま、ごそごそと鞆の中を探る。すると、手の平サイズの長方形でカーペットのような指触りのものが二枚出てきた。厚さは一センチ程度で、しばらくいじくっていると端からふわふわとほぐれてきた。

「お、これ寝具か？　すげえ、一発で当てた……ん、こっちは、本？　ナイフが数本に、瓶詰め。この袋は水かな」

「お姉ちゃん、すごいね」

「いや、むしろお前が近くでテンパってくれてたから、「あ、こりゃ冷静なふりせな」って思ってた」

『わしも、いろいろテンパっとるんじゃないが……』

「あー、うん。トリル爺もおいで」

二人と一匹は近くの木の根っこに背を預け、トリルは真琴の腹の上に、美琴は真琴と寄り添い合う形で、広げられた毛布を被った。薄いわりに、なかなか保温性に長けている。

「……あつたか」

「だな。一旦ここは眠っちゃまって、明日、朝になってからいろいろ考えよう。あの賢者が言ってたとおりに」

ぐ、と真琴の毛布を握る手に力がこもる。

「……異世界トリップ、生体験できるたあね。まったく」

理由も、何もない。本当に突然巻き込まれてしまった現象。

「これからは、トリップもの書くのやめっかな？」

と言いつつ、むしろ空想加速しそうだな、と苦笑し、真琴は誰よりも早くに寝息を立て始めた。

(2) 〽 ファーストステージ・森の中(後書き)

これは二人そろって召喚されていますが、よくある『片方が初っぱなから優秀で、もう片方が裏方でチートになる』という展開ではありません。二人ともほどよくチートになりながら頑張っていきます。

(3) 「不安だなあ」

毛布を被って一言三言つぶやいたかと思ったら、あつという間に寝入ってしまった真琴に、美琴とトリルは目をあわせた。

「……ねえ、トリル。お姉ちゃんって楽観的すぎない？」

『確かにのう。もうちょっと混乱してもいいと思うんじやが』

「だよな？ 私があそこであれだけテンパってたの、全然変じゃないよね、むしろ普通だよな！」

『み、美琴、声大きいぞ。真琴が起きてしまっわい』

「あ、ごめん」

美琴は一度口を閉じ、姉の呼吸音を聞きながら幾らか気分を落ち着けた。

「……それで、さ。ここ、本当に異世界、なのかなあ」

『うむ、儂らのいた世界とは、まず匂いからして違うからのお』

「匂いで世界が分かるの？」

『ここは、怖いところじや』

ぼそぼそと告げられたトリルの言葉に、美琴は無意識のうちに身体を震わせる。

「怖い、の？」

『なんだか、分からないものが多いのじや。儂だって、琴音…』

…美琴たちの母親に飼われ始めたときは、まわりが分からないものだらけでのう。あのときとそっくりな気分じや』

「……それって、単に急にまわりの環境が変わったから、じゃないの？」

美琴の小さな落胆が込められた言葉に、トリルは髭を震わせる。

『む、い、言われてみれば……そうかもしらんの』

「はぁ……生きて、って、私たち、まだ子どもなのに」

消えてしまった、少年の姿をした賢者の言葉を思い出し、美琴はため息をつく。

いつも通りの朝、美味しそうな朝食、突然響いた鐘の音、光、光、ヒカリ……。

『とにかく、今は真琴のように身体を休めるのが先決じゃ。ほれ、今日は美琴も早起きだったのじゃろ？ 寝なされ寝なされ』

「うう、はぁい」

自分の中での質疑応答は明日に持ち越し。姉とともに、今後のことを考えなくては。

……いや、自分が中心となって決めることになるか？ と美琴は目をつむりながら、うっすら冷や汗を流した。

(3) 「不安だなあ」(後書き)

今回はほとんど独白、間章みたいなものです。

(4) リサーチせよ異世界事情

「さて、あたしも爆睡したおかげでかなり頭が冴えている」

「よかったねーお姉ちゃん。私は逆に寝不足だよ……」

元いた世界での姿を比べると、正反対な雰囲気を漂わせていた姉妹は、昨夜眠った木の根元から移動せず、その場に毛布を敷いて、賢者からもらった鞆の中身の確認を始めた。

「まずは、同じような毛布がもう一枚分。これはなんかあった時用にとっところ。一枚で十分な大きさだし」

「こっちのナイフは……うわ、十徳ナイフみたい。いろんな形が押し込んである」

「それが二個、と。あとはー食料っぽいものに水にロープになんかよく分かん棒に、……意味深な本」

そう言っつて、真琴はゆっくりとそれを持ち上げる。元の世界でのハードカバー並みの厚さで、縁に装飾などもされておらず、やや古びた感じの革の表紙をしている。タイトルも特になし。

「お姉ちゃん、一個質問」

「なんだ」

「もしその本がこの世界での言葉で書かれてあるとして……読めると思う？」

「あの賢者がケチつてなければ、多分読解能力やヒアリング能力が会得されてる……はず。自信ない。読めなかつたらそれまでだ」

投げやりに答えて、真琴はぱらりとページをめくる。そこに現れた文字に、真琴はしばし硬直した。

「よ、読めなかった？」

「……いや、普通に日本語だ。これ」

『どれどれ』

確認し終えた荷物を鞆の中にしまい、二人と一匹はぴったりとくつついて、その本を読み始めた。

“ この世界の名は、『ヴェルホーク』

魔法が存在し、魔物が存在し、人が剣を持って戦う世界

ヴェルホークは、五つの大陸、十の国に分かれている

『 現在地：第三大陸ゲーナ・アルステイン国領内 』 ”

「これ……いわゆる『魔法の地図』か？」
「あ、次のページに地図があるよ。……なんかゴチャゴチャ動いてる」

美琴に言われてページをめくると、その本と同じサイズにまで折りたたまれた大きな地図が挟んであった。本から外して見てみると、薄茶色の紙面に、黒のインクではっきりと大陸や国名、大きな町の名前などが書き込まれている。

そして、美琴がつぶやいたとおり、それら主線より数段薄く、細かい線が、地図の上をゆっくりと連動して動いていた。しばらくその動きを眺めていた真琴は、適当な予想を口にする。

「これ、雲とか、波とかの動きじゃないか？ ま、町の名前確認する邪魔にならんし、いいだろ」

「え、あ、うん……今のだけでそんな予想できるんだ」

「女の勘。美琴もきっちり鍛えとけよ」

言いながら、さらにページをめくる。次からはまた、この異世界に関する文章が続くらしかった。だが、ところどころ不自然な空白があり、後半ともなるとほとんどが白紙の状態である。だが、最後の数頁だけ、少々いびつな形の日本語の文が書かれていた。

「あ、賢者からの手紙だ」

「えっ」

“ おそらく、夜のうちにこの本が見れるほど、君たちは夜目が発達していないだろう

僕と出会った、次の日にもこの手紙を見つけていてくれると助かる君たちには不完全な自己紹介と、この世界で生きていくに有効そうな服装に着替えさせることぐらいしかできなかつたね

ここから先、僕が君たちを召喚するにあたって、君たちに付与した能力を教えるよ ”

“ まず、マコト

マコトの能力は『身体能力向上』だ

これだけだととても貧相かもしれないが、その気になればそこの木より高く飛ぶことができる

あと、いくらかの基本能力を底上げして、大抵の武器は扱えるようにしておいたよ

最も、君のもとの筋力なんかをベースにしているから、いきなり達

人クラスなんてことはない”

“ 次は、ミコト

ミコトの能力は『精神力量向上』だ

この本の序文にも書いてあるだろうけれど、この世界には魔法がある……君たちの世界がどうかはわからないけれど

まあ、ミコトの場合、ミコト自身に付与された精神力に、さらにマコトに付与されるはずだったぶんの精神力も上乘せしているから、今の状態だけでも立派な魔法使いと同レベルの力だ

このせいで、多分マコトには初級魔法一回分の精神力くらいしか残っていないだろうけど

魔法の方も、マコトと同じく鍛錬あるのみ……理由は、同じく”

“ 最後にトリル、君はとても特殊な例だ

トリルの首輪には、トリル自身の肉体強化、体力向上、魔力抵抗力向上の力を付与している

まあ猫だし、お爺さんだし、それぐらいしないと身体があつという間に限界を迎えてしまう

あと、トリル自身の意志で人間に近い形態や、戦闘形態になれるようにしておいた

猫であることの名残はどこかに必ず現れるだろうけど、なんとかうまく活用して欲しい

ちなみに、動物の身体の一部を持っている人間よりの種族もいるからそこらへんは安心して”

“ とりあえず、今伝えたかったことはこのくらい

あとは、君たちがこの世界での生活に慣れてきたら、また僕自身が君たちの前に現れよう

では、そのときまで”

「『』……………『』」

賢者の手紙を読み終えた三人は、まず、ぱたんと本を閉じた。

「これは、うん、あれだ。生き残るために必要とはいえ、王道まっしぐらのチート設定だな」

「チート、って？」

「まあ……………超いんちきイカサマズルまっしぐらな存在。うん、ちょっと美琴そこ立ってな」

そう言って、真琴は荷物を美琴に押しつけ、マントを近くの木の根っこに引っかける。改めてマントの下の服装を見下ろして、真琴は困ったような、何とも言えない表情を浮かべた。

「こりゃあ……………剣士とか戦士ってよりや、盗賊みたいだな」

まあいいか、と楽観的に言って、真琴は軽くその場でジャンプする。ずいぶんと身体が軽く感じられ、実際、飛ぶ際に膝を胸の前まで引き上げるようにしてみると。

「お、お姉ちゃんすごいよ!? —メートル以上……………ってか私の身長並に飛べてる!」

「ふむ、ほとんどヒキコモリ状態だったあたしでもこのレベルの運動能力か……………すげえな」

あと、軽く周囲を走り回ってみたり、慣れない木登りに手を出してみたり、近くの枝にぶら下がって鉄棒技を連続で披露してみせるなど……………美琴から見て、真琴はあり得ないほどの華麗な動き、俊敏

な動作をしていた。

「あ、えっと、私も魔法とか使える、のかな？ やっぱり」

「そういう力を渡したっていったよな。でも、分かるのか？ 分かるのならスパーチートだな」

「ち、チートって言わないでよ！」

うつすらと汗をかき、息を乱している真琴にからかわれつつ、美琴はゆっくりと目を閉じて胸に手を当てた。姉の影響で、多少はフアンタジーの小説や設定などもかじっている。瞑想、と呼べる状態を、自分なりにつくりだしてみたのだ。

「ん、んー……わかんない」

けれど、やはり感覚は現代日本の中学生。そう簡単に元の世界にはなかった気配を探ることなどできなかった。

「あー、魔法に関しては、なんか本の方に書いてなかったか？ 初歩中の初歩みたいなこと」

「でも、虫食いだらけですごく読みづらかったし……」

『ふむふむ、おお、数行だけじゃが、ここところは完璧な文として書いてあるぞ？ ほれ』

「ていうか、何気にトリルも文字が読めるようになってるっつーのが、またチート……」

ぶつくさ言っている姉は放っておいて、美琴は本を開き、トリルが小さな前足でばんぽんとページの一角所を叩いている箇所を眺めた。

“魔法とは、世界に影響を及ぼす『術』の総称である
人は己の精神力を、魔物は己の魔力を、精霊は己の霊力をもとに、
それぞれの体系にあつた術を構築する
魔力と霊力は相反するが、精神力は双方ともと同調しやすい
よつて、人はそれぞれの力を己の精神力に同調させ、行使させるこ
とが出来ると唯一の種族である
しかし、奢るなかれ……霊力に同調しすぎれば感情を失い、魔力に
同調しすぎれば破壊を求める
己の力の限界を知り、その力を活用せよ”

「ここからは、ほとんど何も書いてない、かあ」
『しかし、大体魔法の概念がわかつたのう。この書き方からするに、
この世界には人間と魔物と精霊という種族が暮らしておるのかの？』
「だとしたら、トリルが変身できるらしい動物の身体の一部を持っ
てるのは、どこに該当する種族なんだろうな」

首をかしげてトリルを見下ろす真琴は、しばらく震えるトリルの
髭を眺めて、はたと思い出す。

「あ、賢者の手紙に『人間よりの種族』ってあつたっけ」
『ふむ、曖昧だのう』
「そんなもんなんだろうさ。さて、ここいらでチート機能も確認し
たところで……」

「だから、チートチートって連発しないでよお姉ちゃん！」

「では異世界からの旅人で」

「……恥ずかしくない？」

「そんなもんノリで忘れられる」

頭を抱える美琴に、真琴はニヤリと笑って、すぐに真剣な表情を浮かべ直した。

「このままこの森に居座つても埒があかない。ここは、あの賢者が言っていたとおりの町に行ってみよう。さっきの地図と、磁石と、トリルの本能で」

『ふむ、この十八年、家の中からほとんど出たことのない儂じゃぞ？ そんな儂の勘が一体どこで頼りになるのかの……』

「落ち込むなって、トリル爺さん。きつとトリル爺さんも気付いてない力があるさ、多分、おそらく」

推測の言葉をこれでもかと並べ立てて、むしろトリルの気力を削ぎまくった真琴は、美琴から非難の視線を浴びせかけられながらも自分で考えた注意事項を口に出していく。

「あと、あたしと美琴は下の名前だけで通すことにしよう。たーぶん、あの賢者の雰囲気からして、日比谷なんて家名そうそう無いだろうから」

「西洋ファンタジー、てこと？」

「だな。まあそこらへん詳しいことは町の様子見てから決めるけど……あと、トリルのこと」

『ほっ？』

急に自分の名前が真琴の口から飛び出してきたことで、トリルはまた言葉責めか、と地に伏せたまま身体を震わせる。

「トリルは、最初のうちは人間にもならないで、ただの爺さん猫っつてことにおきたい。人の言葉もしゃべっちゃダメだからな」

「え、なんで？ トリルが人間の姿だったら、やっぱりおじいちゃ

んになるんだろうけど、そっちの方が保護者がいるって感じで楽しいやない？」

美琴が頬を膨らませながら抗議するのを、真琴はほおをぽりぽりと軽くかきながら答えた。

「トリルが人間の姿になったとして、動物の身体の一部をもった種族が、この世界で、というかこれからあたしたちが向かう町でどんな扱いを受けてるか分からないだろ？ もし、迫害なんてされてる状態だったらどうなる。あたしら全員リンチで即死だぞ」

「う……」

「そういうこと。トリルみたいな種族がどんな扱いを受けているか……それがしつかりと確認できたら、トリルにはあたしたちの保護者ってことで動いてもらう」

『ううむ、それは、構わないのじゃがのう……儂が保護者か』

真琴の出した結論に、トリルは渋った様子で呻く。トリルにとっては、自分は彼女たちよりも数年早くに生まれただけで、飼い主である彼女たちに衣食住をすべて頼り切りっていた存在なのだ。それなのに、人間の姿の時には保護者になれなど。

『儂にそんなことができるかの……』

「トリルはずっと母さんとか父さんのこと見てきただろ？ あんなふうに、人間の時は接してくれればいい。あと、人間の老体がきついようだったら手も貸すしな」

さらりと言って、真琴は伏せていたトリルを軽く拾い上げる。広げていた毛布をたたみ、本ともども鞆の中へ押し込んで、美琴にトリルを押しつけた。

「美琴はトリルと一緒に行動な。あたしはこっちの荷物持つから」
「あ、私も持つよ！ だって、こんないっぱい重いんじゃない」
「あたしがどんな特性もらったか、忘れたかい？ この鞆、今のあたしには手提げポーチくらいの重さくらいにしか感じられないんだから」

言っで、しぶしぶトリルを抱きかかえた美琴の頭を、ポニーテールの形を崩さないようにしながら撫でる。よし、と気合を入れて深呼吸をして、真琴は意気揚々とその場を歩き出した。

「……ちよ、お姉ちゃんマント！ マント忘れてるよ！」
『やれやれ、こりゃ冒険の方は姉任せ、生活の方は妹任せになりそうじゃない』

(4) リサーチせよ異世界事情(後書き)

このとおり、今回は異世界の知識をひけらかすお話し。よくある説明文です！ なんだったら今は読み飛ばしても構いません。いや構うのか？

そんなわけでトリルもガンバルゾー。

(5) レッツゴウ風車町シスタ

とりあえず、今のこの状況を整理してみようか……。というのは、マコトの心の中の声。

「なんでなんでなんでええー!!」

賢者から付与された俊足やら怪力やらをフル活用して、マコトはミコトを背負い、首から鞆を提げた状態で裏路地を全力疾走していた。そんな彼女たちの後ろからは、がしゃがしゃ!と今までの二人にとつてまったく縁の無かった、異質な金属音。

「おい、声があっちから!」

「眼鏡のガキの足狙えッ! とにかく女子どもだろぅが容赦してたまっかあ!」

次いで聞こえてくる、男達の怒声。ミコトは小さく悲鳴を上げて、マコトの背にしがみついた。

背中では震えているミコトを撫でてやることも出来ずに、マコトはだんだんと荒くなってきた自身の呼吸に、これ以上は逃げられないと判断する。

「さて……どっかからご都合主義的展開が訪れてはくれんかね」

ぼそりとつぶやかれたその言葉に、答えるものは、まだ、無く。

結局、トリルの力を借りずに鞆の中の荷物にあった地図とコンパスを使って、マコトたちは森の外へ出た。木の葉に遮られず、皆さんと身体を照らし出す太陽の光が心地よい。

「っんー！ 出れたー！」

「はいはい、出れたなー。あーあっつ」

「これで暑いのか？」

『マコトはほんに我が儘な体質じゃのう』

ばさばさとマントについていたフードを目深に被ってしまったマコトに、ミコトは呆れかえって肩をすくめる。と、何かを思いついたかのように視線を中へ巡らせ、抱えていたトリルと自身の右肩あたりにのせた。

『？ なにをするんじゃ、ミコト』

「えつとね」

言いながら、ミコトはゆっくりと、フードを背中側から引っ張り出す。自身の頭より三周りほど大きいそれは、ミコトの頭と一緒にトリルのことも包み込んだ。

「トリルはちょっと落ち着かないかもしれないけど、こっちの方が私の両手もあくし」

『なるほどのう。いや、それほど不快ではないぞ。妙案じゃて』

「……お前、猫っ毛平気だもんな」

撫でるくらいなら大丈夫だが、顔に近づけさせられないマコトは、若干羨ましそうにミコトとトリルを眺めていた。

「んで、次は町だよな。えーっと、『風車町：シスタ』……と」
「あ、これじゃない？」

マコトがアルステイン国領部分の地図を開き、目で追っていると隣からミコトが素早く指さしてきた。確かに、その先にはっきりと書かれているのは『風車町：シスタ』の文字。

「お前、間違い探しかカルタとかも早かったもんな」
「うん、地図なら任せてよ」

自慢げに胸を張る妹の姿に、マコトは思わず嫌みのない純粹な笑みをこぼす。わしわしとフードの上から頭を撫でて、方位を確認する。

「うん、しばらくその道なりに行こう。んで、途中から右手に曲がって進路変更。今日中にはつける……——といいんだがな」
「私はいつつも学校まで歩いてたし、お姉ちゃんも身体能力が上がつってるんでしょ。大丈夫だよ」

そう言っつて、二人は近くにあつた半ば雑草で埋もれかけていた道を、やや早足で歩き始めた。

道は一時間ほど歩くと、マコトが言つていたシスタ方面とその逆へと伸びる街道に繋がつた。どうやら交易路のようでもあり、数分も歩かないうちに、この世界に来て初めて人間らしい人間（賢者は自分で人間ではないとカミングアウトしていたので除外）に遭遇した。

街道の三分の一ほどの幅をしている幌馬車の御者台に、商人らしい髭の男と、その男によく似た少年が座り、馬車の周囲を鎧や胸当て、剣、弓などで武装した大人達が固めている。

「ねえねえお姉ちゃん」

「ん？」

「あれって、やっぱりファンタジーで王道な馬車の護衛依頼ってやつだよな」

「だろうな、ていうかそれ以外無いよな。うーん、冒険者グループ……パーティっていつて通じるかな。ギルドとかもあつたりして。うっわぁ超ファンタジー」

商人一行の邪魔にならないよう、道の端へと移動する二人。すれ違いざま、小ぶりな弓の弦を弾いてぼんやりしていた戦士が、ふとマコトの方を向いた。

「……へ？」

戦士は思わず振り返る。が、目深に被っていたフードのせいで、すれ違った二人組の顔はすでに見えない。立ち止まって声をかけようとしたところ、戦士は仲間の剣士にどやされた。

「リジー！ ぼさつとしてんな。とつとと歩けっつーの」

「すいません、クラングルさん」

リジーは、きつと見間違いだろうと思おうとして、自身の動体視力を否定しかけて首を横に振った。やはり、見間違いなんて俺にあるわけ無い。

クラングルに気付かれないよう、そうつとまた背後を伺えば、一瞬間を見かけた旅人はすでに小指ほどの大きさになってしまっていた。

街道に出て三時間、最初に目撃した商人一行以外にも、路上に絨毯を敷いて露店を開いているものや、立ち止まって情報交換にいそしんでいる冒険者などを見かけて、ああやっぱりここは異世界なんだな、と改めて実感した二人は、なんとかシスタの町にたどり着いた。

シスタの町は、町を守る城壁に、一定の間隔で風車が組み込まれていることから『風車町』という二つ名を受けているのだという。城門で入場許可をもらおうと、番兵に声をかけたところ、そんなことを教えてもらえた。

「にしても、二人ともまだ子どもだよなあ。しかも女の子なんだろう？　なんでまた旅なんぞ」

「不可抗力」

「え、えっと、いろいろ事情があったんです……」

かりかりと何やら紙に書き付けている番兵に、同情を交え好奇心からそう尋ねられた二人は、それぞれ対照的な様子で受け答えをした。マコトが簡潔にぶっきらぼうに、それをミコトが穏やかに訳す、といった形である。

「まあ、しばらくはゆっくりしていきな。入場を許可する。……と、あとはこれ」

形式ばかりの口上をさらっと流して、気よさそうな番兵は小さなメモをミコトに手渡した。

「ここな、レストランも兼ねてるんだけど、あんまり金取らないし、

サービスもいい宿なんだ。むろんメシもな。自分たちでいいところ探せなかったら、ここに行くといい」

「あ、ありがとうございます」

メモを受け取って頭を下げるミコトに、番兵はもう一つ、忠告をする。

「あと、いいか？ 聞いているかもしれないが、最近人さらいが多い。

平和の象徴って言われているこのシスタの町だって、被害にあった家族がいくつもあるんだ。日が暮れたら、なるべく外には出るなよ」

「はい、ご忠告ありがとうございます」

「そっちの眼鏡の姉ちゃんもな！。見たところ駆け出し戦士って感じだけど」

「いや、あんまり戦ったこと無いし。知識しか、ねえ」

しかも異世界といったものに対する中途半端で空想八割方な、とはさすがに言わず、マコトはカクンと首をひねり、番兵に一礼した。

「じゃ、行くぞーミコト」

「あ、うん！」

「にこい」

「……ん？」

町の中へと歩いていった二人の少女を見送って、番兵はちょっと首を捻った。

「猫の声、したか？」

(5) 〽 レッツゴウ風車町シスタ(後書き)

次の話と、次の次の話と繋がります。ていうか(5)〽(7)は無
理矢理分割した感じですね！ この話は最初の時系列が結構あとに
くるのですが、ちゃんと合流しますので。
ありがちな展開で。

(6) ～ ランチタイムのち鬼じっし

「そういえば、金銭ってどうなってるんだろ」
「え？」

マコトのつぶやきに、ミコトは疑問系で返した。ごそごそと鞆を探っていたマコトは、奥の方から手の平サイズの革袋を引っ張り出す。中に入っているものを触って確かめて、なるべく音を鳴らさないように袋の口を開く。

(金貨が一枚、銀貨が小さいのとでかいの数枚ずつ、あとは銅貨がジャラジャラと……これ、なんかセント硬貨みてえ。あんまり重くない。あ、銅貨の形違いも結構あるな)

「あー、そういえば本に書いてなかったっけ？」
「最初の方から適当に流し読みで、虫食いの所ほとんど読んでなかったからな。どっか適当な休憩所みたいなどころでも探して、この硬貨の種類でも確かめよう」

そう言っつて、マコトはざっと城門から入ってすぐの通りを数本眺めた。城門前は大きな広場になっていて、何台もの馬車が止まっている。その馬車の並びの向こうに、市場と思しき通り、住宅街と思しき通りなどが見えた。

「……市場はやばいよなあ」
「うん、人混みに紛れて、はぐれちゃったり、お金とられたりしちゃうたら大変だよな」

「お、分かるようになってきたか」
「そこらへんは、外国に対する意識と同じだもん」
「まーな。あー、とりあえず住宅街の方回ってか。ひよっとした

「料理屋とかあるかしらんし」
「うん」

二人は馬車の隙間を縫うように歩き、ヨーロッパの街並みのような雰囲気の住宅街へと足を踏み入れた。混雑しているというほどでもないが、往來に人は多い。

「あ、お姉ちゃん、あの看板」
「ん？」

しばらく歩いて、ミコトは先を歩いていたマコトのマントをひっぱった。戻ってきたマコトに指さして示す方向には、『大衆食堂：ウルカン』と書かれた看板を掲げた家があった。

「あそこ、大衆食堂って書いてあるし、なんか冒険者の人もいるみたいだから……そんなにお高い店じゃないんじゃない？ 私たち、何気に緊張してて昨日の夜から何も食べてないし」

「……ミコト、お前、あれ『大衆食堂』って読めるのか」
「え、そうだけ……はい？」

マコトの言葉に、ミコトは目を点にした。マコトはほとんど笑わずに、真顔のままです。

「あたしには象形文字のようには見ええない。いや、図形、記号って感じ？」

「お、お姉ちゃん読めないの！？」

「あーまったく。ちなみに、さっき見た番兵のおっちゃんがくれたメモも判読不能だ」

「……どういふこと？」

難しい顔をして唸るミコトに、マコトはため息をつきながら自身の予測を述べる。周囲に聞こえないよう、小さな声で

「多分、付与された属性が違うんだろ。ミコトは魔法使いタイプで、あたしに渡されるはずだった魔力もミコトの方にいってる……だからじゃね？」

「文字の読み方とか、そういう力も私だけになっちゃったってこと？」

「さあ、詳しいことはまたあいつに聞かないと。とりあえず、入ってみよう」

自分のことなのにずいぶんあっさりしているマコトに、ミコトは眉根を寄せながら、引きずられるままに食堂の中へと入っていった。まず、扉を開いてぶつかってきたのはかくわしい匂い。肉の焼ける音に香辛料の香り、それに混じって、独特の煙たい匂いも漂ってくる。それほど騒がしいわけでもないが、しんと静まっているわけでもない。元の世界でもよく見る、にぎわった食堂の雰囲気そのまま、マコトとミコトは思わず足を止めた。

すると、扉が閉まると同時に、給仕の女性が二人に気付いて、営業スマイルを浮かべながら近づいてきた。

「いらっしゃいませ、二名様ですね？」

「ああ、二名……ではあるんですが」

「はい？」

マコトはミコトに入り口からなるべく動かないよう注意をして、女性に答えた。

「動物連れなんだが、どこか端っこのテーブルお願いできますか。ていうか、動物お断りなら出ていきますけど」

「いえいえ、食事の邪魔になるようなお連れの動物でしたら、別の部屋で檻に入れて待機させることもできますよ。一体どんな？」

「猫なんだ。けっこうな爺さんだから、そうそう店の中を歩き回ることもしないだろうけど」

「でしたらこちらへ」

給仕の女性は笑みを深くして、二人を壁際の小さなテーブルへ案内した。二人を座らせて、すぐに水の入ったコップとメニュー表を持って戻ってくる。

「この食堂では動物用のメニューはないのですが、よろしいですか？」

「ああ、じゃあ……爺さん猫でも食べれる果物か何か、まず一つ頼む。あたしたちの分は後で」

「かしこまりました」

給仕の女性がいなくなってから、マコトは提げていた鞆から厚めのハンカチを取り出した。テーブルの端っこにそれを広げて、トリルを下ろすようミコトに言う。その際、ごく小さな声で二人は会話をした。

(……すまんのう、気を遣わせて)

(いいんだよトリル。ハンカチの上から出ちゃダメだよ?)

(わかったわい)

マコトは水を飲み、メニュー表をざっと上から下まで眺めて、小さくため息をついてミコトに手渡した。どうやら、本当に一切文字が読めないらしい。ミコトは代わってメニューを読んでいき、

「ねえねえ、二十五セイルのランチメニューが一番上に書いてある

「ただ、数字も小さいし」

「ちょっと待て、セイルがどのくらいか今調べるから」

「ごそごと影で本を取り出し、虫食いの部分からなんとかこの世界での通貨事情を拾い上げる。」

“ ヴェルホークでは、一般的に『セイル』という通貨単位が使用されている

ただし、一番価値が低いセイル硬貨は、五セイルからである

円形の銅貨 五セイル

五角形の銅貨 二十セイル

円形の銀貨 五十セイル

五角形の銀貨 七十五セイル

金貨 二百セイル

ちなみに、セイル硬貨を扱っていない市場が存在するのは
(以下虫食い) ”

「なる、ね」

「わかった？」

「ああ、あとでちゃんとお前にも教える。とりあえず、そのランチメニュー二つ頼んでくれ。それぐらいの金はある」

「わかった、すいませーん」

マコトが本を鞆へしまうのを確認して、ミコトは軽く手を挙げて給仕を呼ぶ。今度は自分たちとそう変わらない年齢らしい少年が、

おぼんを脇に抱えて近づいてきた。

「はい、いかがされましたか？」

「えっと、注文いいですか？」

「かしこまりました……どうぞ」

「えっと、このランチメニュー二つ。どっちもパンとサラダをつけてください」

「はい、では少々お待ち下さい」

少年はさらさらと腰につけていた紙束に、何事か書き付けて、一礼して離れていった。それと入れ替わりに、小皿を持った女性給仕がやってくる。

「お待ちせしました、リデンの実二つ分で、五セイルになりますので」

「あ、はい」

ことりと目の前に置かれた小皿の中身を見て、ニコトとトリルはそろって首をかしげた。既に皮をむかれ切り分けられた実は、甘そうな匂いと果汁がたっぷり含まれていそうな見た目で、白桃そっくりである。

「大丈夫ですよ、もともとは人間用ですけど、動物にも害はありませんから」

そう言って、給仕の女性はトリルに笑みを向けた。仕事なので撫でたり触ったりするのは厳禁だが、どうにも頭を撫でたくてしょうがない……そんな空気が、まざまざと伝わってくる。

「シェーラ！ 早く戻ってこんかい！ 料理が詰まっちゃまってんぞ

「！」
「はあい、ただいまー」

心底残念そうな表情で、女性給仕は厨房に繋がる廊下と思しき方へ離れていった。それを見送ってから、マコトは小皿に添えられていた、一つの小さなフォークを持ち、ナイフのように横から果物を切るようにする。

「……ん、案外硬いぞコレ。桃と言うより林檎だな」

「え、そうなの？ そういえば、人間も食べれるって言ってたよね」

「一つ食べてみたらどうだ？ トリルの分はあたしが小さくするか」

「う、うん」

言われて、ミコトは素早くリデンの実を一つつまみ、口の中に放り込んで咀嚼した。見た目通り、桃のような甘さが口の中へ広がる。

「確かに、歯ごたえあるね」

「うっし、じゃあ次、トリルかじれー」

(なんでそんなに楽しそうなんじゃ)

と心の中で言いつつも、甘い匂いに我慢しきれなくなったトリルは、マコトがさらに切り分けた欠片をぱくりと一口。もぐもぐと咀嚼して、さらにもう一口。

「お、気に入ったな」

「お姉ちゃんは食べないの？」

「一応トリルのご飯だからな、余ったらデザートにさせてもらっけど」

「うっ、それ、暗に私が食い意地張ってるって言うてる？」

「さあーあ？」

おどけた調子で答えてから、マコトは先ほど本で確認した通貨事情について一人と一匹に教えた。セイルという単位が使える国と使えない国があるらしい、銅貨、銀貨は形によって二種類の価値があるらしい、今現在手元にある分は、およそ五百セイルほどらしい……。

「多分、明日か明後日にでもどこかで何かしら稼ぎどころ探さないと、あつという間に飢える」

「うーん、でも、働き口なんてどうやって探せば……」

「やっぱここは一つ、もう面倒だからこの店の人に働きどころ聞いてみるべ」

「ここで働くの!？」

「いや、ぶつちやけあたしの身体能力と、お前の魔力増強ってスキルから鑑みるに、食堂で働くのも悪くはないけど傭兵ギルドとかに行っただ方がいいのになって」

「……………よう、へい？」

あまりにも突然なマコトの言葉に、ミコトは一瞬、頭の中が真っ白になる。

「ああ。……………ま、お前がそういう反応するかもなあっていうのはうすうす予想ついたけど」

「なん、で、わざわざ、そんな、危険だよお姉ちゃん!」

「でかい声出すなっつての」

テーブルを叩かんばかりの勢いで食いついてきたミコトに、マコトは辟易とした表情を浮かべて、軽く両手を挙げる。しばらく、両者とも何もしゃべらずその体制を維持しているという妙な時間が流

れた。

「……あの、お料理、お持ちしました」

二人の周囲で時間が流れ始めたのは、戸惑った様子の給仕少年が、いくつかの皿とフォーク、ナイフののせられたプレートを運んできてからだった。

「あ、ありがとう」

マコトは両手をさげて、トリルの前に置かれていたリデンの実際の皿を、別の場所へ移した。プレートを置くスペースを確保して、少年を促す。

「はい……では、ごゆっくり」

少年はちらちらと二人の様子を上目遣いで眺めながら、プレートを置き、一礼して去っていく。

「話の続き。別に、傭兵ギルドっていつでも、この場合は仮称だ。本当にこの世界に『ギルド』って名称の施設があるかどうかは分からないし」

「でも、そういつた施設があつたら、そこで働いた方がいいかもって、お姉ちゃんは考えてるんだね」

「まあな」

「私たち、戦いなんてしたことないただの現代っ子なんだよ？ 小説とかじゃ、異世界に飛ばされた子たちはすごく不思議な力を持って、それこそお姉ちゃんの言うとおりギルドとかで仕事を始めたりにしてただけ」

「持つてるじゃん、不思議な力」

「っ、茶化さないで！」

「……よお、嬢ちゃん達、ちよいといいか？」

再度ミコトが怒鳴ったところで、隣のテーブルから声をかけられた。二人がそちらへ目を向けてみれば、褐色の肌をした痩せぎすの男が、妙に白歯をむき出しにして笑いかけてきた。

「嬢ちゃん達よお、あんたら、冒険者の中でもひよっここのなかのひよっこらしいな」

「まあ、そうだろーな。なんせ初めてやってきた町がここだし」

「ははっ、そりゃあ運がいいな。ここは結構治安もいい。最初の旅行にはびったりってか」

煽るような男の言葉に、ミコトはフードを深く被り直して頭を振り、マコトはこれ以上言うことはないともいうように、プレート料理に手をつけ始めた。トマトソースのようなものがかかっている鶏肉のグリルに、とろみのあるスープ、グリーンサラダにかためパンが一つといったメニューである。

「なあ、気に触ったかい？ だったら謝るよ。で、だなあ、ギルドに入るか入らないかで揉めてんだな？」

完璧に無視を始めたマコト達に、なおもどこか嫌みな笑みを浮かべた男が話しかける。

「確かにギルドは、主に戦闘を伴う依頼を受けちゃあいるけどよ。ギルド員の中には、それこそ戦術なんぞ欠片も知らねえガキだっているんだぜ？ そういうヤツらは、町の人間の手伝いなんかを数日やって報酬をもらってる」

「手伝い？」

思わず、ミコトは反応してしまった。「にい」とトリルが諫めるように一声鳴く。

「おう、それこそ家の草刈りだの、ガキの子守や遊び相手、作物の収穫なんかが該当するな。ギルドの方だって、そんな死ぬ危険のあるような仕事に実力伴わないヤツ送るかよ。ギルド自体の評価も下がっちゃう。自分を過大評価すんなや、嬢ちゃん？」

「っ」

「ミィ、ちゃんと前向いて食べな」

ミコトの握りしめられた拳が、ぶるりと一瞬震えたのを見逃さず、マコトはあえて小さい頃の呼び名で注意をした。マコトの方に向き直ったミコトは、青い顔で、唇を噛みしめている。

「……お姉ちゃん」

「なんだ」

「……もうちょっと、考えさせて」

「いいぞ」

「おいおいおい、こんなに親切に教えてやってんのに、まーだおっかないっていうかね」

「黙れおっさん、食事の邪魔だ」

しゃべり続ける男の方を見向きもせず、最後の一かけとなった鶏肉に残っていたソースを限界までのせながら、マコトは一刀両断する。ぱくりと鶏肉を口に運んでから、マコトは自分たちの周囲の空気が険悪に染まりだしていることに気がついた。

「ん？」

「お、お姉ちゃん……」

正面では、ミコトが先ほどとは別の理由で顔を青くしている。マコトが最後の一言を放った瞬間、話しかけていた男と同じテーブルに座っていた強面の男達が、不機嫌絶頂といった様子で、二人を取り囲んだのだ。

「このガキがあ」

「調子にのってんじゃないやねえぞ。こっちは善意で教えてやってんだ」

「へえ、善意でか。善意なら受け取るうか。で、あんたは最後に結局なんて言いたいんだよ」

男達に四方からすごまれながら、マコトはむしろのんびりした調子で、テーブルから一人だけ離れていない男に向けて問いかけた。男はにたり、と笑って答える。

「俺のいるギルドにでも入らねえかってことだよ。なに、さっきいった通り、戦い慣れしてねえガキでも受けられる仕事があったりあるところだよ。今人手を集めてんだ」

「へえー、勧誘ね。断るわ。ギルドの存在確かめられただけで満足。ありがとさん」

マコトはハンカチの上からトリルをどけて、ひっくり返して、その中に手付かずのパンを、ミコトの分も一緒にくるむ。いつの間に移動させていたのか、着ているベストにあるポケットの一つから、銅貨をちよと五十五セイル分取り出す。

そして、それを机の上に置いた後、トリルを鞆の中へ放り込み、まだ半分ほどしか食事に手をつけていないミコトをテーブルから引きはがして、取り囲む男達の間をすり抜けた。入り口まで向かうと、泣きそうな表情をした給仕少年が小声で話しかけてくる。

「……逃げてください。あの人は、後ろ暗いところもったギルドの団員なんです。あのままついていっても危険ですけど、この状況も……」

「あー、頑張る」

たった一言だけ返して、マコトは珍しくにこりと少年に笑いかけた。店内に入ってから、ずっと仏頂面だったマコトの表情の変化に、少年は思わず見とれる。

「じゃな、店の方、騒がしくして悪かった」

ドアが開き、二人の少女が店を出て行く。扉が閉まるか閉まらないかというところで、厳つい顔の男達が店内を走り抜けた。入り口側でぼうつとしていた少年は、男の一人にいきおいよくはじき飛ばされる。

「邪魔だっ」

「ぎゃっ！」

胸の中心を殴られ、吹っ飛ばされた少年は、ガシャンッ！と何か木の壁よりもずつと硬いものに後頭部と背中をぶつけた。

「つと、ごめん。大丈夫？」

突然の痛みの嵐に、目も開けられず荒い息をしていた少年だったが、唐突に痛みの熱がひいていった。まぶたに込めていた力を緩めると、その隙間から淡い光が見えた。

「……カミン、容態は？」

「大丈夫、もともと軽い打撲……と言いたいところだけど、はじき

飛ばした衝撃の方は、下手なところに当たってたら重傷だったわね。つたく、だからあんな非人道ギルドぶつ潰せばいいのに」

「そう、はつきり、言わない方が、いいので、は」

「みんな思ってることよ。思っていないのはあそこのギルドで甘い蜜吸ってる幹部陣と『使う側』の団員くらい。って、そうだ、さっきの子たち！」

「ああ、冒険者の同伴させてる動物の扱いについても、ギルドについて、あまりよく知らない旅人のようだったね。あのままじゃ怪我するだけじゃ済まないな……」

少年が目を開けると、目の前に、使い込まれいくつもの傷が刻まれた深い青色の鎧が見えた。

「私が行く。ギルド『荒神の槍』のお人好し筆頭として、ね」

「あ、ちよ、ランギス！ あーもーまったく！ あたしもあいつら懲らしめにいきたいのにつ」

「……僕が、この子、とか、店を、見てる。行くと、いい」

「あつら、今日は素直ねブルブ。じゃ任せたわ！」

人から人へ、自分の身体が受け渡されていくのを感じながら、少年は意識を失った。

(7) ファーストバトルの行方

「っはあ、そろそろ……疲れた」

そして、状況は冒頭へと戻る。

食堂を出た瞬間、ミコトをあっさりおんぶ状態にして、人混みの中をまず全力疾走。次に、なるべく表通りから遠ざからない程度の裏路地を駆け抜けて、いくらかは撒いたか？と楽観視していたときもあつたのだが。

「この町に関しては、むこ、けほっ、向こうの方が有利……地の利がなあ」

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「ん、なんとか。この身体能力向上ってほんとすごいわ」

耳元で声を震わせながら尋ねるミコトに、マコトは息を整えながら答えてやる。もうしばらく路地に潜んでいるか、と考えたところで、ぴいっと鋭い口笛のようなものが聞こえた。

勢いよく上を見上げると、逆光でよく見えないが、人影らしいものが見えた。

「まずい、か」

「え？」

「いたぞ、オラァっ！」

苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべ、マコトはそつとミコトと鞆を地面に下ろす。そして、近くに落ちていたニメートルほどの角材を拾い上げて、両手で静かに構える。

「お、ねえちゃ」

「っ、いた、こごブゴツ!？」

目の前の曲り角から顔をのぞかせた男は、下あごに角材による強烈な打撃を受けて、そのまま気絶した。仰向けに倒れ込み、後ろに続いていた仲間らしい男を二人ほど押しつぶす。

「だ、でえ!？」

「ちよつとガルさんどいて」

「あんたらがどけっ」

「こごぶあつ!」「」

そのまま角に飛び込み、マコトは素早く男達の側頭部を蹴りつけた。側頭部の衝撃と、さらに互いの頭での頭突きというダブルダメージに、下敷きにされた男達は白目をむく。

「お姉ちゃん……そんな喧嘩、できたの？」

「いや、こご動きたいって思ったら、大体思った通りに動けただけ。すんごい節々が痛い。こりや運動不足だな」

怯えるミコトに、マコトはごくごく軽い調子で答える。が、実際には口調から想像されるものよりも数十倍の痛みが、マコトの全身に及んでいた。今にも、肩に担いでいる角材を取り落としそうである。

マコトは元の世界ではヒキコモリまっしぐらだった。一日に必要な最低限の栄養のみを摂取し、自室にこもるのはいつものこと。わりかしあつさりと入学できた高校も、何日間通えば留年せずにするのかを入学して最初に計算し、その計算通り、一週間のうち三日は休んで家に引きこもるといっておおよそ不健全な生活を送っていた。アウトドアどころか、ちよつとした散歩でもすぐに息が切れてしまう。

……あの森からシスタの町への道のりも、ほとんどこの能力のおかげで歩き切れたといつてよい。

つまりは、能力のおかげで無理矢理強化されたマコトの身体の細胞が悲鳴を上げているのだ。全身をひどい筋肉痛が襲っているというところでもある。

だが、マコトはそんなことなどおくびにも出さないで、いつも通りの仏頂面のまま、ミコトを手招きした。

「そら、逃げるぞ」

「う、うん」

一步一步、足を踏み出せば、太ももやふくらはぎはもちろん、足の裏まで激痛が走る。こんなとこの筋肉までなまっていたのかい、と自分自身に呆れながら、マコトは角材を低い位置で構え、腰を落とした。びりびりと両腕が震えているが、構っていられない。

「見つけたぞ、ガキ共」

正面に四人、後方からも足音がする……全部で、十人いるかいな
いか。

「は、そっちの眼鏡の嬢ちゃんは、武器は持ってねえようだがなかなかやるらしいな」

角材の先端についた血の跡を見て、男はやはり、あの黄色い歯をむき出しにした嫌みな笑いを浮かべる。

「後ろの嬢ちゃんは特に使えなさそうだな……まあいい、とりあえず、大人しい方はそのまま、眼鏡の方は顔以外どうとでもしろ、お前ら」

男がさつと片手を振ると同時に、下卑た笑いを浮かべた男達が指の骨を鳴らしながら近づいてきた。狭い裏路地で、右にも左にも逃げられそうなルートは見当たらない。

「お、お、おねえ、ちゃん」

「……ち」

『ふむ、儂もある、ということをお忘れではならんぞ？』

唐突にその場に響いた、老人の声。その声に、二人の少女は驚き、男達は戸惑った。

「な、なんだあ？」

「どっからだ、今の声！」

『ほっほ、どうやらあの者が寄こした力も、なかなか、便利なものもあるようじゃのう……』

トリルの楽しいげな声が途切れると同時に、ミコトの抱えていた鞆から、淡い銀色の光が漏れだした。「わっ」とミコトが声を上げて鞆を取り落とすと、その中から素早く、何かの影が飛び出してきた。

「……えつと、と、トリル？」

『儂以外に誰がおるんじやい』

光がおさまり、影がはつきりとした形をとると、トリルと同じ灰色と白の毛並みが入り交じった、元の世界での動物に例えるならライオンほどの大きさの獣が現れた。ぱたぱたと動くその左耳には、トリルが元の姿であったときにつけていた首輪と、同じ装飾の耳飾りがはめ込まれている。

『うむ、なかなか便利な姿じゃの。なにやら若い頃のように力がみなぎるわい』

「なんで、え？ どうして」

『ミコト、説明はあとじゃ！ この場を切り抜けるぞい！』

言つて、トリルはバネ仕掛けの人形のように、その場から勢いよく跳躍した。隣の家の壁に四肢をついて方向転換をおこない、あの話しかけてきた男のいない方の追っ手へ、数の少ない方へ突っ込んでいく。男達の悲鳴が上がる中、ミコトは呆然と、暴れるトリルの姿を眺めていた。

「ミー、ぼーっとしてたら捕まる、行くぞ」

「……あ」

「ミコト……！」

「っ」

苛立ったような、マコトの表情。強くつかまれた腕。動かない、動こうとしない自分の足。

「こわい、よ。あなたは、ほんとにおねえちゃん？ あれは、ほん
とにとりる？」

気付けば、ミコトは勢いよくマコトの手を振り払っていた。マコトの顔に、驚きが浮かび、次いで、痛みを堪えるような歪んだ表情が浮かぶ。

(え?)

そして、マコトはそのまま角材を手放し、その場に倒れ込んでしまった。息はしているようだが、手足はびくりとも動かない。その向こうで、こちらの異常を察知したトリルが二人の名前を叫んだ。

(なんで、わた、私　!!!)

「おーおー、仲間割れとは都合がいいねえ」

叫び出しそうになるのを、後ろから伸びてきたがつしりとした手が押さえ込む。両腕と腰をもう一本の腕で固定され、完全に身動きが取れなくなる。ミコトの両目が、限界まで見開かれた。

(やだ、ごめんなさいお姉ちゃんいやだよごめんなさいごめんなさい　!!!)

「そっちの娘は」

「ああ、適当に拾っておけ。拘束も忘れずに」

「了解」

目の前で、複数の男達がぐったりとしているマコトを無造作に持ち上げ、乱暴な手つきで両腕両足を縛り上げていく。

「お、こいつ細いわりに出るところ出でんぞ」

「ほおー、じゃあそこそこ一般受けしそうじゃね?」

げらげら、げらげら、げらげら。

視界の端に、もう一つ、見慣れた色彩が投げ出される。

「おい、さっきの化物……なんかひよろい猫になったぞ」

「頭潰しておけ、使い魔かもしれねえ。殺しておいて損はないだろ」

「はいはい」と

男の革のブーツを履いた足が上げられて、ぼろぼろな毛並みのトリルに向かって、躊躇いもなく振り下ろされる。あのまま見ていれば、何かが砕ける音、潰れる音とともに、トリルの一生は終わる。

やめて

剣士、ランギス・ドルトメアは風のように裏路地を駆け抜けていた。表通りに比べて、ゴミや木箱、その他よく分からないものが積み重なっており、ひどく足場の悪いそこを、まったく問題ないともいつかのように。

(間に合ってくれ)

ぎり、と下唇を噛む。ランギスの予想では、追いかけられた少女達は、恐らく数分と持たないうちに捕まり、裏路地に引きずり込まれているはずであった。しかし、その予想は一瞬で覆される。

男達が潜みそうな裏路地に飛び込み、少女を捜し始めたところで、入り組んだ道の遠くに、おそろいのマントを身につけた二人組が、片方を背負って途方もない速度で逃げているのが見えたのだ。速度だけなら、今のランギスにも匹敵するほど。

(あの子たちを甘く見ていた私のミス……まったく、なんてことだ)

感覚をときすませて、力の流れを探る。あれほどの身体能力を備

えているならば、その身に秘めている精神力もかなりのものだろうと踏んでの探索。だが、一向に引つかかる気配がない。

「精神力も使わずに、小さな女の子が、あれだけの能力を……？」

あり得ない。そう頭を左右に振り、再度裏路地を駆け抜けることに意識を集中し始めたとき。

「がっ!？」

探索に、突然膨れあがった精神力の気配が引つかかった。しかし、あまりにも突然なその発動。

「な、んだ？」

つぶやいた瞬間。

どおっ!!

裏路地の一角から、巨大な火柱が吹き上がった。

「あそこ、か……!？」

まさかと冷や汗を流しつつ、今日の町の警備を担当しているギルド『オックスアーク』の団員がやってくる前に現場に向かおうと、ランギスはさらに速度を上げた。

気配を辿り、何度も何度も角を曲がって、ランギスはそこに到着した。

「……………」

路地を構成している両側の建物には、焦げ目はあれど、あれほどの爆発地点にあったとは思えないほど無傷な状態に近かった。しかし、路地においてあったであろうものは、どれもこれも、真っ黒に炭化している。

そして、その裏路地でも焼けこげていない部分に目をやると、ペタンと座り込んでいる追われていた少女が一人に、そこからやや離れたところで両手足を拘束されて倒れているもう一人の少女、ぼろぼろな毛玉にしか見えない猫が一匹。

「君、大丈夫か!？」

さらに、そんな少女達の周りには、様々なやけどの跡を残す、ころつじて息の残っている男達が倒れていた。皆一様に意識を失っているが、痙攣などを起こしているものはいない。

と、ランギスが声をかけると、座り込んでいた少女の方がびくりと身を震わせた。その振動で、ぱさりと軽い音ともにフードが落ちる。高い位置で結ばれた髪の色を見たランギスは、ごくりと息を呑む。

(黒髪)

この世界ではそこそこ珍しい、大概が特殊な能力を持つものたちがその身に宿す色。

まさかと思つて息を潜めていると、フードを下ろしたままの少女が、ゆっくりとランギスの方を向いた。

「……黒い、目……」

「……」

「え？」

ランギスのつばやきと、少女のつばやきが重なる。思わず聞き返そうとして、少女の身体がぐらりと傾くを見て急いで駆け寄る。

「だ、大丈夫か、しっかり……」

「めんな、さ……ねえ、ちゃ……」

今度は聞こえた、小さな謝罪の声。そのまま、黒目黒髪の少女はランギスの腕の中で気を失った。

「……なん、だったんだ？ 今のは」

しばらく呆然としてしていると、だかだかだかつとあまり統制の取れていない足音が聞こえてきた。はつと我に返って、ランギスは少女を抱えたまま、猫ともう一方の少女を同じ場所に集める。そして、待った。

「……そこで何をしている……!!」

「人命救助、手伝ってくれる？」

背後から聞こえた、殺気の込められた言葉に、ランギスはごく軽い調子で答えた。

(7) 〃 ファーストバトルの行方(後書き)

次からいよいよ新キャラぞくぞく。

(8) ～ スリープモードより回復中

痺れるような痛みが、全身の筋肉を絶えず震わせている。マコトはゆっくりと浮上してきた意識のもと、自身の肉体の様子をそう表わした。

(……やべ、めっちゃくちゃ痛い)

痛みがなければ、金縛りだと錯覚しただろう。それほどまでに、見事に全身が動かない。動くことを拒絶している。あきらめのため息すら満足に吐くことができなかった。

「あ、彼女、意識が……」

と、マコトの頭のすぐ近くから、穏やかそうな女性の声が聞こえてきた。それは久しく聞いていない母の声にも似ており、マコトは微笑を浮かべようとす。だが、それも頬の筋肉がぴくりと痙攣するだけで、まともな形にはならない。

「タリハラ、せめて顔の筋肉だけでも治癒を」

「はい」

そつと痺れる顔面に誰かの手と思しきものがのせられ、あの、正座をして痺れた足を触られたときのような衝撃が、マコトの身体を襲った。痛い、離してくれ、動けない、ああ、嫌だ！

「……か、は」

「おお！」

しばらくすると、添えられた手からほんわかとした温かさが伝わってきた。温かさはびりびりと神経を刺激する痛みを和らげていき、やがてまぶたを開き、口を動かせる程度に回復させてくれた。

「え、あ？」

「大丈夫か、しゃべれるかね？」

ゆっくりと目を開けると、ぼさぼさの茶色い髭を蓄えた優しそうな顔の男と、少しふっくらした丸眼鏡の女性が、マコトの顔を心配そうにのぞき込んでいた。

「あ、はい……なんとか」

「ああ、よかった。すまなかつたね、これでもギルド内の優秀な癒し手に総力を挙げてもらったのだが」

「貴女の身体の中……内臓を治療して、安静にさせておくのでいっぱいだったの。身体は、まだ痛む？」

「ええ、なんか、びりびりって感じ。全然動かせない」

仏頂面のままけろりと答えるマコトに、女性はくしゃりと表情を歪めた。そっと、体格のわりに小さい手の平がマコトの額を撫でる。しばらくその心地よさに目を細めていたマコトだが、はっとして二人に問いかける。

「あの、ここはどこ、なんだ？ 妹はどこだ、あと、相棒の猫も」

「落ち着いてくれ。君の妹というのは、髪長い魔法使いのことだね？ 猫の方もどちらも、きちんと預かって治療させてもらった。

ここは、ギルド『荒神の槍』シスタ支部だよ」

「『じじんのやり』……？」

マコトは眉をひそめる。ギルドの存在をはっきりと知ったのは、

あの大衆食堂で初めてのこと。さらに細かいギルドの名前など、まったく知らなかった。

「知らない、のかい？　そこそこに大きなギルドなのだけど」

「ああ、はい、すごい田舎に住んでて……初めてやってきたのが、シスタの町で」

「なるほど」

ぱっぱと適当な嘘を、疲れ切った頭でもでっちあげられるあたり、マコトは自分の性格に感謝していた。マコトの返事を聞いた男は、再度マコトの顔をのぞき込む形で自己紹介を始める。

「私は、このシスタ支部を任されている、支部長のゴーデイス＝レルグだ。そちらは治療班隊長のタリハラ＝メインスコール」

「改めまして、はじめまして」

「あ、いえ……あたしは、駆け出しの旅人で、マコトっていう。助けてくれて、ありがとう」

「いや、実際貴方たちを助け出したのは、私たちではなく、このギルドの団員一名と『オックスアース』の面々だね。回復したら、彼らに直接礼を言つといい」

ゴーデイスはそういつて微笑むと、あとは任せる、とタリハラに声をかけて、部屋を出て行った。かちやり、とドアの閉まる音がして、タリハラはマコトの左腕に手を添える。

「っ」

「やはり、触れるだけでも痛むのね」

タリハラは悲しげに目を細めた。

「一体、どんな無茶な身体の使い方をしたの？ どこもかしこも細胞がぼろぼろ……一時は再生魔法が効力を発揮しないときもあったのよ。貴女の身体自体に、再生するほどの力も残されていなかったの」

「……無茶、しないと……逃げられなかった。妹を、逃がせなかったから」

目を閉じて、なんとか左手を握りしめようと必死に感覚を探りながら、マコトはそう答えた。それに対して、タリハラは首を横に振る。

「貴女の妹さん、魔法の暴発で、いまだ意識が戻らないの」
「え」

タリハラ言葉に、マコトは勢いよく目を見開いた。ぱくぱくと金魚のように口を開け閉めして、ゆっくりと舌で唇を湿らせてから、絞り出すようにつぶやく。

「嘘だ。あいつが、まだ、魔法なんて使えるわけ」
「いいえ。私たちが彼女の身体を調べたとき、まさに、死の一步手前というところまで精神力が放出されていたわ。肉体的な損傷は、貴女ほど見られなかったけれど、あのまま治療が遅れていれば廃人になってしまっていたであろうほどに」
「……………」

突然の宣告に、マコトは言葉を無くす。

「それから、貴女の相棒……と言っていたわね。その猫も、今は一番意識がはっきりしているようだけど、運び込まれたときはまさに死にかけだったわ」

タリハラの声が、震える。

「……………本当に、間に合って、よかったわ。貴女ぐらいの子や、小さな動物が死んでしまふところなんて、私は見ていられないもの……………」

マコトはゆっくりと、視線だけをタリハラ顔へと向けた。タリハラは泣いてこそいなかったが、唇を引き結び、頬を紅潮させて、瞬きをせずにマコトを見下ろしていた。

「貴女たちが巻き込まれてしまったこと……………報告で聞いているわ。ゆっくりと休んでちょうだい。どうか、まだ若いのだから、無茶をしないでね……………」

そして、またタリハラの手が、マコトの頭へと伸ばされる。そろそろと痺れを刺激しないように気遣われて、最後に、マコトの髪を一房持ち上げられる。

「黒い髪、綺麗ね……………あんまり見たことはないけれど、黒って私けっこう好きよ」

「そ、か」

ストレートな褒め言葉に、お世辞だろうと自分に言い聞かせながらも、マコトは素っ気ない態度で視線を逸らした。くすくすとタリハラが笑うと、こんこんと素早く部屋のドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

「失礼します。意識が戻ったと聞きました」

「私も失礼いたします」

「あら、ランギス、それにミネア副支部長……」

部屋に入ってきた女性の方を見て、タリハラは目を見張る。だが、すぐに思い至ったような表情を浮かべると、二人に軽く一礼して、退室していった。

「彼女は今日が覚めたばかりですので、あまり長話は……」

「わかっています。二十分程度でなんとか今日は切り上げるつもりです」

タリハラとランギスと呼ばれた男は、戸口でそんな会話をして、ゆっくりとドアを閉じた。先ほどまでゴージャスが座っていた方の椅子にミネア、タリハラが座っていた方の椅子にランギスが座り、マコトの顔をのぞき込む。

「初めまして、私は『荒神の槍』の団員、ランギス・ドルトメア。貴女がたが、ギルド『金と報い』の団員に襲われていたところ、事がすべて終わってから保護した者です」

「そこまで長々しく解説する必要……あつと、失礼。私の方はミネア・エシュリー。ギルド『オックスアース』シスタ支部副支部長、兼筆頭冒険者よ」

「……ども」

だんだんと眠たくなってきたマコトは、自己紹介をしなければと思いつつ、揺れる視界、誘ってくる睡魔と必死に戦っていた。

「……この子、眠たいんじゃない？ やっぱり後回しにしたほうがいいわ」

「あ、ああ、けれど」

「タリハラさん怒らせるつもり？ だったら私はこの場を即刻逃げ

出すわよ」

「ふう……わかった。今日はとりあえず紹介だけにしておく。もう一度タリハラさんと呼ぶか」

視界が狭まっていく。まぶたが自然と下ろされ、マコトはまた、深い眠りについた。

次に目を覚ましたとき、だいぶ身体の痺れや痛みから解放されたマコトは、誰もいない部屋で、ゆっくりとベッドから起き上がった。軽く乱れていた服を整え、慎重な動きで立ち上がる。

「……だるい、ふう」

と、重心が安定しないまま、両足を肩幅に開いて右肩に左手を添えたマコトは、小さなノックとともに部屋に入ってきたタリハラとばっちり目が合い。

「あ、おはようございます」

「……」

一瞬呆然としたタリハラに、あつという間にベッドの中へ叩き込まれ、くどくどくどくどとお説教を受けるハメになった。その後の触診を終えて、なんとか上半身だけベッドの上で起こす許可をもらう。

「まったく、でも、すごい回復力……まだ運び込まれて三日しか経

ってないのに」

「え、三日？ あたし三日も寝てたのかよ」

「三日『しか』よ。普通の冒険者なら一週間は寝込むような傷だわ」

ふーん、とあまりよく分からなそうな返事を返して、マコトは両腕の力を抜き、肩だけをゆっくり前や後ろにくるくると回した。確かに、無理もしていなさそうなこの不思議な少女に、タリハラは眉根を寄せて首をかしげる。

(そういえば、精神力の流れが少しおかしかったけど……)

その辺りの理由か、生まれつきのもだろうと判断して……それに黒をその身に宿す者は、他とは違う力を持つ場合が多いということも思い出し、タリハラはもう一度マコトに眠るよう促す。

「さ、この調子だったらご飯も食べられそうね。あと、何かして欲しいこととかはある？」

「なんでこんなに、関係のないギルドで面倒みてもらえばなのかも聞きたいけれど……そうだな、とりあえず、呼べそうだったらトルルを、あたしたちと一緒にいた猫を連れてきて欲しい」

「ああ、そっちの方なら大丈夫ね」

にこりと笑みを浮かべるタリハラの言葉に、マコトは仏頂面のまま、ふいと視線をそらせた。『そっち』というのが何を示すのか、すぐに思い当たったからだ。

タリハラはマコトがベッドに横たわるのを確認すると、部屋を出た。そして、部屋の扉の前で見張りをしていた青年に、扉をしつかりと閉めてから声をかける。

「起きたみたい、もう立ってたわ……」

「え、マジですか。なんなんですかあの子たち」

青年は心の底から驚いた、とでもいうように、思わず扉の方へ目を向けた。担ぎ込まれてきた三日前の少女達の姿が、じわりと脳裏に浮かぶ。

「とりあえず、朝ごはんを持ってこなくちゃ。あなた、彼女たちの猫を迎えに行つてあげてくれる？」

「え、ええ……いいですけど、見張りは？」

「……………まあ、大丈夫よ」

若干引きつり気味のタリハラ笑みに、青年は何か原始的な恐怖を感じて、背筋を伸ばし簡単に命じられた項目を復唱、実に見事な動きでその場を離れていった。タリハラと逆方向へ廊下を進んでいき、階段を下り、そのすぐ脇にある扉の部屋が目的地である。

「よつと」

特にノックもせず、周りの部屋のドアよりもやや重めに造られているノブをひねり、青年は部屋の中へ足を踏み入れた。いくつかの空の檻が、大小様々で放置されている中、一番小さな檻の中に、目的のものはでろんと俯せになっていた。

「いや、猫としてその姿勢はどうよ」

小声でツツコミながら、青年はコンコンと軽く檻の天井部分を叩く。すると、中で眠っていたらしい猫は、「うー」に「と低い声であくびをし、目の前に見えた青年の顔に驚くふうでもなく、大人しくちよこんと檻の真ん中に座った。

「ああ、うん、そうやって綺麗な姿勢してると猫だっと思って思えるな」

これまたぶつくさ一人でつぶやきながら、青年は檻ごと猫を抱え、のんびりと部屋を出た。

檻を抱えたまま重いドアを閉めるのに四苦八苦していると、先ほどまで自分が見張りをしていた部屋のほうから、自身にもさんざん浴びせかけられた覚えのある怒り声が響いてきた。

「……タリハラさん、絶対調だな」

なんとも、部屋へ戻りたくなかった。

(8) ～ スリープモードより回復中(後書き)

まだまだチートとは言えない二人。最初から楽なんてさせません。けど急成長してね！

(9) ギルド入団すでに決定

タリハラは見張りの青年と別れたあと、すぐさま厨房で準備されていた朝食を、事情を話して一人分確保し、ついでにロビーで仲間と今後の予定を話していたランギスを見つけると、そのままマコトの部屋へ案内した。

「あの、昨日の今日ですけど、大丈夫なんですか？」

「ええ、思った以上の回復力です。私たちの魔法以外にも、あの子自身の体質にもよるのでしょーうね」

朝食ののったプレートを手に、タリハラはやや早足でマコトの部屋へ向かっていた。隣をいくランギスも、なぜ早足なのだろうと疑問に思いつつ、ペースを合わせる。

そして、マコトの部屋の前について、タリハラがドアを開けてくれるよう頼む前に、ランギスは素早く前に出てドアノブに手をかけた。もう一方の手で素早くノック。「失礼します」とランギスが言っつて、ドアを開くと。

「あ

「一、二、三、四、と小さくかけ声を出しながら、屈伸運動を行っていたマコトの姿があった。当然、ベッドから降りた状態で、スリッパも履かずに。

「……」

「あらあら、あら」

本当に元気になってる、と半ば呆然としかけたところで、ランギ

スはごく近い場所から放たれる殺気にも似た気配に、身の毛をよだたせた。その気配を発している張本人、タリハラは、近くの一人がけ用テーブルにプレートを置いて、ゆっくりと手を差し出す。

「一旦ベッドに戻って、それからもう一回、お説教ですよ？」

「……はい」

もう一回という言葉に引っかかりを覚えつつ、ランギスは

(ああ、これはしばらく話聞けそうにないな)

そう判断し、ドアを閉めて軽く目を閉じた。ごそごそという衣擦れの音がしたあと、普段から穏和なタリハラのものとは思えないような厳しい声が室内に響く。内容は、推して知るべし。

しばらくすると、ドアの側にいたランギスにしか聞こえない程度の、とても控えめなノックが鳴った。ランギスは腕組みをして唸りつつ、そつと扉を開く。

「どのような用件ですか？」

「あ、のー、タリハラさんに頼まれて、こっちの猫を」

顔をのぞかせた青年が持ってきたものを見て、ランギスは軽く頷く。

「ああ、入ってください」

「いえっ、失礼しますというか失礼させてくださいお願いしますっ」

そう言ってドアをさらに開けようとすれば、彼が持っていた猫入りの檻が入る程度まで開かれた瞬間、がっちりと青年にノブを外側からつかまれて動かさなくされてしまった。せわしなく視線をあち

こちらに向ける青年の様子に、ランギスは合点がいったように、もう一度頷く。

「あー……タリハラさん、ですね。はい、分かりました。じゃあ猫だけ受け取ります」

「ありがとうございます……っ」

檻を差し出した青年は、ほーっと安堵のため息を漏らすと、ランギスに一礼してそのまま部屋から離れていってしまった。やれやれと肩をすくめつつ、ドアを閉めたランギスは、そろそろクールダウンしてきたタリハラに声をかける。

「タリハラさん、猫がきましたよ」

「え？ ああ、そうね。ふう、今日は二度目だからこれくらいにしておくわ。いいわね、マコトさん」

「はい」

すでに二回目かい、とココロの中でつぶやきつつ、ランギスは一瞬檻をどこへ置こうかと視線を彷徨わせる。床に置けばマコトから遠ざかってしまうし、テーブルにはすでにプレートが場所を取っている。

「あの、ベッドの上、ダメですか」

すると、マコトの方から控えめな口調で意見が出てきた。おそろくタリハラの前だからか、拳動も一つ一つが食堂で見たときよりも丁寧になっている。ランギスはそれに気づき、苦笑をしてタリハラに許可を求めた。

「いいですか？」

「まあ、いいでしょう。あんまり檻も汚れてなさそうですね」

許可をもらって、ランギスはマコトが身体をずらして確保したスペースに檻を置く。慣れた手つきで檻を開き、中からゆっくりと猫が出てくるのを待った。

「来な、トリル」

「に」

マコトが手を差し出すと、トリルは短く鳴いて、檻の中から出てきた。その動作の頼りないこと、よろよるとした足取りを見て、ランギスは眉をひそめる。

「まだ、怪我が完治していないのですか」

「いいや、こいつ爺さんだから、歳なんだ」

「は？」

トリルがやってきたからか、若干口調が戻ったマコトは、そつとトリルを抱き上げると、自分のひざの上のせて頭を撫でた。トリルの方も、気持ちよさそうに目を細めている。

「……あ、そういうばちょっといい、ですか」

「なにかしら？」

無理矢理丁寧にしたようなマコトの言葉に、タリハラは「ちょっと脅かせすぎたかしら」と苦笑しながら聞き返す。

「あの、この国での人間でない種族の扱ってどんなもんなんですか」

「人間でない種族？ 魔族とか、獣人とか精霊とかなら、この国は

かなり寛容な扱いをしている部類に入るわね。実際、私もちょっとだけ精霊の血をひいているのよ」

「……へえ」

マコトはタリハラに軽く頭を下げて、ランギスの方を見、前に意識が落ちる寸前に会った人だよな、と確認をして。

「だったら、大丈夫そうだな。なあ、トリル」
「儂、しゃべってもええんかの？」

突然室内に響いた老人の声に、タリハラとランギスはきょとんとして、マコトのひざの上でだれているトリルを見つめた。

「しゃべった……のは、あなたなの？」

『うむ、儂じゃー儂、確かにの。改めてこちらから名乗るぞ。猫のトリルじゃ。マコトとミコトが飼い主での、でも儂が保護者なんじゃ』

「トリル、お前あんまり自分の言ってる意味分かってないだろ？
保護者になるのは人間になったときだってだよ」

『おお、そうじゃった』

「……使い魔、ということか」

二人の会話に妙なものを感じつつも、ランギスは改めてマコトの方を見下ろした。すると、急にマコトの方が、その漆黒の瞳をランギスに向ける。

「そういえば、この間会ったとき、あたしすぐに寝ちまったよな。
あたしはマコト、駆け出しの旅人。あなたはー、確かランギス、だったよな……。苗字忘れたけど。このギルドの団員さんで、あたし
たちを助けに来てくれた」

「ああ、そこまでしつかり覚えていたんだ」

しゃべる猫という、人間社会では黒を身に宿す者並に珍しい存在にあっけにとられていたランギスは、マコトの言葉にさらに驚かされる。この間話したとき、彼女はほとんど意識を失っていたも同然の状態だから、覚えていないはずがないと諦めていた。

「まあ、ぎりぎり。もう一人女の人もいたよな」

「そっちの人は、いったん所属ギルドに戻ってもらったよ。君たちが襲撃された日の警備当番だったギルドの副支部長でね。ミネア」
「エシユリーというんだ」

「なるほど、ね……」

マコトは表情を動かさずに、トリルを見下ろしながらつぶやく。
トリルはのんびりとマコトのひざの上で伸びをしていた。

「で、なんであたしらは……この『荒神の槍』、だっけ？ そんなギルドにここまで助けてもらってるわけ？ あたしらは別にギルドの団員ってわけでもないのに」

「まあ……そうね。えっと、信じてもらえないかもしれないけれど」

タリハラは上げられたマコトの視線の鋭さに、この子はまず他人という存在を疑ってかかるのね、と判断した。助けてもらえたことは感謝するが、その裏に何かあるんじゃないか……そう勘ぐることが染みついているのかもしれない。

「私のたちの悪さ、かな。挙げられる原因とすれば」

「はあ？」

タリハラに代わって答えたランギスの言葉に、マコトは首をかし

げる。ゆっくりと片目を開いたトリルが、ランギスを見定めるように眺めた。

『ふむ、自分はたちが悪い、とな？』

「あまりギルドの面々からは好意的にとってももらえない性質なので、端的に言つと」

「お人好しなの、彼は。このご時世に珍しいくらい」

「……………はあ」

マコトの視線がうるんなものを見るものになる。ランギスは居心地が悪そうに頭を掻いて、ばつが悪そうにはにかんだ。

「えっと、その、まあ私が勝手に、あいつらに追いかけられた君たちを気にして、さらに追いかけて、見つけた先で全員倒れていたから、一番医療施設が整っていて都合がつく所属ギルドに運び込んだ、つてことなんだけど」

「つまりはあなたの身勝手か」

「……………さらつと言われると本当に傷つくな」

マコトの納得したような一言に、ランギスはがくりと肩を落とす。タリハラは小さくため息をついて、マコトをたしなめようとする。

『マコト、言い忘れておらんかの？』

「う……………ああ、うん、えと、……………助けてくれて、ありがとう」

『うむ、よく言えました、じゃ。恩人にさっきみたいな口を利いてはあかんぞい』

「わかってるよ」

『わかってたら最初から言っちゃあかん』

「……………次から、なおす」

びしびしと太ももに猫パンチを食らいながら、マコトはかなり不満げな表情でランギスに頭を下げた。トリルはその様子に満足したのか、ごろごろと低く喉を鳴らして、またぺたりとベッドの上に横たわる。

『あと、さつきから思っておったんじやが、いい匂いがするのう』
「ああ、朝ごはんを持ってきたのよね。じゃあ、食べながらでも、貴方たちの今後についてお話ししましょうか」

「……あたしたちの、今後？ あたしたち、怪我治ったらほっぴり出されるんじゃないのか」

テーブルごと食事をベッドサイドに引きずってきたタリハラに、マコトはトリルの毛がついた両手を、側にあつたぬれタオルで拭いながら尋ねた。その言葉に、ランギスがふいつと視線をそらせる。

「いいえ、貴方たちには、いつそのまま『荒神の槍』の団員になつてもらおうかって話になつてるのよ」

「はい？」

『なんじやい？』

きよとんとするマコトとトリル。テーブルを移動し終えたタリハラは、今だそっぽを向いているランギスの脇腹をちよんとつついた。

「は、はは……えっと、私が君たちをここに連れてきて、治療を受けさせて、君たちがここまで回復したのはいいんだけど」

「ちよつとね、その代金分を彼のお財布から取り上げちゃつと、彼と彼がまとめるグループがしばらく困窮しちゃうのよ」

話の流れから、マコトはちよつと遠い目をした。

「……つまり、あたしらは今、このギルドに各自の治療代という借金があると」

「端的に言つとそうね」

さらつと笑顔で認めるタリハラ。おそらく、マコトやミコトの治療のほとんどを彼女が取り仕切っていたであろうことは予想できた。つまりは。

「大体が貴女への借金、てこと？」

「まあ、私が大体担当したけれど、シスタ支部の治療班全体に対するものね」

総額聞いておく？ と顔を近づけてきたタリハラに、マコトはかなり嫌そうな表情で片手を遮るように向ける。

「妹の意識が戻ったら、全員で聞く。あたしの方が先に動けるようになったら、団員になるならないもあいつと一緒に決めるとして、何か、団員としてじゃなくても手伝えることをさせて欲しい。あいつが目え覚ますまで」

「……わかったわ。ゴードイスにもそう伝えておくわね」

タリハラは笑みを深くし、そつとマコトの頭を撫でた。さらに彼女の表情がムスツとしたものになるが、特に振り払うわけでもなく大人しくされるがままになっていた。

「では、今日のところはこれで。お昼ご飯……の時間も近いわね。お昼過ぎに何か軽食を持ってくるわ。あと夕食。食器はあとで下げにくるから。あと、そのトリルさん？ は、一緒のままの方がいいかしら」

「ああ、置いていいのなら」

「そう。じゃあそれもゴーデイスに言っておくわね。じゃあ、きちんと寝ておきなさい。ランギス」

「はい。それでは」

軽く会釈をして、ランギスが扉を開く。開かれた扉を通り抜けたタリハラの後が続くように、もう一度礼をして、彼も部屋を出て行った。残されたマコトとトリルは、顔を見合わせる。

「どうするか、トリル」

「とりあえず、腹ごしらえじゃろ。まー、これ食べて「やつぱり団員にはなりません」とか言ったら、食い逃げになってしまうがの」
「だよなあ。ていうか組織相手に借金かあ。トリップしていきなり嫌な状況だチクシヨウ」

頭を抱えるマコトの頬に、トリルがぼんと肉球を当てる。

「あのまま、あの柄の悪い男どもに連れて行かれるよりは万倍マシじゃろーて」

「だな。よっし、ポジティブシンキング、俺たち幸運」

「うむー！」

ぐつと拳を握り、マコトは無表情でそうつぶやいた。

そしてトリルとともに、用意された食事を欠片も残さず食べきった。

(9) ギルド入団すでに決定(後書き)

入団 最初から借金。しかし貸してくれた方がとても善良なので、普通に働いて返してねーと。なんとも運の良いこと。そういう風に話を持っていってるわけなのだけど。

(10) ライフスタイルが見えました

「……ん、う？」

うつすらと目を開いたミコトは、何度か瞬きを繰り返して、寝返りを二度うつて、最後に大きく伸びをした。顎が外れるのではないかと、はたから見て思えてしまうほどの大あくび付きで。

「はふっあああ〜！ ……んに、だるい」

ゆっくりと重たい上半身をベッドから起こし、首を回して、両肩を回し、軽く身体をほぐしたところで、もう一度瞬き。

「……ど……」

自分が今座り込んでいるベッドと、夕日が差し込んできている木枠の窓、元いた世界の家にあったダイニングテーブルより少し細長い形のテーブルが一つに、病院でよく見るような形をした木製の丸椅子、そして何やら物々しい瓶やら器具やらが収められている棚が、ちょうどミコトのいるベッドと向かい合うような形で並んでいた。

「え？ 何？ ここ、どこなの？ お姉ちゃん、トリル!？」

思わず、この世界で唯一とも言える、心許せる『はず』の存在の名を呼んで。

(私、お姉ちゃんを、叩いた)

「ッー!!」

ぎしり、とベッドの支柱が軋んだ。

ミコトは思い出す。自分が意識を失う前の状況を、自分がしたことを。

「……そ、か」

きつと、マコトはもうここには来ない。トリルも、ぺしゃんこになつてどこかの路地裏に捨てられてしまっている。自分は何もできなかった。ただ、助けようとしてくれた、逃がそうとしてくれた、優しい姉の手を振り払うことしかできなかった。

「ごめん、なさい。おねえちゃ、トリル……ごめんなさい……!!」

ここがどこかは分からない。トリルが男の一人に踏み殺されそうになつて、それを目の当たりにした自分は、きつとそこで気絶してしまつたのだろう。そして、男たちのいるところへ連れ込まれて……。

かちん。

「あれ？」

ぼろぼろと零れていた涙が、突然引つ込んだ。今何か、記憶のどこかに、何かが浮かび上がってきた。

それは、人影。太陽を背にして、ミコトをのぞき込んでいる。直感から、追いかけていた男たちの一味ではないと否定する。そして、そして。

「……………うあ」

頭の中がぐちゃぐちゃだ。それに、身体が熱い。前にかかったインフルエンザの時みたい、とぼんやりし出した頭で思う。

と、ガタガタと視界の隅にある扉の向こうから、複数人の足音が聞こえてきた。それに、こもっていて内容までは聞き取れないが、誰かの話し声。率先してしゃべっているのは……………女性？

(だ、れ)

扉が軽くノックされる。ミコトは熱に浮かされた頭で、反射的に「どうぞ」と彼の鳴くような声を出した。途端、勢いよく扉が開かれて。

「ミコト……！」

「おお、起きたぞ、ミコトが起きたぞい！」

珍しく、満面の笑みを浮かべている姉と、見覚えはないが聞き覚えのある声をした老人が飛び込んできた。二人でおそろいのシャツにズボン、ブーツといった、どこかの作業員のような格好をしている。

「……………え、お姉ちゃん、と、まさかトリル？」

二人の登場と、急に冷えていった熱とに驚き、ミコトはそれ以上何も言えなくなった。ただ、駆け寄ってきた二人を、身を乗り出して抱きしめて謝る。

「ごめんなさい、ごめんなさいお姉ちゃん！ あの、あのとき、私ちゃんと逃げてれば！」

「もーいいよ。なんとか生きてるし、助けてもらったし。ほれ、謝るな、泣くな、はな垂らすな」

「ぶえ」

「ほっほ、いやーミコトも目が覚めてのー、本当によかった、よかったわい……」

マコトと同じようにミコトの背中を撫でながら、襟足を伸ばした薄い灰色の髪をしたひよる長い老人……トリルは、自身も思わずはなをすすった。

「あんたまで泣いたって今は撫でないよ、トリル爺さん」

「うつつ、マコト、老人はあ労らんとあかんぞい」

「労ってるって。きちんと、多分」

そう言って、マコトはゆっくりとミコトから身体を離れた。だが、その左手はまだしっかりとミコトが握りしめている。ミコトはトリルの方へ回していた左手を離し、ごしごしと顔を拭った。

「ぶ、え」

「おし、泣き止んだな？ ゴーデイス、タリハラ！ ランギスもいぞ」

ミコトの顔をのぞき込んだマコトは、小さく頷くと、扉の方を振

り返った。マコトの肩越しにミコトがそちらを見つめていると、扉からゆつくりとした動作で、ひげ面の山オヤジ、というのがしっくりきそうな男性を先頭に、少しふっくらした体つきのローブを着た女性、胸当てと肩当てだけをつけた軽装備の青年、背中に両手剣を背負った女性が入室してきた。

首をかしげるミコトに、マコトはゆつくりと、自分の口から彼らの紹介をする。

「まず、一番最初に入ってきたあっちのおじさん、あたしらのことを助けてくれたギルド『荒神の槍』のシスタ支部で一番偉い人で、ゴードイス＝レルグ。で、その隣のローブの人が治療班隊長のタリハラ＝メインスコール。あたしたちの治療をしてくれた人でもある」

そこで一旦言葉を切って、マコトは身体の位置をずらす。

「その隣、胸当てつけてる男の方が、あたしらを拾ってくれたお人好しの剣士で、ランギス＝ドルトメア。女の人の方は、あの日、町の警備を担当していたギルド『オックスアース』の副支部長で、ミネア＝エシユリー。とりあえず、あたしらが世話になった人達」

「あ、え、ええと、どうも、助けてくださって、ありがとうございます……」

マコトに促され、ミコトはぴよこんと四人に向けて頭を下げる。

ゴードイスは小さく頷き、タリハラは胸をなで下ろし、ランギスは一礼して、ミネアは微笑んだ。

「では、彼女にも話さねばなりませんな」

「あー、ええ、よろしくお願いします」

ぼりぼりと頬を掻いたマコトは、近づいてきたゴードイスに場を

譲った。ゴーデイスに正面から見つめられたミコトはおろおろしながら、姉の手を握りしめる。

「えと」

「ミコト、と言ったね。まずは意識がはっきりと戻ったようで、安心した。もう一週間近くも眠り続けていたからな」

「一週間!？」

「ちなみに、あたしは四日で治ったけど」

「マコトの方もずいぶん規格外よ……」

ミコトの驚きの声に混じって、マコトの申告とタリハラの呆れた声が聞こえた。ミコトは呆然とマコトを見上げて、

「私、なんで、そんなに寝てたの？」

「さあ。なんでも魔法行使による精神力の使いすぎらしいけど、お前、あたしが気絶したあと魔法使ったのか？」

「……覚えてない」

気絶する寸前の記憶をたぐろうとしても、思い出されるのは、路地に転がるマコトとぼろぼろなトリルの姿。そのあとのことは、霧に包まれたように不鮮明で。

「え？ あれ？」

そこで、少し疑問に思う。気絶していて記憶がないならば、ではこの『不鮮明さ』はなんなのか。

「……うーん」

悩み始めたミコトに、歩み寄ってきたランギスが、その時の状況

「内容は単純、あたしらが『荒神の槍』の治療班にしてもらった分の治療代と、借りた部屋代と食事代。ミコトの場合は普通の部屋じゃないくて、医療研究室でもあるからさらに上乘せ」
「ふへっ!？」

言われて、ミコトは部屋を見回す。確かに、この部屋は普通に人を寝かせておくただの部屋と言うよりは、学校の保健室なんかによく似ている。

「……そ、総額は？」

「それはまだ聞いてない。というか、お前が起きるまであたしも聞かないようにしていた」

ニヤリ、とマコトの口の端が持ち上がった。

「ミコト、この借金返すには、嫌でもなんでもこのギルドの団員になつて稼がなくなっちゃならなくなつたぞ」

「て、ことは」

「うむ、傭兵稼業じゃの。ここで生きていくための良い修行になるわい」

ほっほ、と気楽に笑うトリルに、ミコトはキツと鋭い視線を向けた。

「修行つて! 傭兵つて、そんな、私たちまだ子どもなんだよ!？」
「ミコト、それは言い訳だ。なんならお前、このまま請求突っぱねて、ゴードイスたちから逃げ切る自信あるか? 『荒神の槍』つてギルドは大概の町に支部を抱えてるっていうから、逃げ切るにはどつか人里離れた山にでもこもるしかないぞ。むしろ、そっちで生きていけるなら、団員になつてもなんとかなるんじゃないか?」

マコトの言葉に、ミコトはぐうの音も出せなくなる。ゴードイスが無言のまま指を組むと、タリハラとミネアもベッドへ近づいてきた。

「ギルドに入ってお金を稼ぐと言っても、別に、傭兵しか仕事がないわけではないのよ。確かに傭兵宛の依頼をこなした方が報酬は多いけれど」

「それとも、貴女の方は私のところのギルド……『オックスアース』にでも入ってみる？ あなたほど魔法使いの素質があれば、こつちとしてはむしろ引き抜きたいくらいなんだけど」

「ふ、ミネア殿、そんなことをこちらが許すとても？」

「あら、ゴードイス支部長も狙ってらしたの」

からからと笑って、ミネアは一步後退する。その会話についていけなくなったミコトは、マコトにそつと耳打ちをされた。

「なんでも、ミコトの持つてる力は魔法使いとしてすごいもんじゃないな。あたしは全然よく知らんけど。量もあつて、回復も早いんだつてさ。普通そんな人間いないんだと」

「え、お姉ちゃんは？」

「あたしの方は、ランギスにあの時の逃げっぷりを見られて……こつちが完全に嫌だつて言わない限り、傭兵扱いになるかな。荒事なんてしたことないんだけど」

「のわりに、堂に入ってたよ？ 喧嘩してたお姉ちゃん」

「へーへー」

「……で、二人とも、と、トリル殿」

ひそひそ話をしていた二人と傍らに立つ老人に向けて、ゴードイスは静かに声をかけた。

「いや、僕は基本、猫じゃからの。敬称はつけなくてよいぞー」
「ふむ、ではマコト、ミコト、トリル。君たちは、ギルド『荒神の槍』の団員となって働くかね？ それとも、我等の包囲から逃げるか……さ、どちらだ」

にっこり笑顔とともに示された道は、最早一つしかないと言っていい。

「……いや、逃げ切る自信ないので、頑張っただけがさせていただきます」

「た、戦いとか、そういうのは怖い、ですけど、お手伝いなら頑張ります」

「うむ、僕は二人についていくからの」

……こうして、現代からトリップさせられた三人は、ギルド『荒神の槍』に入団することが、今、決定された。

「恨むのなら、自身のふところの余裕を考えないまま君たちを保護したランギスを恨んでくれ」

「し、支部長……」

(10) ライフスタイルが見えました(後書き)

ミコトも復活！ そして地味ーに人間形態のトリルも初お目見えです。

トリルの変身シーン、ちょっと唐突すぎるかな……。

そして、一応ここで一段落と言うことで『第一部：異世界召喚』は終了です。次回から『第二部：ギルド「荒神の槍」』をお送りします。第二部は、第一部より結構長くなる予感がします。

(11) ジョブセレクト喧々囂々

マコト、ミコト、トリルの三人が、ギルドに対する借金を返済するためギルド入団を決定した翌日。

「とうわけなんだが……」

彼らを保護した張本人なら、きちんと最後まで面倒を見ると言われたこの青年、ランギス＝ドルトメア。今の言葉は直属の上司である支部長のもののだが、それはもちろん当然のことで、ランギス自身名乗りあげようと思っていたのだ。

思っ、実際託されて、こうして向かいあって話しているのだが。

「だ、か、ら、報酬がいつぱいっていつても、わざわざ危険な事なんてしないでいいじゃない！ 依頼書とか見てみれば、ほら草刈りとか農作物の収穫とかだっ、てあるし！」

「わかつてる、確かに現時点での実力は、あたしもお前もほとんど無いに等しい。だからっ、てっ、と依頼料の低い仕事ばかり請け負ってたら、いつまでたつても借金は減らないぞ。毎日毎日下働きじゃなくて、誰かギルドの先輩とかから情報仕入れて、あわよくば訓練とか見てもらっ、たりしてだな」

「んもー！ お姉ちゃん、自分が女の子ってこと忘れてない！？」

「牛がいるぞー。ここに黒毛和牛がいるぞー」

「おおお姉ちゃああああんっ！！」

「……トリル、なんとかしてくれないか」

『儂に言われてものっ……』

ランギスは目の前で繰り広げられる少女たちの舌戦に身を引き、同じようにテーブルの隅で丸くなっていたトリルに声をかけた。だ

が、返事はずれないもので。

「なんでそんなに嫌がるんだ」

「どうしてそんなにやりたがるの」

「報酬がいい、自分の力を磨けるから」

「危険だから、危険だから、危険だからーっ！」

「あー、ミコト、落ち着いて」

「ランギスさん！　ランギスさんも何か言ってやってください！

傭兵とかそういう分類されてる人達が請け負う仕事って、やっぱり危ないですよーね！？」

口を挟んだが最後、矛先を向けられてしまったランギスは思わず息を呑んだ。顔を真っ赤にしてこちらを睨むように見つめてくるミコトもそうだが、何か、ランギスがどんな答えを返すのかに興味を示しているマコトの視線にも。

「……ええと、確かに、危険がつきものでない依頼は、少ないかもしれない。荷馬車の護衛なんかも、大概護衛が必要なのは野盗の類が出る地域を通過するからだし、何かの研究材料をとってきてほしいっていうのも、険しい山だったり、魔獣が住みつく洞窟だったりする場合もあるから」

「ほらね！？　聞いた、お姉ちゃ」

「でも、そんな依頼を最初から君たちみたいなの新人りに回すわけがない」

「……え？」

自分の意見に賛成して貰えたと思えたミコトの口調が、一気にトーンダウンする。

「傭兵としてギルド団員に登録されるといっても、やっぱりランク

付けが存在する。例えば、私のランクは『ソロンの2』……これは一番真ん中かな」

「ランク付け、ね。それで傭兵のランクと依頼のランクを釣り合わせていく、という方式か？」

頷きながら確認を取ってくるマコトに、ランギスはやや驚いた様子で肯定した。

「そう。一番下が『デルの3』で、2、1と続いてから『ソロンの3』というランク、さらに三つ数えて最上位『ヴァーミス』というランクに到達する。大体、どのギルドもランク付けの名称は統一しているけれど、たまにこれらと異なるランク名称をつけているところもあるんだ」

「……今のあたしたちが、傭兵としてこのギルドで働くとして、やはり最初は『デルの3』からなのか？」

「一応、試験で最初のランクを認定させるものもあるけれど、最初は地道にやっていった方がいいかな。依頼をきちんとこなせば、ギルドの方からランクを上げてもらってという許可が出るから」

「だ、そうだ。ミコト」

マコトの言葉に、ミコトは俯いたまま微動だにしない。

「まあ、無理強いはいしないけど。なんなら、ミコトは農作業で安定した収入確保して、あたしは訓練しつつ傭兵として働くし」

「……お姉ちゃん、怖くないの？」

「怖いさね」

「だったらあ！」

「なんだよ、心から怖がつてろってか？ もうガクガク震えながら

『あたしもう何にもできない。怖いから』ってつぶやいてればいいのかよっ!?!?」

ガツ、とマコトが怒鳴り声を上げると同時に、テーブルの支柱を蹴り上げた。がこん！ と鈍い音とともに、危うく天板が外れかける。トリルは素早くテーブルの上から飛び降り、ランギスは慌てて天板を押さえた。ミコトは両手を口元に寄せて、肩を小刻みに震わせている。

「……悪い」

ぶらんとテーブルを蹴り上げた足を揺らして、マコトは決まり悪げにそうつぶやき、小さくため息をつく。席を立った。

「え、ちよつと、マコト？」

「ランギス、あたしちよつと頭冷やしてくる」

そう言っつて、マコトはとつとその場を離れていってしまった。残されたランギスは、呆然としているミコトを見て、すでに見えないマコトの背を探して視線を彷徨わせ。

(どつしると……?)

先ほどまでいた、ギルドに所属している傭兵や技術者、下働きの人間が集まっていた談話室を離れたマコトは、近くの階段を上り、最短ルートでテラスに到達した。ぽかぽかと暖かな陽気が全身を包み、ふつと眠気が襲ってくる。

「……だあ」

あんなふうにはキレるつもりはなかった。ただ、珍しく駄々をこねるように傭兵の道を洩り、姉にもそちらへ行かせまいとするミノコトが、彼女の心配が、ひどく。

「どうかしたかね」

「っ」

勢いよく振り返った先に、ゴードイスが立っていた。マコトと同じようにテラスでのんびりしていた人々も、ゴードイスの姿を見て姿勢を正したりしている。

「……ちよつと、妹と喧嘩」

「ほう、昨日あれだけ仲がよさそうだったのに」

「傭兵になりたくないし、あたしにもそんな仕事させたくないんだってさ」

「それはそれは、姉思いのいい妹じゃないか。心配してくれているのだろう」

「それを、うつとうしい、って思っちゃったんだよ」

「っ、とマコトのブーツの先が、テラスを囲う柵にぶつけられる。

「こつちだつて、必死で、どう生きていけばこれから先、たとえ一人になったとしても生きていけるだろうかって考えた末の結論なの。そりゃ、依頼をたくさんこなして、力がついてくれば危険はついてまわるだろうけど」

「君たちの身体もだが、心の方もだな」

ゴードイスの言葉に、マコトは視線だけを彼の顔へ向ける。空を

見上げていたゴードイスは、ゆっくりと、マコトと視線を重ねた。

「……君は、分かっているようだが、覚悟がまだ出来ていない」「出来ない、と思う。ていうか、そこまでいけないだろうなって」「命のやりとりをすることで、ということか」

無言で頷くマコト。それに対し、ゴードイスはぼさぼさの髭を大きな親指と人差し指で撫でながら答えた。

「この先一人になってしまったことを考えると、君たちにはもう、帰るべき場所はないんだね？ 君たち以外に、家族と呼べる存在もない」

「ああ」

「ずっと、このギルドで働くという選択肢はないのかね。なんなら、このシスタ支部を拠点にして生きていっても、そういった人間は山ほどいるから、全く構わない」

「……………どうすっかなー」

両手の指を一本ずつ組んで、手の平を太陽に向け、大きく伸びをする。手をほどくと同時に、マコトは深く息を吐いた。

「まあ、もう一回いろいろ考える」

「妹と一緒に、だな」

ゴードイスの短い言葉に、マコトはごく自然な動作で振り返り。

「だーな」

ニコリと、その年頃の少女らしい笑みを浮かべた。

「……驚いた。君も笑うんだな」
「一応人間なんで」

心の底から驚いた、といった様子で、ゴードイスは瞬きをした。途端にマコトの表情が、いつもどおりの仏頂面に戻ってしまう。もつたいない、と心の中で彼はつぶやいた。

「タリハラあたりに見せれば、喜ぶぞ」

「作り笑いは嫌いだ」

「では、今は笑いたいと思ったから、笑ったと？」

「ああ」

彼女は既に身を翻し、テラスから出ていこうとしている。ゴードイスに見えるのは彼女の背中だけ……だが、一瞬、またクスリと彼女の周囲の空気が揺れた。

「笑うことは、嫌いじゃない」

そう言って、マコトはテラスから姿を消した。

マコトがゴードイスとの対話を切り上げ、談話室へ戻ってくると。

「……私、そんなに臆病、かなあ」

「えーっと、ミコトが臆病ってんじゃないわよ！ ん、それに大丈夫、ミコトとこの辺りじゃ、環境が全然違うのよね！？ ミコトくらいだったら、まだそんなに働いたりしてなかったのね？」

「うん、わた、私、勉強とか……してた、から」

「べ、勉強……（ちよっとランギスこの子ひよっとして貴族なの！？）」

「（わ、私に聞かれても困るが、しかし黒髪の貴族といたら噂になるはず……）」

「う、うええ」

「あああ〜！」「」

ソファを一つ独占して、マコトのいない間に変身したらしい老人姿のトリルに頭を撫でられながらぼろぼろと泣いているミコトと、その前でうろたえているランギス、そして、見慣れないワインレッドのローブを着た女性が。

「……また泣いてるし」

「あ、マコト！」

ぼそりとつぶやくと、ランギスが素早い動きでマコトの手首をつかんだ。やや視線を鋭くさせて、ミコトの前へ引っ張っていく。

「その、なんですか、とりあえず、うん、……泣き止ませてあげてください」

「最終的にはどんどん下手になっていくのなアンタ」

マコトは腕を組み、トリルに視線で「黙っておけ」と合図を送ってから、めそめそと涙をこぼすミコトを見下ろした。

「そんなに嫌なら、あたしも傭兵やらない。普通にバイトして、借金返す」

望んでいたはずのマコトの言葉に、ミコトはびくりと怯えるよう

に肩を震わせた。

「それだったらそんなに危ないこともないし、なんかさつき会った
ゴードイスも、暮らすんならここで暮らしてもいいって言ってたし。
それに、約束だって守れる」

「……やく、そく？」

「『生きること』」

その一言に、ミコトは大きく目を見開いた。そのあからさまな反
応に、マコトは呆れたように首筋を搔く。

「忘れちゃいないだろうけど、あたしらはここで生きていかなきゃ
ならない。元いたトコことは、この際、しばらく忘れておいた方
がいいだろ。もちろんマジで忘れるわけじゃないけどな」

「……うん」

こくりと頷く。それに満足して、マコトはさっそくこの決定を伝
えようと、再度ゴードイスの元へ行こうとしたのだが。

「ん？」

くい、と服の裾をつかまれ、その場から動けなくなる。振り返れ
ば、やはり裾を握っているのはミコトで、彼女はもう一方の手で、
ワインレッドのローブを着た女性の手を握っていた。

「み、ミコト？」

「……カミン、さん。私、魔法の才能、あるんですよね」

ミコトのこの質問に、マコトは一瞬息を止める。

「え、ええ。そんなことは確かに聞いているけど」
「でしたら、その、教えていただいても構いませんか？」

「「へっ!?!」「」「……ミコト」

ランギス、カミン、トリルの素っ頓狂な声と、マコトの「何考え
てるお前」といったニュアンスを含んだつぶやきに、ミコトは俯き
ながら答える。

「えと……いろいろ、思い浮かんで。お姉ちゃんの言葉とか、あの
人の言葉とか」

「例えば？」

「う、お姉ちゃんのは、『利用できるものは物でも人でもなんでも
使って楽をしる』ってヤツ」

ああ、言いそう。そんな三者の視線がマコトに集まる。

「それで、あの人の言葉は……」力は君たちとともに成長する『つ
て」

「……ああ、そんなことも言ってたな」

ややとぼけたように、マコトは答える。これは周りにランギスや
カミンがいるためなのだが、ミコトはお構いなしに続けた。

「私、怖いけど、その、あの、やっぱり、お姉ちゃんがやるってい
うなら、私もやる。頑張る。頑張って、成長するから」

「落ち着け。それ、前言撤回して傭兵になるって言ってるのか？」
「うん」
「あー」

こうまで見事に意志を切り替えられるとは、マコトは思っても見なかった。むしろ、ここは自分が折れるべきなのだろうなとゴードエイスとの会話で考えてきたというのに。

「だから、魔法の力も勉強する。お姉ちゃんの役に立つように！」

「いや、あの、ミコト」

「……お姉ちゃん、傭兵、嫌になった？」

頑張って決心したのに、というなんとも身勝手なココロの音がダイレクトに聞こえてきたようで、マコトはまた目を潤ませたミコトを見下ろし、難しげな顔をしてこめかみをもみほぐした。

「……いや、いい。そういうなら二人そろって傭兵登録するぞ」

「うん！」

「というわけでランギス。雑用は無し。新入り下っ端傭兵ふた」

「儂もいるぞい」

「……訂正、三人もしくは二人と一匹で登録よろしく」

「あ、ああ、わかった。て、え、トリルはどんな風に登録すればいいんだ……？」

「え？ トリルさんも登録するなら普通にすればいいじゃない。っていつか、あなた誰のこと動物みたいに」

「儂、獣人じゃよ。お姉さんや」

とたん、トリルの頭頂部で、今まで髪に埋もれていたらしい猫の耳がばさりと持ち上げられた。その左耳に、変わった模様が刻まれたピアスがはめられている。しかし、すぐにぺたりと頭にくっつい

てしまい、また髪の毛に同化した。

「猫耳あったんかい。どうりで人間の耳が見当たらないわけだ。長いもみあげかと思ってた」

「ただのー、あるにはあるんじゃないが、持ち上げるのが面倒でのー」
「せめて人の話を聞くときくらいは持ち上げてろっつーの。だからか、いつも妙なところ聞き逃してたのは。耳が遠くなってたっつーか自分で塞いでたんじゃねーか」

マコトが普段よりも数倍汚い口調でトリルにつっこむ。それを受けて、トリルは「いやあ」と気恥ずかしげに頭を掻いた。

「ま、とにかく、登録云々はもうランギスとかに任せる。丸投げ。あたし考えすぎて疲れた。部屋戻る。明日はもつと町見物」

「お、お姉ちゃん待って！ えと、えと、よ、よろしくお願いしますっ！ それじゃあ今日はこれで」

「ミコト、儂もおいてかんでくれ」

盛大なため息をつきながら、またあっさりとした談話室を出て行ってしまったマコトを追いかけるように立ち上がり、ミコトはランギスとカミンに向けて一礼した。そのまま走り去ろうとしたところで、老人だったトリルの姿が急にぼやけ、ぽん、という小気味よい音とともに、よろよろの小柄な猫の姿に変わる。

怒濤のように去っていったしまった新入りたちの姿に、カミンはぽかんと口を開け、茫然自失。

「なに、あれ。猫が人で人が猫に？ ていうか、運ぶの手伝ったときも思ったけど、あの子たち本当に姉妹なわけ？」

「ああ、何気に面倒なこと押しつけられた……またこれから受付にいつて書類作業か」

その隣で、ランギスは少女たちのフットワークの軽さに、目眩を覚えていましたとさ。

(11) ジョブセレクト喧々囂々(後書き)

仲良さそうな姉妹でも、人並みに喧嘩しますとも。

そんなこんなで、結局二人は『傭兵』としてギルドに入団することが正式に決定いたしましたとさ。

(12) アグリカルチャな初仕事

マコト達が、ギルドに傭兵として加入することが決まり、その他諸々の書類契約などもすませて（もらって）から、二日後。ギルド『荒神の槍』であることを示すためのレリーフを彫り込んだメダルを受け取り、それに取り付ける個人認証用の水晶も設定して、彼女たちは名実ともに、れっきとしたギルド団員となった。

「それで、だ、ミコト。今のあたしらのランクは？」

「試験もなんにも受けてないから、『デルの3』」

「その通り。というわけで、できる仕事と言えば……たとえば傭兵登録をしようとも」

「けっ！」

「ばさばさばさ」とマコトの目の前を白いもふもふした塊が飛んでいった。

「このとおり下働きとなんら変わらない」

「はい、ごめんなさい。数日前の私はとても自意識過剰気味な感じでした」

「わかればよろしい。ということと、とっとと卵回収するか。このあとは野菜の収穫も手伝わにゃならんし」

「う、うん。えっと、風よ、目標をいませよ」

そう言っつて、マコトの隣に立っていたミコトは、右手と左手の人差し指だけを立てて、詠唱しながら指揮者のようにハの字に振った。すると、彼女たちがいる小屋の中へ、ひゅっつとすきま風にしては強いものが吹き込んできた。それはそのまま渦を巻き、バタバタと暴れる鶏たちをまとめて空中に持ち上げてしまう。

「こけっこー!!」

「ふーん、なんだかんだで魔法使えるようになったんだな。ホントに」

「うん、でも、今の鶏たちでも結構キツイの……人の身体はまだまだ持ち上げられないし」

「いや、初めてにしては十分すぎるだろ。カミンだって飲み込み早過ぎって焦ってたぞ」

「カミンさん、魔法使いの典型って感じしたけど、本当は別らしいね」

「ふーん」

ミコトが風の魔法で鶏たちの動きを止めている間に、マコトは素早くわらの上を駆け抜け、落ちていた卵を一つ残らず回収した。依頼主から借りた籠いっぱいになったところで、小屋の出口に立つ。

「ミコト、動ける？」

「ん……集中切れそうだから、無理」

「じゃあ今度はあたしが追い込んでおくから、魔法解いたらすぐ出な」

「うん」

腰のベルトから自身の手から肘くらいまでの長さの木の棒を取り出し、マコトは籠を地面において、出口から一歩足を踏み入れた。とたん、ミコトの指が動き、渦巻く風が消えた。ぼとぼと地面に落ちた鶏たちは、一種の恐慌状態に陥る。

「こけ、こけっこー!?!」

「っだあうるせえ!」

ぶんぶん当たらない位置から棒を振り回し、出入り口付近から鶏を追っ払う。その隙に、ミコトはパタパタとマコトの方へ駆け寄ってきた。ミコトが小屋を飛び出した瞬間、マコトも身を引いて、出入り口の扉を閉める。

まだ中で鶏たちが騒いでいる声が聞こえるが、しばらくすればまた落ち着くだろうと、マコトはそう考えながら棒をベルトにつけたホルスターにしまい込んだ。

「おし、これまず届けてくる。ミコトは先に次の仕事確認してきてくれ」

「はい」

鶏小屋の前で、二人は別れる。ミコトは鶏小屋からさらに奥の敷地へ、マコトは籠を抱えて近くの納屋らしいところに入ってしまった。少々雑ではあるが、きちんと手入れはされているらしい農具一式が向かって右手の壁に立てかけられており、左手には何も乗っていない三段の棚があった。

真ん中の棚に卵の入った籠をそつと置いて、マコトは次の作業に使うと言われた道具たちの発掘に取りかかる。革ベルトで背負えるようになっている一抱えほどの大きな籠を三つと、草刈り鎌、スコップのような平たい鉄の道具など、少女一人ではとうてい抱えられそうもない大荷物である。

「さてと」

しかし、マコトは存外あっさりとそれを一気に持ち上げて、納屋の扉を足で開け閉め、そのまま軽い足取りでミコトや依頼人たちもいるはずの畑へ向かった。

「よっす、持ってきました」

「おおっ！　すげえな嬢ちゃん、よくまあ全部いつぺんに……」

すでに作業を行なっていた大人たちは、マコトが持ってきた道具を、礼を言いながら持っていった。道具が草刈り鎌一本だけとなったところで、マコトも作業を手伝おうとリーダーである男に声をかける。

「これで、どこやればいいんですけどっけ」

「おう、あっちのサルザンを、みんなの真似して刈り取っていつてくれ」

「はいよ」

ミコトの位置を確認しつつ（彼女は手作業で取れる作物の手伝い中だった）、サルザン畑へ足を踏み入れる。

サルザンはキャベツの二回りくらい大きい青緑色の葉野菜で、形は例えそのまま。ただ、一番てっぺんの部分が花ビラのようにふわふわと開いていて、少しレタスっぽい。マコトは手でひねれば取れるのではないかと首をかしげたが、近づいてきた少女が笑ってしゃがみこんだ。

「あなた、サルザンのことそんなに見てて……ひょっとして、収穫前の見たこと無いの？」

「あ~~~~、まあ、ていうか、手で取れないのかなーとか、わざわざ鎌でやらなきゃならんのがよくわからん」

「わからん、て……手でどうやって取るっていうの？　私の手首くらい太い芯があるんだから、いくら引っ張ってもとれないんだよ」

見てて、と言いながら、少女はサルザンを両手で掴み、うーんっ！と勢いよく引っ張った。だが、サルザンはびくともせず、数秒して、少女が根負けした。

「つぷはあ！ ほら、全然動かない。きつとお父さんとかお兄ちゃんあたりが頑張ればいけるかもしれないけど、私たちみたいな女手だったら絶対に」

「なるほど、じゃあこうしたらどうかね」
「え？」

少女の言葉を遮って、マコトはサルザンの前に片膝をつき、先ほどの少女と同じように掴みかかった。

「ちよつと、遊んでる時間は」
「よっ」

少女がマコトのことを叱ろうと口を開きかけた瞬間、みしみしボキッと小気味よい音がして、平然とした様子のマコトが根から離れたサルザンを抱えて観察していた。

「ふーん、結構重いんだ、これ」
「な、え、嘘？」
「やり方が違うだけだ。しっかり見てな」

少女を自分の正面に移動させて、マコトは隣のサルザンに手をかけた。そして、引つ張るのではなくハンドルを回すように、右手は奥へ、左手は手前へと力をかけていく。すると、みしみし……と軋むような音が聞こえたかと思うと、ボキッと一気に芯が折れた。鎌でやるよりも断面はおうとつだらけだが、早い。

「引つ張るんじゃないかって回してみた。意外と取れる」

そう言われて、少女は首をかしげながら、手近なサルザンに近寄

った。そして、マコトがやったように引っ張るのではなく回してみる。みし、みしと、確かに引っ張るよりは手応えがあるが、やはりあそこまで豪快に芯を折ったりはできない。

小さくため息をついた少女は、振り返って仰天した。ボキンボキンとリズム良く、マコトが素手でサルザン収穫を続行していたのだ。その音に気付いて振り返った大人たちが、全員して口をあんどりとあけてそれを眺めている。

「は、早え……なんだ、あの早さ。鎌使ってねえのかよ？」

「手だけでやってるみたいだけど」

そのうち、少女の兄が素早くマコトに近づいて、何やら事の詳細を聞いていた。マコトが目の前で実演するのを眺め、そのすぐ隣のサルザンで試している。どうやら、兄はマコトと同じようにもぎ取ることができたらしい。子どもっぽい歓声を上げて、マコトの背中をばしばしと叩いていた。

「……あの人、すごい力持ちね」

あの分だと、サルザンはすぐに収穫が終わりそうだと、少女は小さく笑って自分の鎌を手に構え直した。

「ほいよっ お疲れ様！ 特にマコトな。ああいや、ミコトが仕事してなかったわけじゃあねえよ。驚いちまったヤツでさあ」

「おかげでいつもの半分くらいの時間でサルザン収穫し終わったしな。他のことにも手が回せだし、ギルドに頼んでてよかったな、

「親父！」

「ああ、まさかこんな女の子がくるたあ思わなかったがいいでででっ！？」

「はいはい、その口をとつと閉じなさい。はい、マコトちゃん、ミコトちゃん。報酬はギルドの方に預けてあるから、これは私たちからのお土産。今日か明日にでも食べてちょうだい」

夕暮れ時、作業も終わってギルドへ帰還する時間となった二人は、依頼主の一家に別れの挨拶をしていた。今は、目の前で奥さんが依頼主の旦那の耳たぶを片手で引っ張り上げながら、マコト達には笑顔に向けて包みを差し出してきている。

「あー、どうも……」

「ありがとうございます。それじゃあお疲れ様でしたー」

マコトがぼそっと礼を言って包みを受け取り、ミコトはその隣できちんと頭を下げてあいさつをした。疲れでややふらつきながら歩いている二人の背中を、一家はちよつと心配そうに見送った。

「私、ギルドまでついてあげようかな」

「でも、これから暇ってわけでもないからねえ。まあ、ここ郊外だから、ギルドが馬車を出してくれるって言ってたし、大丈夫ですよ。さ、戻りましょ」

「ほーい」

「……一体いつ耳から手を離すんで」

旦那はとうとう、次の作業が始まるまで耳たぶから手を離してもらえなかった……らしい。

一方その頃。お土産をもらって内心ほくほくだったマコトは、「む」とつぶやくと顔をしかめ、持っていた包みをミコトに渡した。

「お姉ちゃん？」

「……調子に乗りすぎた。腕が痛い」

「もーっ！ まだ無茶な使い方しちゃダメってみんなに言われてるでしょ！ タリハラさんにまたお説教されるんだ」

「いや、意外とコレ使い勝手悪いぞ。発動するなって考えてても、ちよっと力んだら終わりだし。こりゃあ力っていうか、身体の使い方から覚えないとダメだな」

「……万年ヒキコモリのお姉ちゃんが、どうやって？」

「勘」

「はあ」

ぶらぶらと痺れるような痛み of 走る両腕を揺らして、マコトは正面の風景をじつと眺めていた。やがてぴたりと足を止め、ある一点をじつくりと見つめ始める。

「……いた。ミコト、なんか合図」

「うん」

言われて、ミコトは包みを左手だけで抱え、右手の人差し指でゆつくりと何かの模様を宙に描くような動作をした。そして、素早く下から上へと指を振り上げ、つぶやく。

「光よ弾ける」

すると、ミコトの頭上三メートルくらいの位置で、突然光の球体が登場、そのまま音もなく、花火のように弾けて消えてしまった。

「あー、見えたみたいだな。こっち来る」

身体能力向上の恩恵で、眼鏡が無くともそこそこ遠くまで見渡せるようになったマコトは（しかしなんとなく落ち着かないので、ただかけている）、『荒神の槍』ギルドの印が刻まれた荷馬車が、こちらへ走ってくるのを確認した。

「……身分証の掲示をお願いします」

「ん」

「はい、どうぞ」

御者の青年に促され、首から革紐で下げていたメダルを見せる二人。さつとそれを確認した青年は、素早く御者台から降りると、荷台のほうから小さな三段階段を取り出した。

「それじゃ、支部に着くまで休んでくださいね」

「ありがとうございます、ほら、お姉ちゃんしっかり！」

「……ういー」

酔っぱらいのような声を上げて、マコトは階段を上り、荷台の端つこに座り込む。ミコトもそれに続き、荷台の中にたたんで置いてあった毛布を一枚手に取る。青年に許可を取って、二人でそれにくるまった。

「なんか、森にいったときのこと思い出すね」

「あのときはこんなに腕痺れてなかったけどなー」

「うーん、次に覚える魔法は、やっぱり治癒系統にしようかなあ…」

「…」

「それだと、あたしの後援しかできないんじゃない」

「なんとかかするもん！」

「へえへえ」

そんな会話をしているうちに、二人の興味は依頼者一家からもらったお土産へと移っていった。

「……なに入ってるんだろ」

「食べ物だよな、食べてって言ってたし。……ここで開けるなよ」

「うつつ！ ケチ」

「ギルド帰るまで待てんのか」

やがて二人の話題も尽き、沈黙が多くなってきた頃、がらごろと人の早足程度の速度で走っていた荷馬車は、夕日がほとんど地平線の向こうに沈んでからギルド支部へ帰還した。

ギルド支部の裏手へ荷馬車をまわし、荷台を倉庫の方へしまおうとした青年は、荷台で仲良さげに身体をくっつけて眠っているマコトとミコトの姿を見て、思わず微笑んだ。一度起こすのは気が引けるが、一晚寒々しい倉庫で明けさせるわけにはいかない。

「二人とも、起きてください、着きましたよ」

「……ふえ？」

「……ぐー」

青年の言葉ですぐに眠りから覚めたミコトは、なんとかしてマコトの方も目を覚まさせ、青年の苦笑を受けながら支部の中へ入っていった。疲れと眠気でふらつくマコトを引きずりながら、ミコトはカウンターへ向かい、今回の依頼内容や報酬等の情報が刻まれたプレートを差し出す。

「終わりました」

「はい、ご苦労様。……あら、あなたたちこれが初依頼だったのね。報酬は二人分、六十セイルになるわ」

「あれ、報酬の何割かは借金返済にあてられるって聞いたんですけど」

ど……？」

かく、と首をかしげるミコトに、カウンター嬢はにこりと笑って答える。

「基本的に、ギルドに対する借金分割返済最低額は五十セイルからなのよ。大概、それでも低すぎるから、契約時に『二百セイル以上の報酬額が貯蓄されてから』、あなたたちの借金返済は始まるわ。……一応、このまま貴方たち名義のギルドバンクへ預けてしまうけれど、いい？ 何か町で買いたいものがあるなら、今渡すけれど」「あ、いえ、そのまま預けちゃってください。お願いします」「はい、じゃあそっちの子も限界みたいだから、ゆっくりおやすみなさい」

四角い水晶の上にプレートがかかげられ、きらりと光を反射すると、プレートに刻まれていた依頼情報はすっかり消え去っていた。それをカウンター嬢から受け取って、ミコトは再度頭を下げる。そして、後ろで立ちながら居眠りをしていたマコトを引きずって、自分たちに割り当てられた部屋へと向かった。

二人に割り当てられた部屋は、マコトが寝かされていた部屋と同じくらいの広さで、低めの二段ベッドが設置されているぐらいしか変わりなかった。あとは一人用にしか見えないクローゼット（マコト達は荷物が少ないので十分だが）、窓際に固定された机に、背もたれのある椅子が一脚。椅子の上には、ギルド登録を完了した日にカミンが贈ってくれたクッションが置かれており、その上でトリルがのんびりと二人を出迎えた。

『おお、お帰り二人とも。ずいぶん疲れてるようじゃの』

「うん、なんかご飯食べるのもめんどくさくて……もらったお土産気になるんだけどなあ」

『空いておらんなら、そのまま眠ってしまったってもよかるって』
「うう、でも汗ベタベタなんだよね……せめて身体拭こう」と

風呂に入る、シャワーを浴びるといふ行為は基本的に貴族の特権、というヴェルホーク。マコトは若干顔をしかめ、ミコトに至っては悲鳴を上げるなどの恥ずかしい反応を示してしまったこの事実だが（そのせいで、一部の団員にはやはりマコト達がどこぞの令嬢なのではないという噂が流れている）、ギルドにもそういった施設が設置されていないのであれば仕方がない。そう、机の上に用意されている新しいタオルを手に、洗い場へ向かう度ミコトは思っていた。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんも身体拭かなきゃ、泥だらけだよ」

「……あした」

「ダメ。今日なら身体拭いてあげる」

「……わあった」

すでにどろどろなマコトからマントをはぎ取り、自分の分と一緒にクローゼットに押し込む。上着なども脱いで軽装姿になったところで、トリルが思い出したようにミコトに言った。

『そういえば、鞆の中がなにやら光っておったぞい？ どうやら、

あの本が光源だったようじゃが』

「本って、ヴェルホーク解説書か……」

「そのネーミングはどうかと思うけど」

タオルを抱えつつ、ミコトはちらりとクローゼットの奥に置かれた革の鞆を見下ろした。結局保存食や二枚目の毛布などは手付かずのままに残っている。一度ランギスたちに品物の鑑定などを頼んだときに、広げたままたみ方の分からなくなった毛布も、魔法を使うことでもとの板状に直せることを教えてもらったりした。

あと、マコトが『ヴェルホーク解説書』と呼んだあの本は、やはりこの世界の人間の誰にも読むことはできなかった。まあ、マコト達の目から見て、はっきりと日本語で書かれていると認識できるので、当然だろうとは予想していたが。

「本が光るって、どういうことだろ……?」

「虫食いのところがどこか復元して、新しい情報が読めるようになったとか」

「なんか、ファンタジーな事態になると目が輝き出すよね、お姉ちゃんって」

『マコトは魔法とか大好きだからのう』

「ごろごろと喉を鳴らしながら笑うトリルだったが、ほんの僅かにマコトの周囲の体感温度が下がるのを敏感に感じ取り、耳と口を垂れさせる。

『す、すまんの。マコトは魔法、使えんのだったな』

「うん……、私の方に、お姉ちゃんに回るはずだった分の魔力もきたって賢者さん言ってたし……ご、ごめんねお姉ちゃん!」

「いや、うん、気にはしてるけど、いいや。代わりに怪力パワーもらってるし。二人そろってちょうどいい……」

「あ、お姉ちゃんちよっと待ってよ! トリル、まだ待っててね。戻ってきたら本見るから!」

『うむ、行ってらっしゃい』

慌ただしく部屋を出て行く二人に向けて、トリルは手を振る代わりに、ひらひらとしっぱの先を持ち上げた。

洗い場から戻ってきた二人は、ギルドから支給されていた新しい服を着て、もらったお土産を広げつつ（味噌味に近い味付けのあぶり肉と付け合わせの煮野菜、果物だった）就寝前にトリルの言っていた本を調べることにした。マコトはなるべく眠らないように椅子に座っており、ミコトはベッドの下の段に腰掛けてトリルをひざの上にのせ、見た目は変化のない古ぼけた本を眺めていた。

「やっぱり、お姉ちゃんの言ったとおり中身かな」

そうつぶやいて、ぱらぱらとページをめくる。最初に書いてある異世界ヴェルホークについての簡単な解説や、世界地図などはそのままだ、やはり虫食いの多いページを根気よく眺めていく。

椅子に座ってクッションを抱きしめながら、肉を一切れ口に放り込んだマコトが、咀嚼をしながら睡魔に負けかけて舟をこぎ始めたとき。

「あ、うん」

何かを見つけたらしいミコトが、本を開いたまま一カ所を指さし、マコトとトリルに見せた。うん、と唸りながら、寝ぼけ眼でそこを流し読みしたマコトは、小さく首をかしげる。

「これ、前にランギスから聞いたギルドの基礎知識だよな。ランクとかの」

「うん……でも、後ろの方はもうちょっと突っ込んだこと書いてあるみたい」

“ギルドに所属すると、実力判定試験を受けない場合は最低ランク『デルの3』から、試験を受けた場合、その結果に見合ったランクから活動を行なうことができる

ギルドのランクは、下から

『デルの3』 『デルの2』 『デルの1』 『ソロンの3』 『ソロンの2』 『ソロンの1』 となっており、最上位ランク『ヴァーミス』については下から、何も無い、大地の、空の、星の、と四つの称号がある

ランクを上げるためには、それぞれ自身のランクに見合った依頼を十分にこなし、経験を積んだ上でギルドに申請することが必要になるただし、『デル』のランクは申請のみでもランク上昇が可能だが、『デル』ランクから『ソロン』ランクへ格上げされる際には、それに応じた内容の実力判定試験を受けなければならない
そして、以降の『ソロン』ランクからは、依頼をこなし、ギルド謀報部による素行調査も合格した上で、実力判定試験に合格することでランクを上げることが可能になる

最上位ランク『ヴァーミス』については (以下虫食い)

そこまで声に出しながら読んだところで、ミコトはふうとため息をついた。

「大体、ランギスさんに聞いたとおりのことだね。これって、自動メモ帳？」

「かもしらん。これからどんどん、その本の情報を増やしていけば、あたしらの生き残れる道も多くなるってか……」

『しかし、もうちょっとくらい儂らの知らん情報があってもよかつたのにのう』

「まだ後ろの方確認してないから、見てみるね〜」

ぱらぱらと、部屋の中にミコトがページを繰る音が響く。そしてまた、マコトがつとつととしながら舟をこぎ始める。

「……………え？」

と、唐突に、動揺したようなミコトのつぶやきで、マコトの意識は現実へと引き戻された。「どうした」と声をかけながら、ミコトが手を止めたページをのぞき込む。

そこには、円形を基本とした、いわゆる『魔法陣』が描かれていた。左側のページいっぱいによくわからない図形が書き込まれており、右側のページにはこのヴェルホークの言葉が並んでいる。

「なんて書いてあるかわかるか？」

「うん、あの、なんか火をおこす基礎魔法みたい。そんなこと書いてある……………ように思う」

「ずいぶんと曖昧だな」

「だ、だって、なんか私の目には古文みたいに古くさい言い回しに見えるんだもん！」

「あたしにはただの記号にしか見えんがね」

そう返して、マコトは腕を組み唸る。どうやら、この世界に関する情報以外にも、この本から自分たちが学べることは多いらしい。

「ミコト、今その魔法試せそうか？」

「ええっ！？　だって火だよ、火！　引火とかしちゃったら洒落にならないんじゃない……………！」

「んー、じゃあ明日にでも見せてよ。そういや、カミンとミコトの魔法授業、今までの分見過ごしてるし」

「え、依頼は？」

「休みだ、休み。どうせ明日になったらあたしの両腕なんて筋肉痛で使い物にならないんだから」

ぶらぶらと右手首を揺らしながら、マコトは淡々と答える。そして、宙に視線を彷徨わせていたかと思うと、また突然本のページをのぞき込んだ。

「まだページ残ってるよな。確認確認」

「う、うん、そだね……」

マコトに言われて、またページをめくり始めたミコトだったが、ギルドに関する情報と基礎魔法以外には、賢者の手紙と二人が読んでいるページの直前に、誰かのラクガキのような奇妙な模様が浮かび上がっているぐらいだった。

「これはなんだろう？」

「なーんか、どっかで見たとあるような気がしないでもない、が」

これは基礎魔法のページとも異なり、模様以外にはとくに解説らしいものも書かれていない。しばらく指でなぞったり、ランプの光に透かしてみたりしたが、結局何も起こらず、とりあえず保留ということで収まった。

「じゃあ、とりあえず今日はもう寝よう」と

「ぐー……」

「って、お姉ちゃん早っ！？」 うう、下のベッドのほづが潜り込むの楽そうだったのに……」

『ほっほ、まあ、早いモンがちじゃの』

「うん、そだね……。トリル、ランプの下のところ捻ってくれる？
それで消えるって聞いたから」

『わかったぞい。おやすみ、マコト、ミコト』

「おやすみトリル」

半分ほどマコトが食べてしまったお土産の残りを丁寧に包み直し、階段を上って上の段のベッドに潜り込んだミコトは、そっと目を閉じた。しばらくまぶたの隙間から淡いオレンジ色の光が差し込んできていたが、かちりという音とともに、その光も消え、部屋は暗闇で満たされた。

とん、と軽くつま先を床に打ち付けて調子を付ける。そのまま階段を駆け下りたマコトは、すぐ近くの両開きの扉に手をかけた。

「おはよ」

「あらマコトちゃん！ おはよう、よく眠れたー？」

「おかげさんで」

給仕を担当している中年の女性に明るく声をかけられて、マコトは微笑を浮かべながら返答する。その右肩にだらんと乗っかっていたトリルが、彼女を批難するように短く鳴いた。

「あら、その子、いつもはミコトちゃんと一緒に……」

「あたしが起きるの遅いの見越して、あいつが部屋に置いてった。

あいつ、もう外？」

「ええ、カミンさんともう一人、だれだっけねえ、本職の魔法使いって人と三人で鍛錬場へ行ったわ」

「ふーん」

言いながら、適当な席に座って朝食を注文する。パンとサラダと何か白身魚のソテーという簡単な食事を平らげると、マコトは両手を合わせて「ごちそうさま」とつぶやいた。それを、女性に興味深げに見られていることに気付かないまま、食堂を飛び出していく。

正面玄関に繋がるホールにやってきたマコトは、カウンターで鍛錬場への近道を聞き出すと、案内されたとおりの道を真っ直ぐ進んでいき……。

「……なんか、ビリビリする気が」

『これがいわゆる「気迫」というヤツかのう?』

それぞれ得意とする武器ごとに区画分けされた鍛錬場を間近で眺めて、マコトは小さくため息をついた。今、彼女がやってきた三番扉の目の前で鍛錬をしているのは、自分の身長よりもやや長めの棍を操る男たち……女性の姿は、ほとんど見受けられない。

「お、どうした嬢ちゃん、道に迷ったのかい?」

と、ぼつつと団員たちの鍛錬風景を眺めていたマコトは、唐突に死角から話しかけられて、少し驚いたように肩を震わせた。振り返ってみると、二十代半ばほどの「むさい、ごつい、筋肉」の三文字が背景に現れそうな上半身裸男が、にやりとした笑みを浮かべてのぞき込んできていた。

「魔法使いの鍛錬って、こことは別なのか」

「ああ……それならもうちょっと向こうの方に上りと下りの階段がある。瞑想とかだったら地下だな。魔法の構成練習とかなら上だ」

「ん、サンキユ」

「さん、きゅ?」

マコトの言葉に、男は首をかしげる。その反応に、この英語は通じないのか、とマコトはまた一つものを覚えた。

「ありがとって意味」

「ははっ、どういたしましてっか。そうか、お前があの噂の……黒目黒髪だし、間違いないな」

後半、小声で何かつぶやいていたようにも聞こえたが、マコトは一切気にせず、男に教わったとおりの方向へ早足で向かった。上り

と下りの階段が並んでいるところで、一瞬迷う素振りを見せる。

『……ん、ミコトの匂いは上りの方が濃いのが』

「じゃ、上か」

トリルからの情報で、マコトは上りの階段へ向かった。

階段を上りきってすぐのところ、ギルド支部の玄関ホールのような広い部屋があった。複数のカウンターが並び、その奥で動きづらそうなローブ姿の男女が慌ただしく書類の整理をしている。

お疲れ様、と心の内でつぶやいて、マコトはホールを通り抜けようとした。とたん、ふわりと宙に浮かぶ水晶玉に行く手を阻まれる。

「？」

「あつ、こつちで申請しないと行けませんよー！」

カウンターの方から聞こえてきた声に「ふーん……」とつぶやき、マコトは水晶玉を軽くつついてからそちらへ足を向けた。ばさばさと書類の束を抱えながら、疲労の色の濃い男性職員が無理矢理顔面に笑みを貼り付ける。

「お、おおおはようございます……で、えーと、鍛錬で？」

「いや、先に鍛錬してるヤツのところへ、なんて言えばいいだろ……」

…見学？」

「は、はい、どなたの？」

「傭兵登録のミコト、それと魔法使い……だっけ、のカミンってヤツ」

「ああ、はい、はい、その方々でしたらコチラ。このタグを持っていてくださいね」

半ば投げるようにして渡された、傭兵の依頼プレートに似た金属

板を眺めて、マコトは一瞬頬を引きつらせる。顔を上げてカウンターの向こうを眺めるも、対応した男性は他の職員たちと書類の山に埋もれている。

「……トリル、なんて書いてあるか読めるか？ あたし、まだ数字しかわからん」

「もともと猫の頭じゃしろう、とりあえず、この一番大きな文字をてがかりにしてみればいいんじゃないかの？」

金属板を片手に、水晶玉の脇をすり抜けたマコトは、その廊下の向こうに等間隔で並んだ金属製らしい扉の数に、今度こそ、がつくりと肩を落としてため息をついた。トリルが猫手でばんばんと首筋を叩く。

金属板に書かれた一番大きな文字は、それぞれの扉にはめ込まれたプレートに対応しているようで、適当に目的の部屋を探して廊下を進んでいくと、次第に金属板の文字が明滅し始めた。さらに進んでいくと、明滅は激しくなっていく。

「近づいてる、ってことでいいのか」

「ふうーむ」

数分後。文字が読めないというハンデを持ちつつも、マコトは何とかミコトたちがいるらしい部屋の前へとたどり着いた。その部屋の扉にかけられたプレートと同じ文字が刻まれた金属板は明滅を止め、ただぺかーっと生白い光を発している。

トリルと視線を交わしたマコトは、短く息を吸い込むと、扉の中央部分を軽く三度ノックした。ごんごんごん、と低い音が響き、

…沈黙。

「トリル、ごういとうきどうすりゃいいかとか聞いてないのか」

『うーむ、前に来たときは普通に、板を持ったまま部屋に入ったのだがのう。途中で入るときのことまでは聞いてないぞい』

「……あー、気付いてくれないかな。誰か」

そう他力本願なことをぼやいた瞬間、目の前で扉がゆっくりと開かれた。やや目を大きくするマコトの目の前に、漆黒のロープをまとい顔のほとんどをフードと前髪で隠している人物が現れる。

「……………君は、ミコト、の、姉さん？」

マコトの身長よりも、さらに頭一つ分高い場所から、高くも低くもない、男性とだけは分かる微妙な声が聞こえてきた。単語ごとに区切るような、舌足らずな言葉に面食らいかけながらも、マコトは無表情で頷く。ついでに、金属板も見せてみる。

「はい、って」

「ああ……………」

男性に促されて、マコトは若干警戒心を抱きながらも部屋へと足を踏み入れた。彼のロープの影になって見えなかった部屋の中が、彼女のファンタジー好きな心をくすぐらせる光景が、そこには広がっていた

「あ、お姉ちゃんおはよう！ 意外と早かったね」

「あら、マコト……………よね、確か。お久しぶり」

つるつると表面の磨き上げられた石が組み合わせられた床に、壁、天井があり、奥の方には細長い作業用と思われるテーブルと、簡単な器具が収められている戸棚があった。そして、部屋の中心で向か

い合っているミコトとカミンの足下には、彼女たちを取り巻くように描かれている巨大な魔法陣。……壁に引っかけられているランプが、それら全てを怪しく照らし出していた。

「やばい、この雰囲気」

「え、やばいって、なんか危なさそう!？」

「あ、ち、違いますカミンさん! お姉ちゃん、ひよっとしてこの部屋ツボ?」

「クリーンヒット」

「あははっ、そんななら最初から連れてきてあげればよかったね」

「ごめんねー、と両手を合わせながら謝ってくるミコトに、軽く手を振って応えて、マコトは自身の肩からトリルを床へ下ろした。よたよたとした足取りで、トリルは壁際へ移動し丸くなる。

『僕はこのへんで寝てるからのー』

「うん、お姉ちゃん連れてきてくれてありがとうとトリル、おやすみ」

「……ホントに、変わった子たちねえ」

人語を解し、発する猫にごく自然体で接するミコトとマコトを見て、カミンは魔法陣が歪んでいないかをチェックしながらつぶやいた。

「で、もう魔法の練習とかしてたのか」

「ううん、やりたいことは言ったけど、さっきまではウォーミングアップみたいなものだね。身体の中に感じられる精神力を練って、魔力に変換させて、それを光の球みたいに視覚化していくの」

「……はあ。なんかすげえ大変そうなんだけど、準備運動なのかそれ」

「初日はちょっと分かんなかったけど、一回コツをつかむとできる

んだよね」

「ミコトってば、才能はあるだろうって思ったけど飲み込みも早くて。だから今日はブルブも連れてきたんだけど、ちょうどよかつたわ」

そこまで言っつて、カミンははた、と口元を右手で押さえた。

「……………そういえば、こいつのことミコトにも紹介してなかったわ。あたしもさっきまで存在忘れてたし」

「…………カミン」

「いやーあははごめんゴメンナサイ、いじめじゃないのよ」

「むしろ、そっちのが、タチ、悪い」

「ランギスに言いつけないでね!？」

ぎゃあぎゃああとコントが始まったところで、マコトが小さく「ごほん」と咳払いをした。それにより、二人の声がぴたりと途切れ、カミンが「おほほ」とわざとらしい笑い声をあげながら、改めて黒ローブの青年を手で示した。

「こいつ、あたしやランギスと同じグループのメンバーで、生粋の魔術師のブルブよ。はいっ、詳しいことは自分で!」

基本情報をさらつと言ったところで、カミンはばしんとブルブの背中を叩いた。一瞬ふらついたブルブは、髪の間からじろりと彼女を睨みつつ、ゆっくりとフードを脱いだ。

ぼさぼさでまとまっつているとは言い難い長い黒髪に、ぼんやりとどこを見ているのかいまいち分からない黒い瞳。今は顔の左半分に長い前髪が寄せられていて、隙間からかるうじて見える顔は、蠟のように生白いものだった。

「……僕は、ブルブ。魔術師、で、半分、魔族……半分、人間……得意、な、属性は、黒」
「混血、ってことなのか」

いきなり魔族に会ってしまった、というかそういう存在もいるのに、どうしてトリルはやたらめったら珍しがられるのだろうか、などと自身の思考へ落ち込んでいったマコトにかわって、ミコトはにこりと笑いながらブルブに頭を下げた。

「私のことはさつきからカミンさんが呼んでいるので、わかっていると思いますけれど、魔法使い見習いのミコトです。まだ属性の向き不向きは分かりませんが、多用しているのは緑です」

「……ん？　なあ、属性って」
「お姉ちゃん、まずは自己紹介してっ」

ブルブとミコトとの会話から気になる単語を拾い上げたマコトは、しかしそのことをミコトから聞き出す前に、ブルブの目の前へ引きずり出された。無表情なブルブに見下ろされながらも、それに匹敵するような仏頂面で頭を下げる。

「ミコトの姉で、とりあえず肉体労働派のマコトだ。まあ、よろしく」
「ん、よろ、しく」

かくんと小さく頷いたブルブは、しばらくマコトとミコトを見比べて、

「……………似て、る」
「はあ？」「んむ？」

ぼそりとつぶやかれた一言に、マコトやミコトはもちろん、壁際
で眠っていたはずのトリルも声を上げた。

「ああ、こいつが言う『似てる』『似てない』の判断基準、顔じゃ
ないから。あたしにもよく分かんないけど」

「へえ……でも、お姉ちゃんと似てるって言われたの初めてです。
ありがとうブルブさん」

よほど嬉しかったのか、ミコトはきゃっきやと笑い声を上げなが
ら、ローブの隙間から見えていたブルブの右手を両手で包み込んだ。
これにはカミンと当のブルブもひどく驚いた表情を浮かべて、その
光景にマコトは苦笑を浮かべる。

「まあ、生活パターンから趣味から外見から、どこをとっても『似
てない』って言われてきたからな」

「あげく、そう言った人達って大概お姉ちゃんの悪口ばかり言う
んだもん！……今だったら、その人たちふつとばせるかも」

「なんかお前、あたしと思考回路若干似てきたか……？」

さて、そんなこんなでお互いの自己紹介を終えて。

「それじゃ、ミコトが試したいって言っていた火の基礎魔法につい
て、私とブルブで教えていきます！」

「はい質問」

「あつれえまさかのマコトから質問!？」

「なんでカミン一人じゃ無理なのかっていうこと。なんか魔術師が
本職じゃないとも聞いているけど」

それを聞いたカミンは、ああと納得したように頷きながら、自
身とブルブで異なる点を解説し始めた。

「とりあえず、くくりとしてはあたしもブルブも『魔法使い』ではあるわけなのよ。でも、そこでちょっと細かいところまで言っと、ブルブはさっきも言ったとおり生粋の魔術師で、あたしは魔導師ってヤツなの」

「……具体的にどんな違いが？」

「魔術師は、基本とされる詠唱をベースに自分だけの詠唱をつくりだして、言霊っていえばいいのかな、そういったもので魔法を行使する人のこと。あと、魔導師を読んだり、他の物質に刻まれた術式を展開することで魔法を使ったりもできるわ。」

で、魔導師の方は、今言った魔導師をつくったり、物質に術式を刻んだりっていうほうが主体。そりゃ基本的には魔法を理解していないと成立しないから、魔導師だって魔法が使えないことはないけれど、いざ言霊行使ってなると魔術師には敵わないわね。」

ちなみに、魔術師か魔導師かっていうのは単にその人の向き不向きで、たまに自分で魔導書をつくって魔法を使うっていう強者もいるから。そういう人達の場合は特別に魔元帥って呼ぶの」

「術士から導師からいきなりランクアップだな……」

「あははっ、でもそれぐらい珍しいのよー？ あたしでも知ってる人って大体が魔法協会の幹部たちだし。……さて、それじゃーとりあえず、マコトの質問にも答えたところで、ミコトの復習にいきましようか。ミコト、魔法を行使するための言霊を構成する上で大切なのは？」

ぴっと人差し指を立てた右手をミコトに向けたカミンに、ミコトはややどもりながらも応えた。

「ええ？ えと、その、自分がこれから行使する魔法の属性をはっきりさせます。属性を示す言霊は、火、水、風、土、草、光、闇という属性そのものと、それからイメージされる色彩が主です。」

ただ、これらを詠唱に組み込むと、イメージが固定させやすいため魔法が発動しやすくなる代わりに、傭兵として活動する場合、敵などに効力が予測されてしまう場合があります、と

「おお、完璧じゃない」

ミコトの解答に、大きく満足げに頷くカミン。その隣で、ブルブもこくこくと首を縦に振った。

「……ん、それじゃあ、魔法の使い方にミコトが慣れてきたら、傭兵稼業するにや自分で相手に使用する魔法が一瞬で連想できないような詠唱をつくらなきゃならないのか。大変だな」

と、ミコトの解答を聞いて、思ったことをそのまま口にするマコト。その言葉に、ミコトとカミンは「へ？」とでも言いそうな表情で、マコトを見返した。

「へえ、ミコトのお姉さんだけあって、やっぱり頭の回転早いわね。それとも、もう魔法のことについて聞いてたりとか……？」

「いや、今日が初めてだ。だからちよつと楽しみ」

にーっ、と笑みを浮かべて、マコトはミコトとカミンから距離をとる。そのままトリルのいる壁際まで移動して、続きをどつぞと言わんばかりの仕草で、部屋の中央に描かれた魔法陣を示した。

「……あ、あー。まあマコトが今言ったことはおいおい考えるところで、まずはミコトが一番使い慣れてきた魔法で、と。はいボール」
「わかりました。風よ、目標をいませよ」

ぽおん、と軽く放り投げられた茶色のボールに向けて、ミコトは素早く詠唱する。自身の中に渦巻く精神力を、吸い上げる過程で魔

力に変換、そのまま世界に影響を反映させる。

ミコトが差し出した右手を中心に風がわき起こり、小さな竜巻となつて、ボールが床に落ちる直前に拾い上げた。そのままゆっくりとボールは持ち上げられていき、ミコトの目線と同じくらいの高さにまでなる。

「ん。上々。それじゃあミコトが試したいって言った魔法の方、やるわよ」

(13) マジックレッスン・知識編(後書き)

今回の話は、ちょっとした転機になるでしょうか？ ていうか久々の世界観説明話……。

実はこの世界での『力』については、自分も頭の中でけっこうぐちゃぐちゃしてて、表記が滅茶苦茶かもしれま、せん(汗) もし明らかに変！ ってところを見つけたらぜひ教えてください。

そして(14)に続きます。

ボールを素手で竜巻の中から取りだし、カミンはそれを棚の方へ無造作に放り投げる。ここでもミコトが使ったような風の魔法が働いたらしく、不自然な放物線を描いて棚の一角に収まった。

「……無詠唱？」

「そ、だから言ったでしょ？ あたしは魔導師。こういうローブとか装飾品とかに、ごくごく簡単な魔法の術式を刻んでおくの。そうしたら、あとはちよっと念じるだけで、刻まれた術式が発動してくれるってわけ。術式って、こんなふうに使うのよ。ま、この程度だったら大概の魔導師や魔術師はしてるんだけどね」

ぱちつと可愛らしくウインクをして、カミンはもう一度人差し指を振る。すると、棚の隣に据えられていた長机から、マコトにとって見覚えのある一冊の本が飛んできた。

「あ、それ」

「さっきミコトから借りたの。あなたたちの国の言葉なんだったねー。全然読めなくてびっくりしちゃった。これでも一応四力国語話せるのに……つと、あつたあつた」

ぱらぱらとヴェルホーク解説書をめくるカミンの手が止まった。ブルブが同じページをのぞき込み、こくんと頷く。

「それじゃ、ここからはブルブの出番よ。基本の魔法だったら確かに私が教えてもいいんだけど、風属性とか草属性とかならともかく、火属性とかになると、ちよつとね」

「危険性の問題か？」

カミンの言葉にミコトが首をかしげると、すかさずマコトが突っ込んできた。それに苦笑を浮かべながら、カミンは振り返る。

「もー、これミコトの勉強なのよ？ 褒めてあげたいところだけど

……あ、マコトも魔法の勉強する？」

「いや、いい。なんかあたしほとんど魔法使えないっばいから」

「あら、そうなの？」

筋は良いのに、と心の中で続けて、カミンはざっとマコトの精神力を鑑定してみた。確かに、ミコトと比べると胸の辺りで渦巻く力の量が桁違いに少ない。ただ、ちりばめられて固定化された精神力が、彼女の肉体をほとんど全身強化しているのが分かった。

(何あれ、ほとんど持つてる力、強化方面に使われちゃってるじゃない)

あのままでは、確かに魔法を行使するための魔力や霊力を練るところは難しいだろう。仮に無理矢理固定化を解いて魔法を行使しようものなら、どうなることが。

「……うん、じゃ、ミコトの授業に戻りますか」

彼女の精神力の使われ方に、若干の不安を抱きつつも、カミンはそれを表情に表わさないまま、手元の本に視線を落とした。

「火っていうのは、生活の役に立つことはもちろんだけど、やっぱり繊細な制御が必須なの。どの属性にも言えたことだけど、風と火じゃ、危険性がちょっと違ってね。んー……まずはまねっこよね。ブルブ！」

「……ん」

言われて、ブルブはそろそろと右手を自身の胸の前に、手の平を仰向けた形で固定した。ぼそぼそとその薄い唇の隙間から、詠唱がつぶやかれる。

「……凍土を融かせ灼熱の揺らめきよ」

とたん、ブルブの手の平に魔力が集中する。精神力からの変換過程を感じることができなかったミコトは、「え!？」と驚きの声を上げる。そんなミコトに、カミンは軽く耳打ちした。

「さつき彼、半分魔族って言ってたでしょ？ 純粋な魔力を持つてるから、私たち人間みたく精神力を変換するっていう動作が必要ないのよ」

「あ、なるほど」

「……できた」

ブルブが言うと同時に、ぽんつと何かが弾けるような音ともに、彼の手の平の上に拳大の火の玉が出現した。ゆらゆらと赤い炎をまといながら回転するそれを見て、ミコトは難しい顔をする。

「ゆ、揺れてるのに、あんなに綺麗な形にまとまってる……」

「ミコトには固定化はちょっとまだ難しいかな。ブルブが今やっているのは、魔力で起こした火の表面を、また別の過程で取り出した魔力の膜で覆ってるの。だから、その膜を取っ払ってもらおうと……ほら、ブルブやって」

「ん」

カミンに急かされるようにして、ブルブは左手を出し、すっと火

の玉に向けて突き刺すような動作をした。すると、火の玉が急にしばみ出し、綺麗な球体からたき火や蠟燭などでよく見るしずく型に変化した。

「ミコトの目標はこんなかな。それじゃ、その魔法陣の中に立つて。詠唱はー、そうね、『火よ、我が道を照らせ』って感じかな？」

「わ、わかりました。やってみます」

促されて、ミコトは魔法陣の中央へと歩いていった。カミンとブルブは逆に魔法陣の外へ出て、真剣な表情でミコトを見守る。マコトはそんな彼らを、ぼうつとした表情で眺めていた。

すう、と小さく深呼吸をして、精神を安定させる。一種の瞑想状態に入って、ミコトはゆっくりと右手の人差し指を立てた。自身の体の中を巡る精神力、これを手の平に少しほど、というイメージですくい上げ、実際の右手にまで運んでくる。その間に、イメージの手の平の中で、精神力は魔力へと変換される……。

(あれ?)

一瞬、すくい上げた精神力が震えたような感覚を覚えた。今まで魔力への変換を行っていた際には無かった感覚である。ただ、震えたあとの力はミコト自身が持っていた精神力とは質が違うようなので、変換には成功したのかと軽く首をかしげる。

「……火よ」

ボツ

「え？」

薄目を開いて指先を見つめていたミコトは、その先の詠唱を忘れ、今の自身を取り巻く状況に呆然とした。まだ詠唱を終えていないというのに、指先から迸った炎の波が、二筋のリボンのようにミコトの周囲を囲んでいる。

「ミコトっ！」

結界の魔法陣の内側で、突然発現した炎に吞まれそうになっているミコトの姿に、カミンは思わず叫んだ。その隣に、険しい表情を浮かべたマコトが並ぶ。ブルブがすかさず、魔法そのものを沈静化する術の詠唱を行なった。

「碎けよ虚無の世へ落ちよ再生の銀灰を捧げん」

手の内で具現化された銀灰色の光が、音もなくミコトを囲む結界と炎に衝突する。結界を構成していた魔法陣は一気に消し飛ばされたが、ミコトが発現した炎は、威力こそ弱まったが、まだ幾つかの火の玉となって存在していた。

「嘘、ブルブの沈静魔法でも!？」

「え、あ、あの！　なんかごめんなさい！　大丈夫でしたか!？」

「むしろ結界の中にいたあなたの方が心配よっ！　怪我とか、やけどとかしてない!？」

「あ、それは大丈夫です。服に焦げあともかもないですよ」

ばさばさと長い裾の服をめくりながら確認をするミコト。そんな彼女に、まるで意志を持つかのように、漂っていた炎の魔法の残滓が近寄っていった。

「……………ねえ、ブルブ、なんか気配が違っただけど、まさかあれってさあ」

「霊力……………召喚……………？」

跳ね回る火の玉に、びくびくしながらも興味深そうな表情を浮かべているミコトに、カミンとブルブは思わず呻いた。そんな彼らの手で、ヴェルホーク解説書が淡い光を放つ。

「あ、ちょっと貸して」

それにいち早く気付いたマコトは、カミンの手から返事が来る前に奪い取ると、火の基礎魔法が書かれているとミコトが言ったページの内容が、日本語に変化していることに気がついた。

“ 我は待とう 我は待とう 我が仕えし主を待とう

汝は主たり得るか

汝の呼び声は 我に届くか

我が存在は炎 原初の炎 再生の炎

我が名を喚べ 我が名は ”

「……………最後の方だけこの世界の文字だな。ていうか、こっちの魔法陣もなんか光ってるし」

とりあえず、自分にはどうすることもできないと思ったマコトは、そのページを開いたまま解説書を持ってミコトへと近づいた。マコトが近づくと、火の玉は彼女に道を譲るようにしてミコトから離れていく。

「え、ええ？」

「ミコト、なんかこのページ、火の基礎魔法と違うらしいぞ。日本語になった」

「あ、そうなの？」

「で、最後の方だけこっちの世界の言葉のまんまなんだが……ちょっと読んでみ」

「わかった、えーっと……『我は待とう 我は待とう』……」

マコトに示された部分を、素直に読み上げていくミコト。その手に解説書を押しつけたマコトは、そそくさと呆然としているカミンたちの方へと駆け戻っていった。

「『我が存在は炎 原初の炎 再生の炎 我が名を喚べ』」

「ちよ、ちよつとあれって本当に召喚術じゃ……!」

なにやら隣でカミンが興奮しているようだったが、そんなことは全く気にせず、ミコトは最後の行を読み上げる。

「『我が名は アナクレトス』」

とたん。周囲を跳ね回っていた火の玉たちが、ミコトの目の前に収束した。

「え、わきゃあああああっ!?!」

「うおっ」

突然熱量を増した炎球に、近くにいたミコトはもちろん、距離をとっていたはずのマコト達もあやうくやけどを負いそうになる。しかし、すぐに炎球は輝きを収め、ゆらめきながらミコトの目の前に固定された。

『お初にお目にかかります 我が主候補たる方よ』
「え、ええ？」

突然しゃべり始めた炎球に、ミコトはびくりと肩を震わせて一歩後退する。すかさず、カミンが声を上げた。

「逃げちゃダメよミコト！ それ、なんでできたんだかは分からないけど絶対召喚術だから！ 召喚されたものを術者が拒絶したら、暴走しちゃうわ！ えーっと、えっと、なんかとりあえず話し続けて！」

「は、は、はひっ！ はは初めまして私はミコトって言いますです！」
「敬語狂ってる……」

マコトの小さなツッコミにも気付かずに、ミコトはただ炎球を見つめ続ける。僅か三十センチもないような場所にそんなものが浮いているというのに、ミコトの目や肌が渴いていくことはない。

『我が主候補に問います 貴女は 炎という存在をどう捉えますか』
「え、えええっ！？ そんなのいきなり言われても」
『どう捉えますか』

有無を言わせぬ炎球。ミコトはグツとさらに喚きたくなるのを堪

えて、ゆつくりと、考えながら言葉を紡いだ。

「……あつたかいもの。ご飯をつくるのにも、暖を取るのにも、身を守るにも必要なもの。私たちの生活から無くなったら怖いもの。けど、使い方を間違えると簡単に命をたくさん奪えるもの。……うん、炎だけじゃない。カミンさんもさっき言ってたけど、自然にあるものは大体みんな、ある程度必要で、使い方を間違えさえしなければとても素晴らしいものになる……」

「……ありがとう。ありがとう。貴女の問題はとても温かです」

ふうわり、と炎球が「溶けた」。そして、炎球があつた場所には炎で形づくられた、ヴェルホーク解説書に描かれているのと同じ魔法陣が浮かんでいた。

「貴女に 炎の恩恵を 賢者の智の欠片を 与えましょう」

そのまま、魔法陣は素早く空中を滑り、ミコトのローブの胸元に当たってかき消えた。ミコトは焦げあとも何もなく、ただ優しい暖かみが宿つたその場所を押さえて、その場にへたり込む。

「ミコト！ 大丈夫!？」

「……あ、カミンさん、えと、平気です。なんかすぐびっくりしました」

茫然自失といった様子のミコトに、カミンは苦し紛れに浮かべたような奇妙な笑みで答える。

「こつちもびっくりよ。突然精神力の霊力変換なんかやつちゃって、火の元素とちよつと交信しただけで、いきなり召喚術なんてあり得ないのに。結局簡易召喚だったとはいえ、あなたホントに何者？」

「待てカミン、なんかいきなりこっちの分からない用語がバンバン出てきてダメだもう」

「……あ」

ミコトの肩をつかみながらまくしたてようとしたカミンを、無表情で絶賛混乱中のマコトが諫める。すると、沈静魔法を放った立ち位置から一切動かないでいたブルブが、唐突に口を開き。

「突破」

と、なにやら不穏な一言。

きいんっ

それとほぼ同時に、ガラスにヒビが入るような甲高い音が室内に響き渡り、重たげな鉄製の扉が吹っ飛ぶような勢いで開かれた。

「な、何事ですか!？」

「………あー、忘れてた」

飛び込んできた数人の魔法使いたちの姿を見て、カミンは盛大に顔を引きつらせる。

「………これって、カミンさん一体」

「この部屋、初級魔法の練習って名目で貸し出してもらってるのよ。それをミコトが今中級魔法使っちゃったものだから、多分警報鳴っ

「ちゃったんだわ」

小声でミコトとマコトに解説をしながら、てへ、と小さく舌を出すカミン。そこへ、どたばたと室内の様子を確認していた魔法使いたちの一人が近づいてきた。

「ええと、グループ『白刃』のカミン、クロートさん、個人修練部屋の責任者は貴女ということですが」

「ああ！ はいはいごめんなさい、この子に火の魔法がどんなのかっていうのを見せようとしたら、ちよつと加減がきかなくて……」

「……罰則です。上に報告しておきますので。そっちの二人には怪我はありませんか？ あと、もう一人この部屋での修練名簿に載っていたブルブさんは」

「この子たちは大丈夫だけど、あいつは……逃げたわね」

「は？」

カミンのつぶやきに、すつと眉根を寄せる魔法使いの男は、もう一度室内を見渡してみる。それぞれの修練部屋に設置されている机や棚以外には、黒目黒髪の少女が二名、魔導師と登録されているギルド員の女性が一名、部屋の隅で寝ている猫が一匹……。

「ブルブー、大丈夫よ。今回はあたしのミス！」

「……そう」

すると、カミンの言葉を聞いて、ランプの明かりと机によってつくられていた濃い影の中から、ぬつと漆黒のローブを纏った者が現れた。たまたま近くにいた新人職員が、ぎゃつと悲鳴を上げて飛び退る。

「はい、これで全員！ ……てわけで本当にゴメンナサイいい」

「はー、はいはい、それじゃあ奥で詳しいこと聞かせてもらいますね。君たちは一旦本部へ戻っていなさい。後々話を聞きに行くかも知れないが」

「え、あ、ちよつと待って」

「わかった、行くぞミコト、トリル」

「あ、お姉ちゃん!？」

そのまま職員に連れて行かれるカミンを見て、弁明をしようとしたミコトは、すかさずマコトに抑えられる。それを見たカミンは「よらしい」とでも言うかのように、ニヤリと笑って部屋を出て行った。

「……ブルブも、今日はありがとう。それじゃ」

「ん、また」

ひらひらとブルブに手を振ると、そのまま振り返ってくれたことに驚きつつ、マコトはミコトの手を引いて部屋を出た。この部屋をくるまでに自分たちが歩いてきた廊下とは反対の方向へ、カミンが連れて行かれるのが見えた。

「ちよつと、お姉ちゃんなんで止めるの!？ もとはと言えば私がよく分からない……」

「そう、魔法のごくごく基礎しか習っていなかったはずのお前が、突然中級魔法にランク付けされるらしい……なんだ、召喚術だったか？ を使ったことが原因だ。だけどさ、それ、信じて貰えると思うのか？ カミンだってあり得ないって言ってただろ。お前が本当のことを今言えば、向こうが混乱する。しまいにやってみろ、だなんて命令されたらどうするんだ」

怒濤の勢いでミコトの言葉を押しつぶしたマコトは、俯いて唇を

噛む妹の姿に、ため息をつきかけた。

「……とりあえず、あの職員に対応からして、罰則っていつても体罰にやならんだろ。あとで詫びを入れに行こう、な？」

「……………わかった」

『うむ、ミコトは素直じゃ、それは良いことだからのう』

「あたしが素直じゃないってか」

『マコトは世渡り上手だの。ヒキコモリだったののにの〜』
「うっさい」

ぴっとトリルの脇腹をつついて、マコトはふと、ミコトが抱えたままのヴェルホーク解説書に視線を向けた。

「ミコト、まだ何か光ってる、か？」

「え？」

強く左腕全体で抱え込むようにしていたため、あまり目立たなかったが、改めてからだから本を離してみると、あの魔法陣のページが書き換えられたときのように淡く本全体が輝いていた。

「……………それ、あたしのベストの影に隠しとくぞ。部屋に戻って中身確認しよう」

「う、うん」

本をミコトから受け取ったマコトは、それをベストの脇に忍ばせて輝きを目立たなくし、トリルを肩に乗せて、ミコトの手を握った。そして、そのまま早足で自分たちの部屋へと向かっていった。

(14) マジックレッスン・実技編(後書き)

というわけで、今のところチート感覚はミコトが一步リード。

さてさて、ここから先、『魔術』と『精霊術』の違いをはっきり見せつけるシーンも頭の中にはあるのですが……いつ執筆できるのやら(汗)

(15) カムバック賢者様、召喚の理由

部屋にたどり着いてから、ミコトはまず呆れたように目を細めた。ぶいっとマコトが視線を逸らす。

「お姉ちゃん、ぜんっぜん片付けなかったんだね」

二段ベッドの上段は、ミコトが朝早くに起きて整えていたので綺麗なままだったが、マコトが使っていた下段とテーブルの上は酷く散らかっていた。毛布や枕はめちゃくちゃなままで、テーブルの上には昨日の農家の依頼で受け取ったお土産が入っていた容器がひっくり返っている。

「おかしい、こんなに散らかしたつもりは全くなかった」

「もーっ！ お姉ちゃん自分が寝ぼけてるときの悪質さを全然分かってないんだから！ はい、すぐ掃除するから外にいて！」

『……これは、マコトにやらせるのが道義じゃ』

「お姉ちゃんに任せてたら時間がかかりすぎるの！ 今回は特別だからね！？」

そう言っつて、素早くマコトとトリルを部屋から閉め出すミコト。ばたんと扉が閉められると同時に、どたばたと部屋を走り回るような音が聞こえた。

「……………うん、整理整頓の癖をつけよう」

『その前に寝ぼけグセの悪さをなんとかせねばならんのではないかね？』

しばらく一人と一匹がぼうつと扉の前で突っ立っていること五分

程度。

「終わったから、入っていいよ」

いつの間にか頭にバンダナを巻き、箒とちりとりを手にしていたミコトは、扉を開けてマコト達を中へ招き入れた。乱れていたベッドは完璧に直され、散らかっていたお土産の容器や包んでいた布も、机の端っこに並べられている。

「落ち着いたところで、解説書の確認だね」

「おー」

片手でバンダナを取り、掃除用具をクローゼットの奥にしまい込んだミコトは、ベッドの下段に座り、ベストの影から取り出した本のページをめくり始めたマコトの隣に座った。次に文字が浮かび上がってきたのは、最初から書かれていたこの世界の魔法の定義についてのページのすぐ後ろであった。

“魔法の属性は、無、火、水、風、土、草、光、闇の基本八種類に分けられる

それぞれが無色、赤、青、緑、茶、黄、白、黒といった守護色があり、詠唱にも用いられる

魔力を扱う魔法は、魔力自体が具象化し、現世に効力を現わす

霊力を扱う魔法は、その霊力をもとに元素と交信することで、

それを現世に発現させる”

「元素と交信……ね。確かカミンもそんなことを口走っていたよな」
「う、うん。でも、私魔力の変換しか教わってなかったのに」

ふむ、と小さく頷いて、マコトはさらに読み進める。

“（虫食い）　そして、霊力を扱う魔法で、より霊力の特性をいかしたものが『召喚術』である”

「「あつたあ！」」

“『召喚術』は、主に二つの効力があり、それぞれ『簡易召喚』『使役召喚』と呼ばれる”

簡易召喚とは、特定の属性元素を守護する精霊と霊力を介して交信、契約を結ぶことにより、その属性の霊力による魔法行使の効力を飛躍的に向上させるものである

使役召喚とは、簡易召喚を行なった上で、より強い自我を持ち得る精霊と契約を結び、彼らと主従関係を結ぶ召喚である

簡易召喚は特定の術式を用い、その時点で術者が保持している霊力を必要量放出することで、契約権利を得ることができる

だが（以下虫食い）”

ひらり、とそこまで読んだところで、文字が途切れてしまう。何

度かその前後のページを行ったり来たりするマコトだが、どこにも続きが書かれていないと分かったとたん。

「終わりかよ!!!」

すぱんつと本の表面を引っばたき、盛大なため息をついた。その隣で、わたわたと手を振りながらミコトがフォローを入れる。

「でも、さっきカミンさんに聞こうと思ったこと、大体解説してくれたっばいよ！ 召喚術がどんなものなのかっていうのも分かったし……」

「そう。で、お前がやったのは簡易召喚、しかもどーやら、あの火の精霊？だよな、の台詞からするに、お前は成功したらしい、と」

ゆら、とマコトの視線が、ミコトの顔を下から見上げる形で向けられる。

「てことは、今お前そうとうダルかったりするんじゃないのか？」

「え？ うーん、確かに身体が重かったり、眠いなって思ったりはするけど、あとはそんなにないかな。お姉ちゃんの筋肉痛よりは、ずっとマシだと思うよ」

「ふーん、まあ、今日はもう無理するなよ。ということ、話は突然変わるわけだが……」

一応姉として釘を刺しながら、マコトはぱらりとページをめくる。そこは昨夜ミコトと見つけた、火の基礎魔法（実際には火の簡易召喚の術式だったわけだが）が書かれたページで。

「なんで、あの意味不明模様が魔法陣のあったところにドカンと描かれてるかね」

眉根を寄せながら、ミコトはそつと左手でその模様をなぞる。

文章が書き込まれていた方のページは、マコトにも読める日本語と精霊の名前らしい部分はこちらの世界の言語と思しきもので書き直されていたが、魔法陣が描かれていた逆のページには、魔法陣が消えてしまった代わりに、あのラクガキじみた奇妙な模様が描かれていたのだ。

ラクガキという論を捨てて、何か意味を見いだそうとすれば、流水を模したようにも、落ち葉が重なる様子にも、天高く伸びるたき火のようにも、どうとでも捉えられそうな滅茶苦茶な模様。ただ、どこかで見えたことあるようなと言う妙な既視感ばかりが募った。

「うーん、どこで見たのやら」

「本当にね。なんか毎日見てるような気もするんだけど……」

『僕もなんだか見覚えがあるのう。ていうか一番身近に感じるような』

……………。

「「あつたあつ！？」」

『ひよっ！？』

再度絶叫シンクロ。ミコトとマコトは本のページと『それ』をじっくり見比べて、大きく頷く。

「トリルの首輪の模様と一緒になんだ、これ」

流水、落ち葉、たき火……はたまたただのラクガキかと思われたその模様は、確かにトリルの首にはめられた輪を平たくしてみると、全く同じような模様になるだろうと予想された。

「トリルの首輪の模様がなんでまた？」

「トリルの首輪っていえば、賢者さんがくれたもので……」

ミコトの思いつきの発現で、さらにその場の空気が止まる。

瞬間。

『いやはや、まさかこんなに早く君たちに会えるなんて、思わなかったな……』

まだ一週間程度しか経っていないだろうに、ひどく懐かしい少年の声。

手元の本に落としていた視線を、素早く声のした方向へ向けてみると、部屋に一脚しかない椅子の上で、苦笑を浮かべる賢者（仮称）の姿があった。

「出たあ……！」

『……その反応ちょっと傷つくんだけど』

「いや、もう幽霊扱いで十分だろ」

驚きのあまりその場で立ち上がりかけて、ベッドの上段に頭をぶつけ悶絶するミコトは放っておいて、マコトはやれやれと肩をすくめて、本を閉じた。

「で、ひよっとしなくても何か、この模様が本に浮かんで、あたしたちがその意味を理解したらあんたが現れると？」

「ん、ちょっと違うかな。その模様は確かに僕を示すものだけど、それが浮かび上がったときと同時に現れた条件を君たちが満たすことで、僕が君たちとこうやって話すことができるって感じかな」
「……ふえ？」

涙目で脳天を押さえるミコトに、くすりと小さな笑みを漏らしつつ、つまりね、と賢者は言い直す。

『具体的に言うと、最初にその模様が本に書かれたとき、火の簡易召喚術式も一緒に出てきたでしょ』

「ああ、それをミコトがクリアしたから、あんたがあたしたちの前に出てこれたと」

『そう。本当はもうしばらくかかると思ってたんだけど……どうやら、一回全力を出したことがあるせいで、ミコトと火の精霊の間に妙なラインが通っていたみたいだね。そのせいで、力の変換が強引に靈力変換へ切り替えられちゃったわけか』

「………なんか、全部お見通しって感じだな？ オイ」

『あの森を出てからの君たちの行動は、大体記憶しているよ。この町に着いてすぐあんな事に巻き込まれたときには、どうすればいいか、悩んだけどね』

賢者が渋い表情でそっぽを向くと同時に、二人は彼がなんのことを言っているのかに思い当たった。ミコトに至っては、その前に賢者が言っていた『火の精霊との間の妙なライン』の正体も見当がなかった。

「ひよつとして、私がいつの間にかどーんと出してたらしい火柱、ですか？」

『うん、あれは君の周りに存在していた火の元素が、君の気の高ぶりに影響されて起こした現象だ。火の元素のほうも、君のことを最

初からだいぶ気に入っていたみたいだからできた芸当とも言えるけれど」

「元素のほうか、最初から、私を？」

『そう。簡単に言ってしまうえば相性さ。ミコトはもともと火の元素と相性がよかつたんだね』

先ほどまでの申し訳なさそうな表情を消し去り、賢者は小さくあくびをしながら答えた。

『……で、存外早い段階で君たちに会えたし、とりあえずまだ時間があるから』

「どーしてあたしらがこの世界に呼び出されたか、その理由を長くてもいいから答える」

『……まあ、うん、そのために現れたっていうのもあるんだけどさあ』

ふう、と一息ついてから、賢者は虚空を見つめ、やがてゆっくりとした口調で話し始めた。

『僕はね、一応このヴェルホークで言う、種族を越えた存在、神域に属するものってことになっているんだ。その存在は、ヴェルホークの地に住む人間よりも、むしろ異世界から来た存在である君たちに近いくらいだね』

「神様、ってことなの？」

『そうなるかな。でも、僕の場合は完全に神格化してはいないから……この世界での自分の存在を安定させるために、僕みたいなのが神格化するには、条件があつて』

賢者の言葉をそこまで聞いて、ぴくり、とマコトの眉が動く。

「その条件って言うのに、まさかあたしらが含まれてるんじゃない」
『そう、大正解』

ぱちぱちと気の抜けた拍手を送る賢者に、マコトとミコトはじと
一っとした目を向ける。短く咳払いをして、賢者は話の筋を戻した。

『…………。で、僕みたいな「神のなり損ない」が神格化する条件は、
一番メジャーなもので「異世界から他の存在を召喚し、それを使役
する」っていうものがあつたんだ。今回ののは、その特別版』
「特別版？」

そろって同じ方向に同じタイミングで首をかしげる少女二人に、
賢者はぴつと人差し指を向ける。

『長い間、何度もこのヴェルホークの神域と並行世界とを繋げてき
た影響か、ここ数百年で召喚の成功率が高まっているんだよ。高ま
りすぎて、それぞれ神々が意識しながらこの世界全体を守る結果を
維持しないと、召喚を行なってもいないのに、近づきすぎた世界の
歪みに吞まれてしまう異世界の存在が現れ始めたんだ』

「そ、それって私たちみたいに、何にも知らない人がこっちの世界
に吸い込まれちゃうってこと!？」

『大体はそうなるかな。でも、こちら側から向こうへ引つ張られて
しまう者もいる。そういうのは何とかこっちで召喚をして、記憶を
いじつてもといた場所に帰してあげてただけど…………。っと、また話
がずれてきた』

右のこめかみを人差し指と中指で叩きながら、賢者は目をつむり、
次の言葉を探し出す。

『とにかく、今まで並大抵の努力ではできなかったはずの異界召喚

が、最近では簡単にできるようになってしまって、これじゃあ神格化の条件にふさわしくないとってことになったんだ。それで、異界召喚を神格化の条件とする者には、さらにもう一つの条件が加えられた。「異世界の存在を召喚し、それが自らの意志で、こちらの世界を生き抜くことができること」『

(15) カムバック賢者様、召喚の理由(後書き)

久しぶり賢者ー!!! って話です。初登場に比べて、見た目の年齢通りなしやべり方になってきてしまいました。なんとなく今の方が自分のなかで自然なのでこれでいこう。そして続く。

(16) マジカルコーチ見参？ミコトの師事先

賢者がそこで言葉を切ると、しん、と部屋の中は静まりかえった。ぱたり、とトリルのしっぽが一度だけ揺れて、ベッドのシーツに埋もれる。

『生き抜くと言つてもものう……それはマコト達が死ぬまで、ということかの？ なんだかいやに曖昧じゃな』

『いいや、それに関しては、僕が不正をして君たちに過干渉しないよう情報を制限されているからなんとも言えないけれど……神々が君たちに対して、何かしらの行動を起こすのは間違いないと思うよ。そして、その行動の結果で、すべてが決まるはずだ』

「はあ、カミサマねえ。なんだか途方もない話だ」

賢者の話が大体終わりに近づいたというところで、マコトは呆れ果てた様子で、ぱさりとベッドに身を投げた。ミコトも、不安げにロープの裾を握りしめながら、視線を膝の辺りに彷徨わせる。

『僕はね、二人とも』

と、そこで賢者が再度口を開く。

『今のままじゃ、この世界の人間に存在を感じてもらうこともできなければ、神域へ戻つても、個性なんて無い、ただ「其処に在るだけ」の存在だから……だから、神格化するためにも君たちを召喚した。君たちの世界での人生をめちやくちやにして』

「……そう、自覚、あつただね」

『うん。何人も、こちら側から向こうへ飛ばされたり、向こうからこちら側へ飛ばされてきた人達を見てきたから。だから、君たちが

この世界へ召喚されたときの心の内とか、多少なら察することもできる』

ただ、淡々と。賢者の言葉は紡がれる。

『でもね、僕は君たちの存在を利用するけれど、絶対に君たちを理不尽な神の遊戯の道具にはさせないよ。君たちのことは、ちゃんと元の世界へ帰してあげる。いつになるか約束できないけれど、ね…』

そう言って、いつの間にか椅子から立ち上がっていた賢者は、二人と一匹に向けて頭を下げた。突然のことに目を白黒させるマコトとミコトは、しばしポカンと口を開けて間抜け面をさらしていたが。

「え、えと……はい、よろしくお願いします」

ぼーっとしたままのマコトは放っておいて、ミコトは慌てた口調でそう答えた。ゆっくりと、どこか怯えるような表情を浮かべた賢者の少年が、顔を上げる。

『こんな口約束だけじゃ心許ないと思うけど』

「いや、今のあたしには十分だ。ま、これで反故にされたらぶっ飛ばすけど」

「お姉ちゃんっ」

『ほっほっほ』

にやりと笑いながら軽口を叩くマコトの後頭部を引っばたくミコト、それを穏やかな目で見つめるトリル。

彼らなら、きっと大丈夫。

『……それじゃ、これを君たちに贈るよ。どうか君たちのこの世界での生活に役立ててくれると嬉しい。どうやら傭兵の道を歩むことになりそうだしね』

「いや、あんたがくれたスペックったらどう見ても戦闘職種向けじゃないかね」

『……うーん、まあまあ、頑張れば他の仕事口も見つかっただろうけど、今のこの世界じゃ傭兵が一番稼ぎがあるものねー』

はっはっはとわざとらしい笑い声を響かせて、賢者はスツと両手をそれぞれ、マコトとミコトの前に差し出した。きよとんとそこを見つめる二人の前で、彼の手の平の上に淡い光が集う。

「わぁ」「おお」

マコトの前に差し出された手の上には、分厚く大きな肩掛けベルトに、二本の筒がくつついているものがあり、パツと見、背中に剣を背負うための鞘のようにも見えた。ただ、筒の中からは剣の柄の代わりに金属棒の先端がのぞいている。

一方、ミコトの前に差し出された手の上には、今彼女が持っているヴェルホーク解説書に少し似た、表紙に水晶版がはめ込まれた革張りの本があった。背表紙には小さな魔法陣が刻み込まれており、魔導書、というのがしっくりきた。

『マコトには、二分割できる組立型の棍を。ミコトには、君自身の魔法を書き込むよう設定しておいた魔導書を』

差し出されたものを受け取って、二人は同時に立ち上がる。マコトはさっそく筒から棒を取り出し、一本の棍になるよう連結させる。全長およそ百八十センチ程度の、マコトからしてみればずいぶん長いと感じるものだった。

魔導書を受け取ったミコトは、表紙の水晶版を撫で、慎重な手つきでページを開いた。今まで現実世界やヴェルホークで見てきたものとも違い、分厚い羊皮紙がそのままくりつけられている。と、そのうち最初のページが光り出し、あの火の簡易召喚魔法陣が書き込まれた。

「わ、わあ」

『それで、その本から魔法陣をミコトが削除しない限り、ミコトと火の元素との簡易召喚は持続するよ。マコトの棍のほうは、あまり力を加えることができなかったけど、この世界でもかなりなレベルの硬度を持っているはずだ』

「ああ、のわりに軽いような……身体の方も、違和感があんまりないし」

『なるべく効率よく、君の身体を内側から強化する精神力を操れるようにする機能もあるから、多分マコトが精神力の扱いに慣れるまで、それが主な武器になるね。剣とか槍の方がよかったかい？』

「いや、最初に使ったのも角材だったしな……長物なら、このギルドでも教えてくれそうな人多そうだったし」

鍛錬場の様子を思い出して、マコトはうんと頷く。ミコトもその隣で大事そうに本を抱え、賢者を見つめた。

「賢者さん、ありがとうございます」

『うっん、これぐらいじゃ、足りないぐらいだ。けれど、もう僕には助言以外に君たちに干渉することはでき　　さ　そ……』

「賢者？」

突然賢者の姿が歪み、声が飛んだ。ひどく驚いた表情を浮かべて、賢者は部屋から跡形もなく消えてしまった。以前、森の中での別れの時とは異なり、まるで誰かに邪魔をされたような、そんな嫌な去

り方だった。

「賢者さん、大丈夫かな……」

「……ああ」

『神々とやらも、ずいぶん厳しいものだのう。儂みたいな動物にはあんまりよく解らんが』

しばらく賢者が立っていた場所を見つめていた二人と一匹は、こんこん、と控えめなノックが聞こえてきたことで我に返った。本を抱えたまま、ミコトが慌てて扉を開く。

「はい？」

「……ミコト」

そこからぬうつと現れたのは、ブルブだった。相変わらずの暗い表情で、何かを言いかけた彼は、ミコトが持っている先ほど練習に持ってきていたものと異なる本に目を向ける。

「……それは、は？」

「え？ あ、こ、これは？」

「旅立ちの時にもらっていたものでね。鞆の奥にしまっていたのを引っ張り出してきたところだったんだよ」

「……」

「……これは、こないだ行った市場の安売りで見つけたヤツ」

「……新しい、武具、防具、は、登録が、必要、だけど」

「あ、そうなんだ。サンキュ」

ブルブの指摘に礼を言って、マコトはどうかしたのかと彼に尋ねた。

「……カミン、が、解放された、から。罰則……報酬、三割、カット……二週間」

「二週間も!？」

「……まだ、いい方。ホントなら、二ヶ月、くらい、で……それと」

「こちらの方が重要、とでも言うかのように、ブルブはパタパタと両手を振りながら、ミコトとマコトを指さした。

「カミン、が、支部長に、報告、して……支部長、と、ここの、魔術師、トップが、会いたって」

「へっ? 私に?」

自分を指さし、素っ頓狂な声を上げるミコト。こっくりと子どものように大きく頷いたブルブは、ミコトの手を取り、マコトに向けても手招きをした。

「一緒、来て。マコト、も。とりあえず、静かに、話す」

「分かった」

二人と一匹はブルブに連れられて、ゴードイス達の待つ支部長室へ向かった。部屋にはゴードイスの他にも、この短時間で若干やつれ気味になったカミンに、ランギス、タリハラ、そしてしゃんと背筋を伸ばした背が高く髭の長い老人がいた。

「おお、この子達か。ランギスが拾った変わり種というのは」

マコト達が部屋に入ってくるなり、老人は厳めしい表情を崩した。新しい人物の登場に、ミコトは頭上に疑問符を飛ばし、マコトはブルブが言っていた言葉を思い出す。

「ええと、魔術師のトップ？」

「ああ、申し遅れたな。私はギルド『荒神の槍』シスタ支部にて、魔術師総括師長を務めている、グスタフ『ビエナート』だ。そこにいるタリハラ『メインスコール』の直接の上司でもある」

「一応私よりも地位は下ということになっているが、発言力は他の支部にも及ぶほどの方だ」

丁寧なお辞儀で自己紹介を締めくくったグスタフの横で、支部長の席に座るゴードイスが、苦笑気味に補足した。ミコトは純粋に「魔法使いで偉い人！」ということで、マコトは「タリハラの上をいく人物」ということで、それぞれ頭を下げる。

「マコト、です。ランクは『デルの3』の駆け出しで、借金返済まだけできてません」

「み、ミコトです。『デルの3』の魔法使い見習いで、マコトお姉ちゃんの妹です」

「ふむ、それでは早速質問させてもらおう。その見習いだという君が、簡易召喚を成功させたとは本当かね」

グスタフの双眸が細くなり、部屋の空気が一気に重みを増す。このことを報告した張本人であるカミンは、「ちょっと早計だったかなー」と早くも後悔していた。この姉妹のことについては、彼女たち自身も理解していないようなことが多すぎるので、なるべく分かったことは責任者たるランギスト、一時の保護者であるゴードイスに報告するようにしているのだが。

「あ、はい。なんだか出来たみたい………ですか？」

この場の空気を分かっているのかいないのか、ミコトはのんびりとした口調で、若干疑問系で答えた。ふむ、とグスタフは顎に手を

添えて一度頷き、ミコトの前に出るよう指示をする。

「私が君の周りに結界を張ろう。その中で、何か火属性の魔法を使ってみるといい。魔力変換の練習はしているのだったね」

「は、はい……」

「ならば、霊力変換も似たようなものだ。本当に簡易召喚が成功しているなら、火を扱おうと意識を傾ければ、自然と精神力のほうで霊力へ変換されるだろう」

さ、と促されて、ミコトは思わずマコトとトリルを振り返った。

一人と一匹は小さく頷き、「やれるだけやってみる」と目配せする。一度、大きく深呼吸をして、ミコトは手を伸ばし、眼を閉じた。

「……火よ、我が道を照らせ」

何時間か前に、カミンから教わった詠唱を口にする。あの時、例としてブルブがしてみせた炎の発現を思い浮かべながら、手の平に集めた力を具現化させる。精神力の変換は、やはり魔力変換とは異なった妙な方向へと為されていた。すなわち、霊力へと。

ごう、と音を立てて、ミコトの手の平からしずく型の炎が現れた。それも一つではなく三つも。眼を開いたミコトは、自分の予想を超えての魔法の効果に「ええ!？」と慌てる。すると、それに呼応するように、炎が揺れた。

「精神を定めよ！ でなくば、火の元素が暴走するぞ!!」

すぐ側から聞こえてきた叱責に、ミコトはハッとして深呼吸をした。先ほどよりも深く吸い込み、深く吐き出す。動悸を落ち着けて、再度目の前に浮かぶ火の玉達を見やり、

「ありがとう、もういいよ」

……なんとなく、声に出して魔法行使の終了を行なった。カミンに教わっていた魔術と違い、靈力行使での魔法は、なんだかヴェルホーク解説書に書いてあったとおり一人で行なったという気持ちがいしなかった。精霊達の手助けがあつてこそ、結果。

「……………素晴らしいな。確かに、火の元素と契約が成されている。詠唱や魔法の構造自体は単純で、確かに駆け出しと言えるのだが……ふむ」

音もなく消えた火の玉に、また茫然としていたミコトは、すぐ隣で自分を見下ろしてきていたグスタフに驚き、小さな悲鳴を上げてすっころんだ。

「何やってんだ」

「び、びっくりしちやっただもん」

駆け寄ってきたマコトに助け起こされて、ミコトはちらちらとグスタフの顔色を窺った。我に返ったグスタフは、照れたように髭をしごきながら一歩距離を開けた。

「いや、すまない。状況も事例も、実際の行使も、何から何まで興味深いものだったのでな」

グスタフの言葉に、そろって首をかしげるマコト達。あまり事を理解していないらしい二人に、グスタフは周囲の人間の同意を視線で感じ、彼女たちに説明を始めた。

「いいか？ まずミコト、君はそこにいる魔導師カミンから、魔力

の制御を教わっていたのだっただね」

「はい、とりあえず、精神力の扱いを覚えようってことで……カミンさんは霊力の方の制御が苦手だと言っていたので、魔力制御の方を教わっていました」

「うむ、そこに特に問題はない。ただ、魔力制御の練習中に、火の魔術を行使しようとして火の精霊術を行使してしまう駆け出しなど、私は見たことがない。君は、よほど火の精霊、火の元素に好まれてるようだ」

「あ、あはは」

どう反応してよいか分からずに、曖昧な笑みを浮かべたミコトだったが、さらに深いため息をついたグスタフを見て硬直する。

「最終的に、中級魔法である簡易召喚にまで発展したというし……簡易召喚が行えたということは、今後万全の状態で、より精神を安定させれば、使役召喚も行えると言うことだ。私が知っている中でも、使役召喚を成功させた魔法使いは両手ほどだ」

ブツブツ、ブツブツと、だんだん説明というか独り言のようになつてきたグスタフの言葉に、ミコトやマコトはもちろん、周囲で聞いていた人間も眉をひそめる。

「あの、ビエナート？」

タリハラが遠慮がちに声をかけると、俯きがちになっていたグスタフは、がばりと勢いよく頭を上げ、ずずいっとミコトに近づいた。

「ミコトくん」

「は、はい！」

「私の弟子になってみる気はないかね？」

「……………はい？」

「その場にいた全員が、この魔術師総括師長の突然の申し出に目を点にした。」

(16) マジカルコーチ見参？ミコトの師事先（後書き）

さらに、賢者から特殊アイテムをそれぞれもらい受けました。マコトの棍についてはおいおい説明しますが、ミコトのもらった魔導書はいわゆる『ショートカットキー』みたいなものです。今はまだ彼女自身、使える魔法の種類が少ないのであんまり利用されませんが。

そしてそして、ミコトに先生ができちゃいました急展開だね！大丈夫、今はミコトメインだけど、マコトも次から主役だよ。

(17) フィールドへ、マコトの鍛練

なぜだか、この辺のギルド内でもかなりな有名人であり有力者であるグスタフの弟子という立場を極秘で与えられたミコトは、その日からカミン、またはブルブとともに彼のもとを訪れるのが日課になった。

その間も、借金返済のため低ランクな依頼を受けて、しかし単独行動なためにあまりいい収入は得られていないマコトは、最近ギルド内で知り合ったナイフ使いに鍛練場へ行かないかと誘われていた。

「あんたの妹が魔法の特訓してるっていうなら、こっちもしばらく依頼は休んで、鍛練でもしたらどうだ？」

イーエン＝カルトというそのナイフ使いの少年は、マコトよりも一つ上の『デルの2』ランクの持ち主で、以前マコトが低ランクの依頼を受けようとしたときに「その依頼は俺が先にやるはずだった」と依頼の取り合いをしたこともあったが、今では同年代のよい友人という関係に落ち着いている。

「鍛練、なあ」

「マコトは魔法使わないんだったら、得物あるんだよな？ それとも素手か？」

「一応、棍を持ってはいる。ただ、鍛練場じゃ見学しかしたことがないな」

「げえ、もったいねー……と言いたいとこだけど、確かにあそこは女が寄りつきやすい雰囲気じゃねーもんなあ」

「飛び散る汗に、ぶつかり合う筋肉だもんな。男の匂い満載」

その光景を思いだし、ちょっと遠い目になる二人。とりあえず、

単純に身体を動かすだけでもというイーエンの言葉で、その日はマコトも依頼を休み、トリルを連れて鍛練場へ行くこととなった。魔法使いの鍛練棟と同じように、マコトがいた世界で言うコロシウムやドームグラウンドのような鍛練場も、受付で予約や場所取りが必要らしく、そこらへんはすべてイーエン任せにしていた。

「あ、マコト、こっちこっち」

受付前で合流したマコト達は、受付の者に使用可能スペースへと案内された。このグラウンドでは、特に決められた武器を使うわけではなく、壁際で両手剣を素振りしている者もいれば、鎖鎌で案山子に斬りかかっている者もいた。ようは自主練用のフリースペースである。

「さて！ それじゃーマコト、軽く身体ほぐしたら手合わせしてみようぜー！」

「……あたし、まともに手合わせとかしたことないんだが」

「マジで？ うーん、じゃあ別個で全部練習するか？ それもまたなあ」

「いや、いい。勘で動くから。とりあえず、お前はそっちの的でナイフ投げするとして、あたしはこの案山子相手に……踏み込みの練習でもするか」

「そこからかー！ いやでも素人なら、あつちに棍の使い手いるし、聞いた方が」

すでにイーエンの言葉を聞いていないマコトは、背負っていた棍を組み立て、トリルを離れた場所に放し、軽くその場で振り回した。それほど速く振るっているわけでもないのに、鋭く空を切る音が響く。

「……うーし、本能のままに」
「かつこいいけどさー、人の話聞けよー」

イーエンの呆れかえった声も、マコトの耳には届かない。今の彼女が思い浮かべるのは、賢者の言葉と、以前路地裏で男達を角材で撃退した記憶。

『大抵の武器は扱える』。

「ハアツ」

鋭く息を吐いて、半身で棍を構えたまま、左足を案山子に向けて踏み出す。一、二、と数えて、加速した勢いをのせて棍を下から上に振り上げる。棍の先端は過たず案山子の頭部を捉え、頑丈に繋ぎ止められていたはずのそれを、いともあっさりとはじき飛ばしてしまった。

ぽーん、と放物線を描き、やや離れた場所で棍の素振りをしていた男性の側に、案山子の頭部が落下する。イーエンはもちろん、周囲でその瞬間を目撃してしまった他のギルド員たちも、あまりの光景にぽかんと口を開けて突っ立っていた。

「……やばいな、吹っ飛ばしちまった。これ、弁償か？」

当の本人は自分がやらかしたことについての自覚は一切無いらしく、やや困ったような表情を浮かべてイーエンを振り返った。

「いや、的とかはよく壊れるから、とりあえず、受付に申請しとけばいいんだけど……案山子、案山子が壊れたかあ……」

「なんか問題が？」

「問題っていうか、さあ。普通にすげーよ、なんだよ、全っ然踏み込みとか素人っぽく無かったぜ！？ あそこでフェイント無しにー

直線ってというのが、まあ素人っぽいっちゃあ、ぼかったけど」

「あー、無理無理。今のやつ、前にやった奇襲の方法思い出してやっただけだから」

「奇襲？」

「曲がり角で待ち伏せして、向こうが顔出した瞬間に顎をガンツと」
「うっわ」

さらりとかまされたマコトの発言に、「一体どんな喧嘩やらかしてたんだ……？」とイーエンは心の中でつぶやいた。

「ま、まー、うん、すげえ俺から見ても筋はいいつていうか、十分すぎるくらい力あるから……やっぱお前誰かに習えって。ほらっ、あっちの案山子頭拾ってくれたおっさんとかこっち来てるし！」

「おっさん言うな坊主。にしても、俺だってまだ全力出したって案山子の頭飛ばしたことはねえぞ？ 嬢ちゃん」

「……女の子のこと嬢ちゃんって呼ぶあたり、やっぱおっさんじゃん」

「黙れい」

黒塗りの棍を肩に担いで、案山子の頭を小脇に抱えて近づいてきた男は、自分よりも頭二つ分ほど小さいマコトを見下ろし、不思議そうに首をかしげた。

「嬢ちゃんにその棍は長すぎやしないか？ 俺のとそう変わらんだろ。重さも有りそうだし」

「いや、結構使いやすいと思うけど」

誰もいない方向へ向けて、もう一度軽く素振りをする。元いた世界での鉄棒よりも二回りくらい太いが、なぜだか手汗で滑って取り落としそうになる、ということもないし、重さもちよっと大きなフ

ライパンを持つている感じなのだ。五十センチほど間を開けて両手で支えれば、全く苦もなく振り回せる。

どれ、と興味を示したらしい男は、自分の棍をイーエンに預け、マコトの棍を貸して欲しいと頼んだ。彼が武器を奪うような人には見えず、純粹に好奇心からというのが態度から分かっていたので、マコトは別段拒否もせず、素直に棍を手渡す。すると。

「ぐおっ!?!」

マコトの手を離れ、男の手に棍が渡った瞬間、男はひどく驚いた表情になって棍から手を離してしまった。あ、とつぶやくマコトの目の前で、マコトの棍はガラン、と音を立てて地面に転がった。

「ちょ、おっさん、人の得物落としてんじや……!!」

「いやー、驚いた。おい坊主、お前もちょっとこれつついてみる。いいか、握るなよ。お前なんだかそんなに耐久なさそうだからな」
「はあ?」

何言っただ、とでも言いたげな表情を浮かべたイーエンだったが、マコトが肩をすくめて「好きにすれば」と小さくつぶやいたのを聞き、男の棍を返して、倒れたマコトの棍を……注意されたにもかかわらず握りしめた。

「おいっ!?!」

男の慌てた声が響く。だが、すでにそれはイーエンの耳には届かなかった。イーエンは棍を握りしめ、茫然と、自身の体の中で妙なうねりが起こっているのを感じていた。

(な?)

「……おい、しつかりしろ」

と、唐突にうねりは消え、目の前には無表情ながらどこかイーエンを心配しているようにも見えるマコトの顔があった。イーエンの手はまだ棍を握っていたが、その両脇を挟むように、マコトも両手で棍を握りしめていた。

「き、もちわる……うえー、お前、これ一体」
「掘り出し物」

手を離し、そのまま尻もちをついて頭に手をやるイーエンを見下ろしながら、マコトは軽々と何ともなさそうに棍を持ち上げた。彼女の簡潔な答えに、男は気味悪そうに眉をひそめた。

「そんな無理矢理に精神力を体内循環させようとする棍なんざ、よくまあ持てるな」
「ふーん？ 精神力の体内循環って表現は、初めて聞いたな。結局どういうことだ？」

一旦棍を分解して、背中ホルダーに収めたマコトは、改めて男に問いかけた。イーエンは、まだ尻もちをついたまま復活の兆しが見えない。

マコトの問いかけに大口を開けてあ然としていた男は、ぐにーつと自身の頬を引っ張って、なぜかこれが夢ではなく現実だという古典的な確認方法を試みせた。

「マジかよ、ここにいるってことは傭兵志望のギルド員なんだろうが……いくらなんでも、分からなすぎじゃねえ？」

「だから、分からんから聞いてるんだけど。他の人に聞いた方がよさげ？」

「ばつ、俺でもそれぐらい説明できらあ。けど、なあ……」

ぼりぼりと無精髭の生えた頬を掻きながら、男はちよつと視線を泳がせた。

「とにかく、一旦鍛練場から出るぞ。こうなつたら、俺が嬢ちゃんに教えられる限りの基礎を教えてやる」

「サンキユ。あ、そういうえば名乗るのが遅れたけど、あたしはマコト。ランクは思つての通りの駆け出し『デルの3』だ。あつちでちよつと回復してきてるのはナイフ使いのイーエン『カルト』。『デルの2』……あ、こつちの猫は相棒のトリルだ」

「おお、俺はティアゴ『ヘラルド』。『ソロンの3』だ、よろしく」

二人は簡単な自己紹介の後、まだ青い顔をしているイーエンを抱えて鍛練場から抜け出した。そんな彼らへ、鍛練場にいた人間はそろつて好奇の視線を投げかけていた。

(17) フィールドへ、マコトの鍛練(後書き)

というわけでマコトサイド。いつの間にか友人まで作ってました。なんとなく、マコトのほうは男臭い連中が集まりそうな予感。あんまり嬉しくないハーレムだな。

(18) バトルコーチ?見参、マコトの師事先(前書き)

地味に(17)とは、タイトルについてる『?』の位置が違います。
狙っています。むしろ狙っています。

(18) バトルコーチ？見参、マコトの師事先

「さて、説明するっつってもなあ……」

ギルド員の交流のための部屋である談話室。その一つのテーブルを囲んだマコト達だったが、ぼーっとしたままこちらを見つめてくるマコト（と、なんだかその肩に乗っている猫も？）に対し、ティアゴは深いため息をついた。マコトとしては、ミコトが最近吸収している魔法に関する知識以外にも、この世界で生き残るための戦士の知識が手に入るかも知れないと内心ワクワクなのだが。

「まず、精神力っていうのが、人間がもともと生み出せる力だっつーのは、さすがに分かるよな？」

「ちょ、おっさんそれはさすがにバカにしすぎ」

「とりあえず」

マコトの返答で、テーブル内の空気が凍った。

「あと、精神力は魔力や霊力に変換することで、魔法が使えるってことくらいか。魔法に関する知識は、今妹の方が仕入れてるからだいぶ分かるんだが……精神力をそのまま使っつていうのは、ぶっちやけ初耳だ」

「だあああああつ重傷！ それすごく重傷！ むしろそれなら魔法使いになれよお前も！」

「あたし魔法使えないし」

無表情なのは変わらないが、一気に不機嫌な空気をこれでもかといわんばかりに放出したマコトを見て、イーエンとティアゴは「これがマコトの地雷」と判断、素早く謝り、とつとつ次の話題へ移っ

た。

「あ、あー……じゃー、まず基本。人間における精神力の容量ってのは、修行を積むことでいくらか底上げができるんだが、まあ大体生まれつきの素質に左右されるな。これがもともとでかいヤツは魔法使いを目指し、少ないヤツは戦士になる。たまに精神力を半端無く持つてくるくせに戦士の道を選ぶやつもいるんだが、と、ここまでいいか？」

「ああ、うん」

頷くマコトに対し、ティアゴは話を続ける。

「で、魔法使いに関しての精神力の使い方は、さっきお前が言ったとおりだ。じゃあ戦士は少ない精神力をどう使うかっていうと、体内に少しずつ巡らせて肉体の強化をするわけだ。これがさっき言った『精神力の体内循環』ってヤツ。ただ、これができないくらい精神力の容量が少ないヤツもいるがな。ああ、参考程度に言っと、俺は持つてくる精神力の三割くらいを体内循環にまわすことができるな」「体内循環に使える精神力って、十割全部じゃないのか」「できるやつもいるけど、それくらい精神力の扱いがうまけりゃ精神力が少なくても魔法使いの道を選べよって話だな。で、イーエンは『デルの2』だって聞いたが、体内循環はできてんのか？」

いきなり話を振られたイーエンは、いじけたようにナイフを弄りながら、そっぽを向いて答えた。

「……まだ一割無いくらいだつてさ。走るのが速くなる程度」

「そうむくれんじゃねーよ。それくらいなら妥当だ」

「……循環されてるっていう精神力の量は、どうやって知るんだ？
自分で分かるのか」

マコトの問いかけに、ティアゴは首を横に振る。

「いいや、どつか適当な魔法使いに頼んで、精神力の流れを見てもらうのさ。大概精神力っていうのは、こう、この胸の辺りで渦巻いてるらしいんだが、そこから体中に伸びている精神力の流れている量を見てもらう……お前は見てもらったこと無いのか。一応それ用の受付もあるんだが」

「今の今まで精神力の体内循環を知らなかったあたしが？」

「……そーだな、悪かった。じゃ、今ここにいる魔法使いの誰かにでも……お、ちょうどいいのが」

辺りを見回したティアゴは席を立つと、少し離れたところでたまたま会話をしていた傭兵達の輪に近づいていった。

「お、ティアゴじゃん。お前もこの依頼参加するか？ まだ人数余ってるぜ」

「いや、今日は先約があつてな。ところで、マリルーちょっと借りていいか？」

「え、自分なら構いませんけど……」

傭兵達の輪からティアゴが引き連れてきたのは、白に近い短めの金髪をした妙齡の女性だった。薄い青色のローブに白の厚手のカーディガンと、魔法使いと言うよりは神官に近い格好だ。

「ちょっと、こいつの精神力がどんなもんか見てやって欲しいんだ」「……そういうことは、きちんとした受付でやるのが普通なんですけど」

「面倒だろ、手続きが。普通の魔法使いでもできるつてのに」

「はあ、分かりました。でもティアゴ、あんまり自分たちを魔法使

いと一括りにしすぎないでください。私は一応霊術士ですから」

「魔術師も魔導師も霊術士も召喚士も、そう変わらんだろ」

「全部名称覚えてるのなら、なおさらですよ！」

まったく、と頬を膨らませながら、女性マリルルはちょっと腰をかがめて、マコトと視線の高さを同じくした。そのままニコツと笑って自己紹介をする。

「自分は霊術士のマリルル＝シャナルです。どうぞよろしくお願いします」

「駆け出し傭兵のマコトだ。じゃあ、まあ頼む」

「はい」

楽にしている、と立ち上がりかけたマコトを制して、マリルルは早速彼女の精神力を透視した。徐々に浮かび上がってきた精神力の流れ……その全容に、マリルルは思わず言葉を失った。

「これは……」

「どうした？」

口元を震わせるマリルルの様子に、ただならぬものを感じたティアゴはすぐさま問いかけた。

「いえ、その……精神力の大半が、それこそ九割以上、彼女の身体を循環し続けています。しかも、精神力が内に留まらないよう固定化までされていて……ほとんど、自由に扱える精神力は無いに等しいですね」

「だから、魔法が使えないって言ったのか」

マリルルの言葉に、イーエンはひどく驚いた様子でマコトを見つ

めた。当の本人は、やはりこの状況をいまいち理解していないように、肩に乗せたままのトリルの鼻先を指で弄りながら首をかしげている。

「ええと、マコトさん、いつからこんな状態に？」

「さあ、気付いたらこんなだった。……そうか、ヒキコモリだったあたしがあれだけ動けたのも、体内循環っていう絡繰のおかげか……」

最後の方のぼそぼそしたつぶやきは、マコトとトリル以外には聞こえていなかった。マリルーの隣に立っていたティアゴは、マリルーの透視結果に顔をしかめる。

「なるほどな。だからあの棍も普通に握ったり扱ったりできるわけだ」

「え、それがどう繋がるんだ？」

唐突なティアゴの言葉に、マコトは眉根を寄せる。ティアゴはマコトにもう一度棍を組み立てるよう言っつて、さらにその鑑定をマリルーに頼んだ。

「自分は便利屋じゃないんですけど」

「まあ頼む。お前ぐらい精神力の扱いが上手ければ、俺たちみたく酔うことはないだろ」

マコトが持ったままの棍に、マリルーはそつと指を滑らせる。そこから伝わってきた不可思議な術式に、マリルーは再度驚きの声を上げた。

「これは、……あんまり見たことがありませんけど、体内循環を促

す術式でしょうか？ 確かにこれは、精神力の扱いに慣れていない魔法使い以外に触れる人はあまりいないでしょうね」

「……えーと？」

疑問符を頭上に飛ばしまくっているマコトに、マリルはなるべく分かりやすく伝えられるよう言葉を選び、説明し始めた。

「つまり、この棍を持つことで、おそらくはその人が保持している精神力の七割近くを体内循環へまわすことができるのだと思います。マコトさんはもともと、私が見た限り九割以上の精神力が循環していますから、この場合だとより安定した循環に制限するのではないのでしょうか」

「流れる力が多すぎるから、ちょっと抑えてるってか。じゃあ、さつき体内循環量一割って言ってたイーエンや、三割つつたティアゴが触れなかったのは……」

「自身が扱える範囲での精神力が許容量を超えてしまったため、溢れすぎた自分の精神力に酔ってしまふということですね。自分たちのような魔法使いは、精神力をいかに多く、安定してまとめあげられるかが求められるので、よほど力のやりくりが下手な人でない限り精神力酔いはしないと思いますけれど……まあ、自分を見ていただければ分かりますとおり、大概の魔法使いはこんな棍を持てるほど、身体を鍛えてはいませんから」

苦笑で締めくくったマリルの解説を、マコトはこの後ミコトに説明する際、さらに分かりやすいよう現代風にかみ砕いて整理してみた。

自分がもともと持っている精神力の全体量を、タンクいっぱいの水と仮定する。魔法使いはそこから直接水を取り出し、さまざまな形で使用するが、戦士はタンクから水路を造って、その水路からようやうと水を使うことができる。これが体内循環の例え。

そして、普通の戦士はこのタンクから流せる水の量がそれほど多くない。なので、水路もそれに見合ったサイズのものしか造られていないとする。ここに、タンクのバルブを無理矢理開く役目を持つたもの……つまりはマコトの棍という要素が加わればどうなるか？タンクからさらに流れ出した水は、水路からも溢れて辺りに浸水してしまう。制御範囲を超えてしまうのだ。

さて、ではマコトの場合は？ まず、マコトの場合は水路の形からして他の戦士とは異なっている。普通の戦士達の水路が地面を掘ったり、レンガを積んだりといった感じで造られているとするならば、マコトの水路は鉄パイプ、水道管だ。水路を付け足したり、進路を曲げたりすることが難しい。さらに、水道管の中をほぼ満水状態のまま水が循環し、タンクも空っぽに近い状態だという。水道管の中で、水が暴走している状態だ。

ここであの棍が登場する。普通の戦士ではバルブを開く役目を負っていた棍だが、水が流れすぎているマコトのタンクでは逆の役目を果たすことになる。バルブは少しずつ閉められ、水道管を流れる水は勢いが減り、棍が無い状態よりも簡単に扱えるようになっていくのだ。

マコト専用のストッパー。それがこの棍の役割。ただしマコト以外で精神力の扱いがそこそこの戦士がこの棍を持つと、精神力が溢れて制御範囲を超え、身体に異常をきたす。

「……うん、整理できた。多分これでいい」

「はあ？」

こつちの話と片手を振ってマリルーたちを制し、マコトは小さく首をかしげた。

「で、精神力の体内循環だとか、この棍の不思議さとか、まあ本当に基礎らしいことは教わったわけだが……あと、なんかあるか？」

「あー、あー……どうだろうな。俺の場合は知識はその程度で、あとは棍の繰り方を無理矢理教わったもんだが」
「ふーん」

ティアゴの言葉に頷いたマコトは、特に何でもなさそうに訊いてみた。

「なあ、ティアゴ」

「なんだ？」

「あんた、依頼を受けてないときで暇な時間があったら、あたしに棍の繰り方教えてくれないか」

ずる、がしゃん

歩き出したわけでもないのに、ティアゴは器用にその場で滑り込み、イーエンを巻き込んで床に突っ伏した。その時、顔面をしたたかに床へ打ち付けたらしいイーエンは、声も上げられないままに気絶した。

「ちよ、おい！？ お前な、そういうのはもつとまともな……」
『ソ
ロンの1』
「くらいのギルド員にでも教わっておけ！ 受付にいけばそういう人材を紹介してくれるところもあるからよ！」

「そ、そうですよ？ 何も知識を教えてくださいました人を、そのまま先生にしなくても」

「そう遠回しに言わなくても、やりたくないなら嫌だと言えばいいだろう」

にー、とすり寄ってきたトリルの顎をびしびしと指先でつつきながら、マコトは面倒くさそうに返した。ティアゴはばつの悪そうな表情を浮かべて、床にあぐらをかいてぱりぱりと髪をかき回す。

「いや、あのときの踏み込みとか見たけどよ、本当に……俺なんかでいいのか？」

「新しい人間の顔と名前を覚えるのが面倒なだけだ。ああ、あと、思い出したがあたしは受付つてところもあんまり好きじゃない」
「はあ？」

なんだそりゃ、とでも言いたげなティアゴとマリルーに向けて、マコトはにやりと妙な笑みを浮かべ、言いきった。

「なんせ、あたしは文字が読めないからな。ああいう書類だらけのところは、文字酔いする。大概は妹に見てもらってるんだが」
「そ、それはどういうことですかーっ!？」

自信满满、そうとしか思えない表情で投下された爆弾バカ発言。ティアゴは言葉を失い、少し会話をしただけでもマコトは聡明だと判断していたマリルーが悲鳴を上げた。

「どういうことって言われても、単に習得してないだけっていう」
「だつ駄目です。そりゃあ文字が読めないままギルドに入団してる訳ありな方も大勢いらっしやいます。そういう人達にはギルドが総力を挙げて叩きこ　こほん、教えて差し上げてきたんです！　マコトさん、いいですか、今すぐにでも勉強を始めて下さい」

真剣そのものなマリルーに詰め寄られながらも、マコトは飄々とした態度を崩さずに、眉をひそめるに留まる。

「ええー……めんどくさい」
「わかりました、それが貴方の口癖であり性格ですね。貴方自身の頭脳のできは大変よさそうですから、ちょっとした間の努力だけでいいんですよ。ということで行きますよティアゴー！」

「って、ちょ、俺も問答無用なのかよ!？」

細腕でマコトの手首をがっちり握りしめたマリルは、逆の手でティアゴの服の襟首をひつつかんだ。思いがけず強い力で引っ張り上げられて、二人は目を白黒させる。

談話室を抜け出ようとしたマリルは、つい先ほどまで参加しようと思っていたパーティーのメンバーたちに向けて頭を下げた。

「申し訳ありません。緊急な用ができてしまいました。自分は今回、不参加とさせていただきます」

「おおー、大丈夫だ。もう思う存分不安要素解消してこい」

マリルの性格を熟知しているらしい、そのパーティーのリーダー格の男は、はははと爽やかに笑ってマリルに引きずられていくマコトとティアゴを見送った。

……その日、マコトには棍の師匠と、異界の教師（鬼）ができた。

「ええ、俺、このまま放置かよ……」

(18) バトルコーチ？見参、マコトの師事先（後書き）

さて今回は前に出てきた棍の説明がやおら長々しくて……すいませ
んでした。楽しかったんです。マコトが頭の中で整理してるたとえ
話もうざったかったら飛ばしてくださいグスン。

というわけで巻き込まれたティアゴさん。このままマリルーさんも
巻き込もうかと思いましたが、彼女は彼女できちんとパーティを組
んでいる身ですので、ちよくちよく出てくるに限るかど。

そして周囲に露呈したマコトの『文盲』。あれ、これって差別用語
でしたっけ……。

(19) 〱 ファーストクエスト・いざ森へ！(前書き)

ここから(22)まで話は続きます。

そしてこの辺りから段々サブタイを考えるのが面倒くさくなってきた……。

(19) ～ ファーストクエスト・いざ森へ！

ざくざくと、草木を切り倒す音が響く。それに次いで、複数人の足音。

背には二分割された棍、右手に短剣、左手に小さな円形の盾を装備したマコトは、自身の身長以上もある草が覆い茂っている森の中を歩いていった。彼女が短剣と盾で大ざっぱに道を切り開いていく後ろを、両手にナイフを持ったイーエンが整える。そのさらに後ろには、肩にトリルを乗せたミコトがついてきていた。かちやかちやとベルトからホルダーで下げられた水晶の本が揺れている。

ざくざく、ばさばさ。師匠やその他のギルド員から、特に危険もない場所だからと言われていたため、気配や歩く音などにもあまり気を遣わずに、彼らは森の中を突き進んでいく。

さて、一体なぜ、この面々で『フィンコードの森』を探索することになったのかというと……。

単独か、最近修行頻度が緩くなってきたミコトと下っ端ギルド員の依頼をこなすことへ、ティアゴの鍛練やマリルリーの語学講座が加わったことにも慣れてきたマコトは、いつも通りミコトに乱暴に揺さぶられて起きるといって朝を迎えた。

「もー、お姉ちゃんたまには自分でしっかり起きてよお！」

「ミコトがいるから、自力で起きる気になれない……なんだかんだ言っただけ、しっかり起こしてくれるし」

「私のせい!?!」

『じついつときはマコトの方が妹みたいじゃのう』

そんな会話をして、昨日のうちに用意していた水瓶や水差しを使って濡らしたタオルで顔を拭き、髪や服装、それぞれの装備を調べて部屋を出る。最近のトリルの所定位置は、もっぱらミコトの肩の上である。

と、部屋を出てすぐに、二人と一匹は片手を上げて近づいてくる人影に気付いた。

「ティアゴ、こんな朝早くから珍しい……」

いつも持ち歩いている黒塗りの棍を背中に斜め背負いしているティアゴは、ばりばりと後頭部をかきながら大あくびをした。

「俺だつて眠い。今日は午後の鍛練まで暇な予定だつたんだがなあ」
「で、なんでわざわざこんなギルド寮に来てんだ？」

「あー、まあそりゃ、お前らに用があるからなんだが……」

そこで一旦言葉を切つて、ティアゴはまじまじとマコトの隣に立つ、黒目黒髪の少女に目をやった。姉妹と言うことだから、マコトのようなちよつとぶっきらぼうタイプなのかと思いきや。

「……あんたの考えてることが手に取るように分かるぞ。今、あたしとミコトを比べたる」

「あ、悪い、嫌だったかやっぱ？」

「……別にいい。慣れてる」

無表情から、明らかに不機嫌といえる空気を発し始めたマコトに、ミコトは「お姉ちゃん！」と呼びかけながら左腕に抱きついた。これもまたマコトの地雷か、ともう一つ、意外と多いらしい少女のこ

ンプレックスを知ったティアゴは、苦笑を浮かべて言う。

「確かに、比べちゃいないと断言はできんがな。俺ア別にどっちが優れてそうだとか考えてたわけじゃあねえぞ。一応これでもお前らの先輩だしな。血縁だからってなんでも優劣つけるもんじゃないだろ」

「……ふーん」

若干空気の軟化したマコトを見て、ミコトもティアゴもホッと胸をなで下ろす。そして、ティアゴはさらに軽く咳払いをして、こう続けた。

「で、だ。俺はお前らへの使いつ走りみたいなものよ。さっき知ったんだが、ミコトの方はビエナート師長に弟子認定されてるって」「あ、はい。一応外の人には言わないって方向で……グスタッフさん、基本的に弟子は取らないで自分の研究に没頭するタイプだっておっしゃってましたから」

すらすらと答えるミコトに、ティアゴも小さく頷く。

「ま、ここ十年まともに魔法使い育てようなんて言ったことねえ御仁だしな。と、それはいいとして、とにかくそこら辺のお偉方からなんでもテストがてらお前らに野外依頼をこなしてきて欲しいそうだな。これには俺も同感でな、そろそろマコトも訓練から実地に向かわせようかと思ってたところだ」

「野外……町の外に出るのか」

これにはさすがのマコトも驚いたようで、少し目を見開いてティアゴを見返す。

「まあ、念には念をうってことで、一応俺の方からイーエンのヤツも連れて行かせてほしいって言うておいたがな。魔法使いに長物使い、で近距離遠距離どっちも可能なナイフ使いつてな」

「まるでマジなRPGだな……」

「ん、なんだそら？」

「いやこつちの話」

ぱたぱたと手を振るマコトに、少しだけ首をかしげつつ、ティアゴはついてこいと二人に言った。

寮を抜け、食堂に立ち寄り三人で朝食をとり（この時、この光景を見た他のギルド員が、ティアゴが二人の父親なのかと勘違いし、後日噂が流されたのは余談）、他の面々が待っているという支部長室へ向かった。

「俺だって、支部長室なんて一度も入ったことないぜ……。大体のギルド員が呼び出されるときは、あんま表沙汰にしたいくないようなことが絡んでる場合がほとんどだしな」

なぜかびくびくした態度でノックをし、ノブに手をかけるティアゴがおかしくて、彼の後ろでマコトとミコトは思わず笑い合ってしまった。そんな彼女たちにも気付かずに、ティアゴは支部長室へと入っていく。慌てて、二人も後を追った。

支部長室には以前と同じようなメンバーがそろっていた。支部長のゴーデイスやタリハラ、グスタフ、それに加えランギス、カミンと、カミンに首根っこを捕まえられて視線を彷徨わせているイーエン。

「……イーエン、お前どうした」

思わず、部屋に入って真っ先にマコトは突っ込んだ。視界にマコ

トを捉えたイーエンは、虚ろな笑いを浮かべる。

「へ、へへ……俺、なんで呼び出しなんて……お天道様に顔向けできないようなことはしてませんしそんなことする肝っ玉もありませんぜフフフ……」

「な？ 大体ここに来る奴らって、ああいう不安しか無いわけだ……お前ら、なんでそんな慣れてんの」

イーエンを指さしたティアゴは、盛大なため息をつきつつ肩を落として姉妹を見た。マコトは何でもないように、さらりと答える。

「一度来ているし、あたしらは直接この人達に助けられたからな。そうびくびくするもんでもないし。ということで、挨拶が遅れたな……おはようございます」

「あ、お、おはようございます、皆さん！」

淡々とあいさつをするマコトの隣で、ミコトが小動物のようにびよこりと頭を下げる。いつも通りの姉妹の様子に、支部長室にいた面々はそろって朗らかな表情を浮かべた。

「さて、本当なら私の所に来るまでもないことなのだがね。ミコトの方はグスタフ殿が目をかけた弟子でもあるし、……まあ、私情がないこともないのだが。ゴホン」

ゴーデイスは咳払いをして、ちらりと傍らに立つグスタフへ視線を向けた。強い苦笑を浮かべたグスタフは、ミコトの今までの鍛練の成果を端的に話す。

「ミコトはどうも、魔術師としてより精霊術士としての才があるようだ。その上で、カミン・クロートが指導したという魔力変換も行

なうことができています。まさに『魔法使い』としての天性の才。で、
だ。今までの鍛練は、彼女の精神力の底上げがメインだったのだが、
それもだいぶ安定感が見えてきた。そこで、この野外依頼を仕組ま
せてもらったのだよ」

「聞けば、マコトの方もそのティアゴに棍を習っているそうぞ。
友人もできたみたいだし、こういった依頼は人数が多ければ楽にな
るから」

グスタフのさらに横で、笑みを浮かべているタリハラが続ける。

「そういうことで、マコト、ミコト、イーエンの三人には、フィン
コードの森へ行ってもらおうわ。これは別に私たちが用意したわけじ
やなく、きちんとした依頼の一つなんだからね？」

「あ、俺、その依頼多分知ってます……泉のことでしょう」

「あら、知ってたの？」

ちょっと驚いたように目を大きくさせて、カミンはイーエンを見
下ろした。ふてくされた様子のイーエンは、ぼそぼそと覚えている
限りの、フィンコードの森に関する内容を口にする。

「えっと、そこそこに広い森で、このシスタから南西にある。んで、
その奥じゃー結構いい湧き水が採れるっていうんで、その湧き水自
体やそれを使った食べ物なんかを売ってるグループもいるぐらい…
…なんだけど、最近になつて湧き水の源泉が妙に怪しい状態になっ
てるから、とりあえずそれを調べて、汚染されてるようだったら浄
化剤を投入してきて欲しいとか……そんなだった気がする」

「その通り。それと全く同じ依頼がまた来たのよ」

「うえ、同じ事またやるのかよ!？」

「イーエン、敬語敬語」

「うおっち!!」

慌てて自分の口を塞ぐイーエンを尻目に、マコトはゴーデイスたちに向き直る。

「……で、今のイーエンの言葉でちょっと思ってたんだが」「なんだね?」

しれっとした態度で見返してくるグスタフに、特に表情を変えな
いまま、マコトは続ける。

「イーエン、お前、その依頼一人でやったのか?」

「え、そうだけだ。だっってお使い程度だぜ」

「いや、そのお使い程度の依頼と、全く内容が同じ依頼で、どうして前衛後衛と揃えた万全の状態を調べさせたんだろうな」と思っ
てな

じーっと、マコトの胡散臭そうな視線がゴーデイス、グスタフ、
タリハラへ向けられた。男性二名は咳払い、女性一名はさらに笑み
を深くすることでそれに答えた。

「……ま、いいや。とりあえず、その森に行つて、源泉とやらの確
認をしてくればいいわけだな」

「いや、どうも汚染が進んでいるようだから、源泉についたら必ず
浄化剤を使ってほしいそうさ。一人一つずつでも持つておくといい」

そう言つて、グスタフは支部長机に並んでいた、液体の入った手
の平サイズの瓶を持ってきた。カミンに引きずられるようにしてマ
コト達の隣に並べられたイーエンが、一旦それをまとめて預かる。

「野生の動物でも、何でも、対処を誤れば危険だからな。詳しい準

備のほうはランギスやカミン、ティアゴに聞きなさい。それでは健闘を祈っている」

最後、心からの笑みを浮かべたグスタフは、そう締めくくって自分とタリハラ以外の面々を支部長室から退出させた。最後に出ていこうとしたランギスが、一瞬振り返り、グスタフのことを咎めるような目で見える。

「……なにかね？」

「いえ、失礼しました」

ただ、それを口にすることもなく、ランギスは無表情で部屋を出、扉を閉める。

その後、バタバタと慌ただしくフィンコードの森へ向かう準備がなされ、その最中、マコトとミコトは野外行動の基本をティアゴやランギスに叩き込まれた。

昼過ぎ、シスタの町を出るのはようやくと二度目という新米二人と、若干頼りない先輩ギルド員の三名が、森へ向けて出発し、今に至る。

(20) スピリットは不機嫌絶頂

「な、なんかゴメンね？ お姉ちゃんもイーエンくんも……私、ついでくばっかりで」

「いやいや、それと俺のことは呼び捨てでいいって。にしても、マコトの妹ってんだからどんなのかと思ってたけど、すげー可愛いよな！」

「ほおー、どんな想像をしていたのか今ここで素直に吐いてみたらどうだ？」

「すいませんっした！」

軽口を叩き合いながら、彼らは森を突き進んでいく。と、マコトの足が止まった。長草が途切れたのだ。

「着いたか」

「お、やったじゃん！ 俺が前に来たときはこの倍くらい時間かかったのに、……あ、自分で言っただけで凹んできた」

「けど、あたしも結構腕ヤバイぞ」

この森に入っただけで対面した長草群の光景を思い浮かべ、マコトは肩から先が痺れに痺れている両腕を見下ろした。マコトの言葉を聞きつけたミコトは、慌てて駆け寄ってきて治癒魔法を口にする。

「風よ、彼の者の疲れを癒せ」

ミコトの精神力を変換して創られた魔力の風が、ぐるりとマコトの両腕を取り巻く。ちよつとしたマツサージ器にもみほぐされているような感触に、マコトは目を細めた。

「あゝ、これ気持ちいい……」

「お姉ちゃん専用の治癒魔法だね、これって」

「いや、専用ってほどでもないんじゃないかねーの？ さっき俺の足にやつてもらったときも、気持ちよかったしさ」

マッサージ魔法を終えたミコトは、小さく息を吐いて、到着した目的地をざっと見回した。

周囲を長草に囲まれながら、ぽつんと存在している濁った泉。泥臭さが辺りを漂っており、そばに根を下ろしている木々も元気がなさそうだった。ミコトの肩の上で、トリルが嫌そうに小さく鳴く。

「うえー、ホントに前より変な風になってるし……つか、普通に汚え」

「前は、これほどじゃなかったのか」

「ああ、ちよつと泥水が混ざったんじゃないかなーってぐらいでさ、薬も全部使わないでよかったんだけど……こりゃ、足りないか？」

泉の状態に顔をしかめるイーエンは、ため息と共に吐き捨てた。

「ったく、こんな地味ーなことすんのは下級の悪霊だよな、多分」

この、イーエンが言った意味での『悪霊』というのは、マコト達の世界での『悪意を持った幽霊』とは異なり、『悪意を持った精霊』のことだ。曖昧な存在である幽霊とは違い、他の生物に実害をもたらしてくる存在である。

この世界では、どの種族が悪だと決めつけられているわけではならしい。人間の心に善悪があるのと同じようなもので、魔族だから悪だとか、精霊だから善だとか、そういった認識はごく一部だけでなされている。

「悪霊、ねえ。見たことないからいまいち分からんが」

「あつたらヤバイって。下級だつっても、俺たち駆け出しなんてあつという間にやられちまうんじゃねーの？ ……ま、俺一人だつたら人間相手でもちよつときついんだけど」

マコトの呟きに、イーエンは身を震わせた。ベルトにくくりつけていたポーチから、グスタフから受け取っていた浄化剤の瓶を一つ取り出す。

「ということ、早速一つめはこれぶちまいて、と」

なぜかガラス瓶の口からコルク栓を抜くのではなく、水面ギリギリの所を持っていたナイフで斬り飛ばし、イーエンはそのまま一気に瓶の中の浄化剤をぶちまけた。すうつとする薬草のような匂いが、辺りに漂う。

「……よし、じゃー次の泉な」

「前にもこの依頼したことあるんなら、近道くらい覚えておけよな……」

「う、この草が悪いんだよ。やたらめつたらでかいうえに、すげえいきおいで育つんだからな！」

「とりあえず、方位の確認をしようよ」

小さな地図を広げて、糸でぶら下げた磁石の方向を見るミコト。マコトは離れたところで、その結果を待つ。イーエンは、斬り飛ばしたことで口が大きくなったガラス瓶を見下ろし、どうするか、とつぶやいている。

「……うん、今度はそっち。同じ方向に二つともあるよ。すごく近

いから、あっちについたら終わりだね」

「へえ、三つ全部バラツバラってわけじゃないのか」

「うーん、でも、ちょっと遠回りかも。目の前にあるのにショートカットできないってやつ」

「しょーとかつと?」

「近道って意味だ。ま、とにかく行くぞ」

再度マコトの先導で、長草を切り開いていく。最初の泉にたどり着くまでよりもはるかに短い時間で、次の泉へと到達した。

「じゃ、あたしの薬まくぞ」

やはり、最初の泉同様濁りきって酷い有様の泉に顔をしかめつつ、マコトはポケットから取り出した瓶のコルク栓を抜き、ぱっぱと何度かに分けて周囲に振りまいた。瓶が空になったことを確認して、泉の対岸を見る。そこには長草がなく、ちょっとした茂みの向こうに最後の泉が見えた。

「なるほどな。確かに遠回りだ……どのくらいだ?」

「うーん、この回り道の感じからすると、さっきのところからここに来るまでよりちょっとかかるくらいかな」

「あー、目の前なのにそんなにかかるのかよ……」

ぶつぶつ不平をこぼしながらも、最後の泉へと足を向けるマコト達。と、唐突に木々がざわめいた。ふーっ、と珍しくトリルが全身の毛を逆立てて、警戒心露わに顔を歪める。

「え?」

グスタフによる魔力、霊力行使の訓練のおかげで、だいぶ周囲の

気配を探ることができるようになっていたミコトは、トリルと同じように木々から感じた違和感に眉をひそめる。

「お姉ちゃん、待って」

「どうした」

深刻そうな妹の顔を見て、マコトも同じような表情を浮かべて、背負っていた棍に手を伸ばす。ぶるり、とその隣でイーエンも身を震わせた。

「うえ、なんか、気味悪……」

「この辺りの気味悪さは森に入ってからさんざん目にしただろ」

「いや、なんか違うって。光景じゃなくて、こう、うーん」

「いるよ」

なんとも言い難い気配を、なんとかマコトに伝えようと言葉を探っていたイーエンの前で、ミコトが蒼白な顔色でつぶやいた。

「「へ？」」

「風よ、目標をいましめよ！」

とたん、ミコトと向かい合う形になっていたマコトとイーエンの背後で突風が渦巻いた。ずいぶん威力が上がってるもんだ、と感心したのもつかの間。

けけけけけっ

耳障りな甲高い笑い声。それを耳にした瞬間、イーエンの表情もミコトに負けず劣らず蒼白になった。

「……ヤベエ、来やがった！ 逃げるぞ！」

「来たって、まさか」

「下級悪霊だ！」

マコトとミコトの手を掴み、自分たちが切り開いてきた長草の間の道へ駆け戻ろうとするイーエンだったが……どこにも、自分たちが通ってきた跡が見当たらない。マコトが膝丈まで切り裂き、自分がしつかり踏み倒してきた道が、きれいさっぱり無くなっていった。

「草属性の、悪霊ってか……！」

ぎり、と奥歯を噛みしめるイーエン。なんとなく自分たちが危険な状況なんだなと理解し始めたマコトは、隣から響いたミコトの悲鳴に血相を変える。

ミコトは、ブーツからはい上がってきた細い草の蔓を必死に蹴り飛ばしていた。だが、次第に蔓の量が多くなって、足首から下が固定され始める。トリルがじたばたとミコトの両手に押さえつけられて暴れていた。おそらく、ミコトを助けようと肩から降りかけたのだろうが、今のトリルの体ではあつという間に捕まってしまう。

「うっざいー！」

持っていた短剣で、ミコトに絡まっていた蔓を素早く切り落とし、マコトは、片手で手早く棍を取り出した。短剣を口にくわえて、がちやんと連結させる。だが、それが姿の見えない悪霊にとって、最大の好機となってしまった。

「ぶっ！？」

突然木の上から振り下ろされた太めの蔓に横っ面を叩かれて、眼

鏡を泉の方へ吹っ飛ばしたマコトが倒れ込む。ミコトとイーエンが悲鳴混じりに彼女の名を呼んだが、すぐにそれも悲鳴だけとなった。

「ミコト、しょうがないからアレ使え。グスタフンとここで練習もしてんだろっ」

アレ、というのは霊力を使った火の精霊術のことだ。代名詞でミコトに指示をしたのは、この光景を見て居るであろう悪霊に手の内を明かさないためである。マコトの言葉で察したミコトは、泣きそうな表情を浮かべて首を振った。

「そ、そうだけど、私たちまで巻き込まれちゃったら!」

「最悪その泉に飛び込めばいい、ほら口塞がれる前に!」

側頭部を押さえながら、表情を歪めて叫ぶマコトに、ミコトはほとんど全身を蔓に拘束されながら叫んだ。

「火よ目標を焦がせ!」

ミコトが詠唱を放った瞬間、腰に下げられていた本の水晶が赤く煌めいた。

詠唱が必要なのは、魔力を使うのも霊力を使うのも変わらない。ただ、少しばかり回路が違うだけだ。

風を発生させるために魔力変換を意識していたミコトの中の回路が、『火』という言葉に反応して霊力変換へと移行する。ぐるりと体内でうごめいた力の規模の大きさに、ミコトはハッと息を呑んだ。すぐさま、弟子となった直後に叩き込まれたグスタフの言葉を思い出す。

『魔術を使うときも、精霊術を使うときも、人ならざる力を扱うときには常に平静であれ』

勝手に動く蔓が怖くて、マコトが吹っ飛ばされたことが怖くて、怖くて、仕方がなくて。ミコトは普段操っている力の、数倍もの霊力を交換してしまっていた。

本の水晶は、焼けた鉄のように赤い輝きを放っている。これはま^ずい。本能がそう告げていた。

「駄目、全部は駄目えっ！」

あっという間に体外へ放出され、精霊の力で具現化されていく炎の波。それはミコトを中心として、近くにいたイーエンやマコトの姿をも呑み込んだ。

(21) くエスト完遂、ちなみにフラグも立ちました

「イーエン、お姉ちゃんっ！」

「いや、大丈夫。無事無事」

隣から聞こえてきた、茫然としている少年の声。ぱつとそちらの方を素早く振り返ると、黒こげになった蔓を体から払い落としている、まったく無傷なイーエンの姿があった。

「ほ、本当に!？」

「ああ、熱いって思いかけたんだけど、波に吞まれた瞬間蔓だけ燃えてちまつて。俺自身は全然」

「お、お姉ちゃんは!？」

「……あたしも平気。すごいな、お前、攻撃対象まで限定できんのか」

少し離れたところでゆっくりと立ち上がったマコトは、鋭い視線を周囲に投げかける。泉のほとりの草花はほとんど壊滅状態で、周囲の長草にも炎が燃え広がっている。このまま放っておけば、森全体に炎は広がり、森が滅んでしまう。

と、そこで先ほどの耳障りな笑い声と同じ声で、全身に鳥肌が立つような大絶叫が響いた。辺りを見回すと、近くの木の上からぼつと何かが降ってくる。

「……あれが、悪霊か」

全身黒こげで、マコトが持っている短剣サイズのデフォルメされた人間のような姿をしたそれは、ぎゃいぎゃいと大声で喚きながら、自身の体をかきむしっていた。マコトはそれになんか近づくか近づいて

いき、のど元に短剣を突きつける。

「お、お姉ちゃん!？」

「……お前が、この泉が汚れた原因か？」

短剣をギリギリで突きつけることで、悪霊の動きを封じたマコトは、お得意のポーカーフェイスで無表情のまま質問した。ひゅうひゅうと最早悲鳴すら上げられない悪霊は、しわくちやの顔をさらに歪めて叫ぶ。

「うっさい、うっさい！ たかだか七十そこらしか生きられない人間の中でも、お前みたいなガキに汚いもの呼ばわりされたかねえよ！ 消えろ、消えろ！ 死んじまえ！」

「よくこの状況で……」

マコトは呆れ果てて、短剣の先を少し揺らした。ぎぐう、と呻いた悪霊は、目を見開いて、

「死ねえっ!」

瞬間、ばきりと不吉な音がして、悪霊が落ちてきた木がマコトに向けて倒れ込んできた。

「お姉ちゃん!」「マコト!」

「ちっ」

マコトは素早く悪霊を蹴り上げ、急いで木の下から退避する。しかし、悪霊の最後の抵抗か、地面からぼこりと生えてきた木の根に足を取られて、マコトはずでんつと転倒する。蹴り上げられた悪霊は、壮絶な笑みを浮かべて空中に溶けて消えた。

「やっぱ……！」

自分がマコトへ駆け寄っていても、逃げる前に一緒くたに木の下敷きになるだけだ。イーエンは目を見開き、傾いでいく木をただ見上げていることしかできなかった。

「トリル……！」

しかし、奇跡は起こる。

イーエンのすぐ脇を、どこからともなく現れた灰色の獣が飛び出していった。彼が唯一自慢できる俊足をも軽々と上回るそのスピードで、獣はマコトの服の襟首をくわえ、やや乱暴な動作で木の下から脱出した。ほんの一瞬後に、ずうん、と重々しい音を立てて木が倒れ込む。

思わず振り返ったイーエンが見たのは、ぎゅっと強く両手を握り合わせて倒れた木の向こうを睨むようにしているミコト。と、土埃が収まらないうちに、気の向こうから呑気な声が聞こえてきた。

「おい、そっちは大丈夫かー？」

「お姉ちゃん！ お姉ちゃんこそ平気！？」

マコトの声が聞こえて、ミコトはイーエンを追い越し倒木へ近づいた。しばらくして、倒木を乗り越えてきたマコトがこちら側へ飛び降りてくる。その後ろから、マコトを助け出した灰色の獣もやってきた。

ふと、イーエンはその獣がどこかで見ることがあるような、そんな違和感を抱いた。灰色と白の混じった毛並みに、左耳にくい込んでいる変わった模様の耳飾り。

「トリル、ありがとうね」

と、マコトの無事を確認したミコトは、満面の笑みを浮かべてその獣の顔を両手で包み込んだ。獣の方も、きちんとお座りの体勢で気持ちよさそうに目を細めている。

……って。

「え、それ、トリルって、あの猫お!？」

「ああ? あ、そうか。イーエンには言っただけだったな」

「なんでわざわざ依頼に猫なんて連れてくるんだろーなって思ってたんだけど……はあ、なあ、そいつミコトの使い魔かなんか?」

「私の、ってわけじゃないよ。私とお姉ちゃんが飼い主なだけ。使い魔でもないもの。ねートリル?」

『ふむ、では儂もそこな少年の前でしゃべってもいいんじゃないか?』

「ごろごろと喉を鳴らしている巨大トリルを不思議そうに眺めていたイーエンは、突然響いた四人目の声に過敏に反応する。

「だっ誰だあ!？」

『目の前におるではないか、のう、イーエン』
「……………え?」

ぼふ、と巨大トリルが霞のようなものに包まれて、元通りのひよろつとした猫の姿へと戻る。トリルはよたよたと頼りない足取りで、イーエンの足下に近づいていった。

『儂じゃよ、儂。トリルじゃて』

「え、ええ、ええええーっ!?!?」

「さて、イーエンが盛大にテンパってる間にも確認済ませるか。

ミコト、あの馬鹿精霊どこ行った？」

トリルとにらめっこを始めるようにしゃがみ込んだイーエンを尻目に、マコトはぐりぐりと肩を回しながらミコトに尋ねた。木が倒れる寸前のことを思い起こしながら、ミコトは首を左右に振る。

「ううん、お姉ちゃんが蹴った後、そのまま溶けて消えちゃった」

「てことは、逃げたのか……？」

「違うよ、力を使い果たして純粋な力へと戻ったのさ」

ここで聞こえる、第五の声。マコトとミコトは全身を緊張させて周囲の気配を探り、イーエンはトリルを指でつつこうとした中途半端な姿勢のまま硬直した。

「やだな、警戒することないよ。君たちの目の前にいるじゃないか」
「はあ？」

首をかしげるマコトの前に、ぼんやりと薄青い光が集まった。ミコト、イーエン、トリルもそこへ駆け寄ってきて、ぽかんとしが表情で光を見つめる。

「まずはありがとう。あいつがこの森で好き勝手するようになって、我が力がどんどん削られていってしまって、危うく死ぬところだったんだ」

「いや、まずお前誰だよ」

「……あ、人間は自己紹介しないと分からないんだっけ。この森の泉を守護してる水の精霊だよ」

「また精霊かい！」

心底嫌そうにそっぽを向いたマコトに、薄青い光は抗議するよう

に揺らめいた。

「我をさつきみたいなの悪霊と同列扱いしないでほしいんだけど！
そりゃ、泉が汚れてるせいで実体化もできなくなっちゃって、自我を保つのが精一杯なんだけども！ むしろこのタイミングで出てこれて奇跡だよ！？」

「んなもん知るかい……ミコト？」

ゆっくりと光に向けて両手を差し出すミコトの姿に、マコトとイ
ーエンは何も言わず、ただ成り行きを見守った。

「……へえ、変わった子だ。火の元素に懐かれてるし、他の元素の
ことも惹きつけそうな魂だね。我も今より力があつたら惹かれてる
かもしれないな」

「あ、あの……お願いがあります」

「ん？ なあに？ 今の我にできることなんてすごーく限られてる
んだけど」

ミコトは悲しげに目を伏せて、後ろを振り返った。先ほど使った
火の精霊術の影響で、残った火がゆっくりと長草に燃え広がって
いく。

「あのままだと、森が燃えちゃいますから……私の力を代わりに使
って構いません。あの残り火を消してください」

「おい、ミコト。お前さっきの魔法でだいぶ消耗してんだろ。いい
のか」

心配そうにミコトの肩をつかむマコトだったが、ミコトは「まだ
平気」と首を振って、精霊の答えを待つ。しばらく、ミコトの手の
上で揺れていた光だったが、突然音もなく弾けて消えた。

「わかったよ、精霊の愛し子。あの長草はさっきの悪霊が馬鹿みたいに生えさせたものだから、燃え切ってもいいんだけど、森が無くなるのは困るからね」

青い光がミコトを取り巻き、姿無き声が響き渡る。

「流せ、流せ、清流の調べよ」

ミコトの持っていた本の水晶が、今度は青く輝いた。他人の意識によって精神力が霊力へと変換される中、ミコトはめまいを起こし倒れかける。しかし、そんな彼女の体を、マコトがしっかりと支えた。

「お姉ちゃん」

「お前、本当にそういう無茶するところ、あたしに似てきてんじゃねーかなあ」

苦笑を浮かべるマコトに、ミコトは楽しげな笑みを返して、意識を失った。それと同時に、精霊の魔法が発動する。汚れた泥だらけの泉から、勢いよく純白の水が湧き上がり、それらは怒濤の勢いで長草に燃え広がる火を呑み込んでいく。

辺り一面、マコトやミコト、イーエン、トリルも巻き込んで水浸しになったところには、ミコトが呼び出した火は一欠片も残さず鎮火されていた。

「ふう、できたできた。あとは長草が前みたいにまともな長さにまで枯れてくれることを祈るばかりだね。ま、私の力が戻ったら刈り取るつもりだけど」

「ずいぶんと力を使っただんな。こいつ、気絶したぞ」

またあの薄青い光の形を取って、満足げに言う水の精霊へ向けて、マコトは意識のないミコトを抱えながら不満げに言った。う、とひるんだように光が揺れる。

「ご、ゴメン……普通に消せると思ったんだけど、あの火、魔術じやなくて精霊術で出したものでしょ。しかも繋がりが強化されてる状態で」

「……ああ、火の精霊との簡易召喚ならやってるが」

「はあ、今はこの場に水の元素が多いから火を消せたけど、あんな濃密な霊力を宿した火、ホントならもつと消すの苦労するんだよ？

これでもギリギリのラインを見極めたつもりさ」

「お、おい、とりあえずなんだ。これで依頼は達成……ってことでもいいのか？」

完全に蚊帳の外だったイーエンは、戸惑った様子で頬を掻いている。マコトは頷こうとして、ミコトのポーチがまだ膨らんでいることに気がついた。

「……いや、この向こうの泉にも浄化剤まかなきゃいけないから……

…まあ、うん、トリル、イーエンと一緒に行ってきてくれ」

『ほっほ、分かったぞい。ほれイーエン、マコトから薬をもらったら僕の背に乗れい』

またぼふ、と巨大な獣の姿に変身したトリルは、ぐいぐいと鼻先でイーエンの腰の辺りを押した。転びかけたイーエンだったが、なんとかマコトの傍までぎくしゃくと歩いていき、ミコトが持っていた分の薬を受け取った。

「じゃ、行ってくる、なあ!？」

薬を手にして、恐る恐るトリルに跨ったイーエンは、マコトに向けて声をかけようとして急加速したトリルの上で悲鳴を上げた。あつという間に見えなくなった二人の姿に、マコトは無意識のうちのため息をつく。

「ふふ……あの少年は前にもここに来ていたね。方向オンチっていうか、見えて飽きない子だったけど。さらに面白い子を引き連れてきてくれた」

「そりゃどーも。……なあ」

「うん？」

だんだん透明になってきた青い光に向けて、マコトは険しい表情のまま問いかける。

「あなたは、この近辺の町村の人間が、この森で起こっていたことを正確に把握していたと思うか？ ……いや、正確に把握してる人間がいると思うか？」

「いるだろうね」

即答だった。マコトの表情がより歪む。

「私の力を削って、あの馬鹿悪霊はずいぶんと派手に立ち回ってくれているみたいだから。ギルド、だったか？ 様々な能力を持った人間が集まる組織。あれならば、この森で何が起こっているのかわかるなど、容易いことだと思うけど」

「……そーかい。全く」

棍を入れるケースを胸の方に移動させ、武器の類をすべて収納してから、マコトは気絶したミコトの体を背負い上げた。茂みの向こ

うで、トリルの背に乗ったまま手を振り回しているイーエンが見える。おそらく、浄化剤をまいているのだろう。

「じゃ、あたしたちはこれで帰る。あんたも、力が弱いうちにまた他の悪霊とかに取り込まれないよう気をつけるよ」

「うわー、洒落にならないお言葉。君はなかなか男前だね？」

だんだんと、精霊の声がかすれてくる。それに反比例するように、イーエンの悲鳴が近づいてきた。

「それじゃ……また、その子に会わせてくれるかい……僕も、なんだか、その子の力に、なりたく、なってきたよ……」
「わかった。お互い気力が回復した頃にな」

そうマコトが答えて、口元に微笑を浮かべると、姿の見えない精霊が満足げな表情を浮かべているかのような気がした。

完全に精霊の光が消えたものの、先ほどよりも明るみが増したかのように思える泉のそばを見渡し、一言。

「うっし、帰る」

(21) くクエスト完遂、ちなみにフラグも立ちました(後書き)

というわけで初・人外とのバトル。マコトはかなりクールにやっているように三人称では思われますが、実はここで最初から、とどめを刺さずに問答しようとしてる時点でまだ『命を奪う覚悟』ができてません。

あと……フラグってというのは、わかりやすいのは精霊フラグかな？

あと精霊自身がなんか言ってるしね！

(22) カミングアウトは複雑かも

「……………」

「つて、え、何、それなに？ え、マコト？」

「お姉ちゃん……………」

後日、支部長室。

フィンコードの森での依頼を終え、依頼料だのなんだのやりとりも完了し、さて一応支部長たちに報告してこようとなったところで、開口一番。

「あんたら、あたしたちが悪霊と会って知ってただろう」

沈黙。ゴードイス、タリハラ、グスタフの三名は、含み笑いを浮かべたまま何も言わない。だが、すでに呼び出されていたらしいラングス、カミン、ティアゴの三人は、それぞれどこかばつが悪そうな表情を浮かべていたため、答えは明らかだった。

「あたしやミコトは、この町の中の情報を集めるだけで精一杯だったからな。イーエンの方は知らんが、こいつの性格だとあたしに付き合っでの鍛練ばかりで情報収集を怠った自滅だと思っているが」

「ぐさっ」

「行った後、ちよいとフィンコードの森に関する事で調べてみた。例の依頼をしてきたグループとやら以外からも、あそこに関してはそこそこな苦情というか、危険だという警告をしているところもあった。その警告の中に、悪霊が絡んでいるかもしれないという記述があるものがあった。それも複数。フィンコードの森は『荒神の槍』の管轄でもあるんだろう。森で起こっている異変が、ただの自然現象なのか、それとも悪霊絡みなのか、調べていないわけがない」

「結構。そう、私たちは知っていたとも。その上で、君たちの実力と悪霊との力を見極めた上で、成功してくれるだろうと確信を持った。だから、この依頼を受けさせたのだよ」

しゃべり続けるマコトを片手で制し、グスタフが静かな声で答える。

「ランギスやティアゴたちにも話はしていた。話をしたと言うだけで、彼らに決定権等は無かったがね。彼らは君たちのことをひどく心配していた。彼らに非はない。彼らが君たちにこのことを伝えなかったのも、私たちが口止めをしていたからだからな」

「……ふーん、で、そこまでしてあたしたちの実力を計って、一体どうするって?」

うるたえるミコトとイーエンのことは放っておいて、マコトは一人、淡々と話を進めていく。その姿勢に好意的な感情を抱きつつ、グスタフはゴーデイスへと視線を向けた。

「では、支部長から彼女たちに」

「ああ。今回のものは少しばかり異例の形となったが、実力を計る分には十分すぎる試験だった、……そういえば、マコトの方はわかるかい?」

「……………え?」

今度は、マコトがきよとんとする番だった。『試験』。その一言で、この依頼達成にどんな意味が込められていたのか、察してしまつたが故に。

彼女が理解した上でその表情だと言うことに気付いたゴーデイスは、その後ろでパニックに陥りかけているミコトとイーエンに声をかけた。

「ミコト、イーエン、落ち着きなさい。マコトだけが聞く話ではないのだからね」

「は、はひっ!?!」

「え、ええと、結局、その?」

戸惑う二人の声に、一拍遅れて、マコトの解説が入る。

「……つまり、試験ってことは、この依頼はギルドランクに関するものってことか? 例の、実力判定試験のような。しかも、異例……ああ、『デル』のランクは試験が必要ないはずなんだもんな。ていうことは、あー、異例だらけじゃねーか」

「え、判定試験?」

話の筋を理解した二人の動作の一切合切が緊急停止する。ゴーデイスは、そんな少年少女たちの様子をおかしそうに眺めながら、解答を述べた。

「マコトもミコトもイーエンも、ランクを上げるためにはこなしただ依頼が少なすぎてね。ただ、実力だけはランク以上だと、君たちに関わった人達から聞いていたから、こんな乱暴な手段をとらせてもらった。おめでとう、ミコトとマコトは今回の試験にて『デルの2』、イーエンは『デルの1』に昇格だ。そして……」

ゴーデイスがそこで言葉を切ると、壁際で直立不動のままだったランギスが、素早く支部長机へ近づいた。マコト達に向き直り、続きの言葉を口にする。

「今日から、君たち三人をグループの一員として引き受けることになりました、『白刃』リーダーのランギス『ドルトメア』です。って、

改めて言うことでもないんだけどね。イーエンもまたグループ所属になつていなかったみたいだから、勝手に引き入れさせてもらったよ。さすがに『デルの1』で所属無しはキツイからね」

「あっ、ありがとう、ございます……」

なにやら急展開の中、さらにランギスと同じく壁際にいたカミンとティアゴが近づいてきた。

「そういえば、こいつも確保したからね。『ソロン』ランクのくせにフラフラしてたとか信じらんないんだけど！」

「いや、俺団体行動苦手つつうか、まあ単独でもたまにとつかのグループに混じって、依頼料のおこぼれもらえればラッキーとかそれぐらいしか考えてなくて」

「そういうの意外と困るのよ！ あんたの性格からして、計画練つてたグループに無理矢理ねじこむなんて馬鹿な真似はしてないと思うけど、それでも無所属のヤツのぶんまで考えて行動するのって難しいんだから。責任のやり場とか。……て、まあそこらへんはいいとして」

カミンはがっしとティアゴの肩をつかんだまま、この場にいる誰よりも満面の笑みを浮かべて告げた。

「マコトも、ミコトも、イーエンも。ようこそ『白刃』へ。これからもまたハードな生活になるわよ！。なんてつたつて金欠だから、うちのグループ！」

「……………」

「ミコト、何も言わなくていいから。そんなめっちゃ責任感じてますみたいない目で見ないで。もとは全部ランギスの判断……………いやでもマコト達拾ったのは思わぬ収穫って感じで、いやもう結果オーライ？ だからそこホント、笑って笑って！」

『金欠』という言葉に反応して、一気に表情を暗くさせたミコトに対し、カミンが慌ててフォローをする。その隣でぼりぼりと頬をかいていたランギスは、くるりとその場で身をひるがえすと、ゴードイスたちに向き直った。

「では、支部長。話はこのあたりで？」

「ああ、あとは明日にでもゆっくり、メンバー同士で話し合うといい。」

穏やかに答えたゴードイスに一礼して、ランギスはぎゃいぎゃいと騒いでいるカミンやミコトたちを部屋から追い立てた。そして、『白刃』に所属するメンバー全員が支部長室から出たところで、ずっと目の前に現れた仏頂面のマコトに目を丸くする。

「……なんというか、いいのか？ こんな特例ばかりやらかして」「うーん、これを決定して実行したのは、あのお三方……」というか、支部長と総括師長だからね……彼らに逆らえる人材なんて、この町周辺にはそんなにいないし、しかも内部事情だし」「そーか」

マコトは相変わらずの仏頂面で頷くと、まだ何かと興奮していてやかましいイーエンの頭を殴り飛ばし、ミコトの口を塞いでズルズルと引きずっていった。その後ろを「待ってとくれー」とよるよる歩きなトリルが続く。イーエンは気絶しかかっているし、ミコトは段々顔色が悪くなっていくが、マコトのことなのでちゃんと手加減はするだろう。

「さて、彼らは彼らで、細かな指示はまた後日出すことにしよう。あと他の面々も呼んで労いと歓迎のささやかなパーティでもしてあ

げようかな。頼めるかい、カミン」

「いいわよー、なんならコイツに『白刃』ルールもいっしょくたに叩き込んでやるわ」

「げ!?!」

「それは心強いね。じゃ、任せたよ」

「ちょ、待て待て待て待て!!! おい、ランギス!? この女ゼツてえ体罰つける、覚えろツツツって俺が前衛であるのをいいことになんか打撃系の魔法打ち込んでくるぎゃああ!!!」

「うっさい黙んなさいっ! ほーっほっほ! やったわフォートラに続いて下僕二号の調達よっ」

「ぎざぎざけんなあああ!!!」と叫ぶティアゴは、カミンに何か浮遊系の魔術をかけられて、マコト達と反対方向に向かっていった。それぞれ同僚となった者達の姿が廊下から見えなくなったところで、ランギスはすぐ側にある上り階段を目指す。

(で、私はまたダラダラと書類仕事……はああ。レイチエルにまた苦労かけるなあ)

今もせつせと『白刃』に割り振られた作業部屋で、細々とした仕事を続けているであろう本職：神官の仲間を思い、ランギスは軽く頭を振った。

やっぱり、気晴らしにパーティイくらいしなければ、やってられないかもしれない。

(22) カミングアウトは複雑かも(後書き)

というわけで、初クエストのお話しは一件落着。

こうやってちよいちよいランクは上がっていきますよーと。ていわれても、実は『デルの3』ってかなり下っ端なイメージなので、彼らくらいの年齢でも『デルの2』くらいは普通なんです。ほらいきなり出てきたイーエンだって『2』からだったし。

『デル』ランク内での壁は低いのですが、『デル』から『ソロン』へアップする道がちよいと険しいのですよ。

てなわけで、ギルド内での居場所も(ほとんど分かっていたようなものとはいえ)正式に決定しましたーわー。

……さて、次回からまたダラダラ別のクエストをやらせるか、間話を書くか、それとも次のブロックの話を書くか。

間話(1)　　ウエルカム・パーティー！(前書き)

番外的で、短めです。

間話(1)　　ウェルカム・パーティー！

「それで、草がしゅるーっと伸びてきたところを、ミコトの魔法がぶああつと片付けちまって！」

「い、イーエンくん、あれ全然、私、制御できてなかったし……あ、あんまり話さないでってばあ」

食堂に近い場所にある、グループ単位で使用するのが主な大部屋。いくつかこのギルド支部に設置されているこの大部屋は、基本的にはお堅い目的で使われることが多いのだが、今宵『白刃』が借り受けたその用途は……歓迎パーティー。

とりあえず今いるメンバーをかき集め、事前に食堂に注文をしていたりと準備を整えたおかげで、大きな円卓と椅子ぐらいしかない殺風景な大部屋は、あつという間に和やかな雰囲気にも包まれた。

『白刃』に所属するメンバーはそこそこにいるらしく、マコト達がすでに会っていたランギス、カミン、ブルブや今回所属する流れとなったティアゴ以外にも、六名ほどの人間が集まっていた。本当はあと二人いるそうなのだが、他のグループの人間と共に長期依頼に向かっているため、招集をかけられなかったとのこと。

「おいマコトー、お前何はしつこで黙々と食ってんだよ」

「んむ、お腹空いた」

「……いやいや、お前だって初めて会う奴らばかりじゃねーの？俺はうるちよろしてたから、ちよいちよい会ったことある奴らだけだよ。ほれ、挨拶ぐらいしてこい。先輩なんだからな」

「……………わかった」

ティアゴに追い立てられたマコトは酷く渋々といった様子で、椅子から立ち上がるとフラフラと人の輪に近づいていった。それに気

づいた一人の青年が、声をかけてくる。

「やあ、君がマコト？」

「そう」

「初めまして、俺はフォートラン＝バドリオ。『デルの2』で剣士なんだ。よろしくね」

「こつちこそ、よろしく先輩」

そうだよなー、先輩なんだよなーと先ほどのティアゴの言葉を思い出しながらマコトはにゅっと右手を突き出す。と、突然目の前でフォートランが崩れ落ちた。

「お、おい？」

これにはさしものマコトも少々驚かされ、思わずどもってしてしまう。すると、床に伏したフォートランは次の瞬間がぱりと起き上がり、しっかりとマコトの手を握り返した。わざわざ両手で、顔をぐしゃぐしゃにして。

「わ、わあああこつちこそホントよろしくよろしくよろしくねええええっ！！！！　せ、せんば、ぜんばいなんで俺が言われる日があるなんてえええええ！！！！」

「ちよ、落ち着け」

とりあえず、一発側頭部を平手打ちしておいた。本当はグーでやりたかったが、これでも我慢したのである。

また別の理由で床にうずくまったフォートランを見下ろしていたマコトは、ふらふらーっと思慣れた影が近づいてくるのを見て首をかしげる。

「カミン？」

「うっふっふー、なーんか下僕一号の幸せーな声が聞こえてきちゃったわよあー？」

「誰が下僕かつ！！！！」

とつさに回避行動をとったフォートランだったが、しかし魔導士であるカミンのほうは何故か動作が速かった。起き上がるうとしたフォートランの後頭部につま先で蹴りを放ち、悶絶した彼の背中にその足をどっかと乗せる。

「ほーっほっほっほ！！！！」

「カミンどうした乱心か！？　って酒クセエっ！？　なんだこの酒乱！！！！」

「うう　あああああもうやだあああああ！！！！」

酒瓶片手に赤い顔で高笑いをするカミンに、泣き叫びながらも彼女の足の下から逃れられないフォートランの図にドン引きしたマコトは、ツッコミもほどほどにそこから退散した。

「ああ、一体誰でしょう、あの人にあんな度数の高いお酒を飲ませるなんて」

「自分だが」

「何やってんですかお馬鹿ですかあなたは！」

退散した先には、酒乱カミンを見て何やら小声で言い争いをしている男女がいた。彼らは近づいてきたマコトの姿を認めると、口論を止めて彼女に向き合う。

「こんばんは、マコトさん。私はレイチェル・メルホルン。『ソロンの3』の神官ですわ。主にデスクワークをしていますの」

「自分はエウゲン＝ポラス。弓士で『ソロンの2』だ。ちなみに、君はあれの被害をほとんど受けずに済んだようだな」

あれ、とエウゲンが指さす先には、酒乱の光景。

「……ポーツと見てたら絡まれるってことですか」

「その通り、第一犠牲者になることを免れたなら、さっさと離脱するのが賢い。というわけで君は合格だ。まあ、フォートランが近くにいれば大体アイツに絡むからな。幸運だったな」

「全くもう、ほとんど確信犯ですわねコイツ……」

もしもし丁寧言葉のメッキが剥がれかけていますよ、とはなかなか言えないマコトだった。

「あ、お姉ちゃん！」

そこへ、イーエン達と会話をしていたはずのミコトが飛込んでくる。

「おっと、どーした」

「あのね、お姉ちゃんも頑張ったところ話したらすごいなーってみんな褒めてくれたよ！」

「なんて言っただお前」

苦々しい表情を浮かべたマコトの腕をとって、ミコトはずんずんと自分がいた集団へと戻っていく。その間にも、彼女のマシンガントークが止む気配はない。

料理と酒と喧騒に囲まれて、さしものマコトも、よづやく心からの笑みを浮かべたのだった。

間話(1)　　ウエルカム・パーティー！(後書き)

メンバーがいつぱい出てきましたが、今記憶しなくても全く問題ありません。とりあえずフォートランは不憫という項目だけでいい気がします(オイ)

次話は少し時間の流れをはやめて、次なるクエストにとりかかろうと思います。

そして、転換期です。

ここにて『現代っ子パーティ・クエスト!』のプロットおよびストックが完全に消えました! よって、ここからはまたストックが溜まるまでか、あんまりにも更新停止が長い場合は不定期更新となりそうです;

それでは皆様、しばしお待ちを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8251o/>

現代っ子パーティ・クエスト

2011年7月1日06時56分発行